

62  
402

早稻田大學三十九年度  
志理科第二學年講義錄

人類學

坪井正五郎

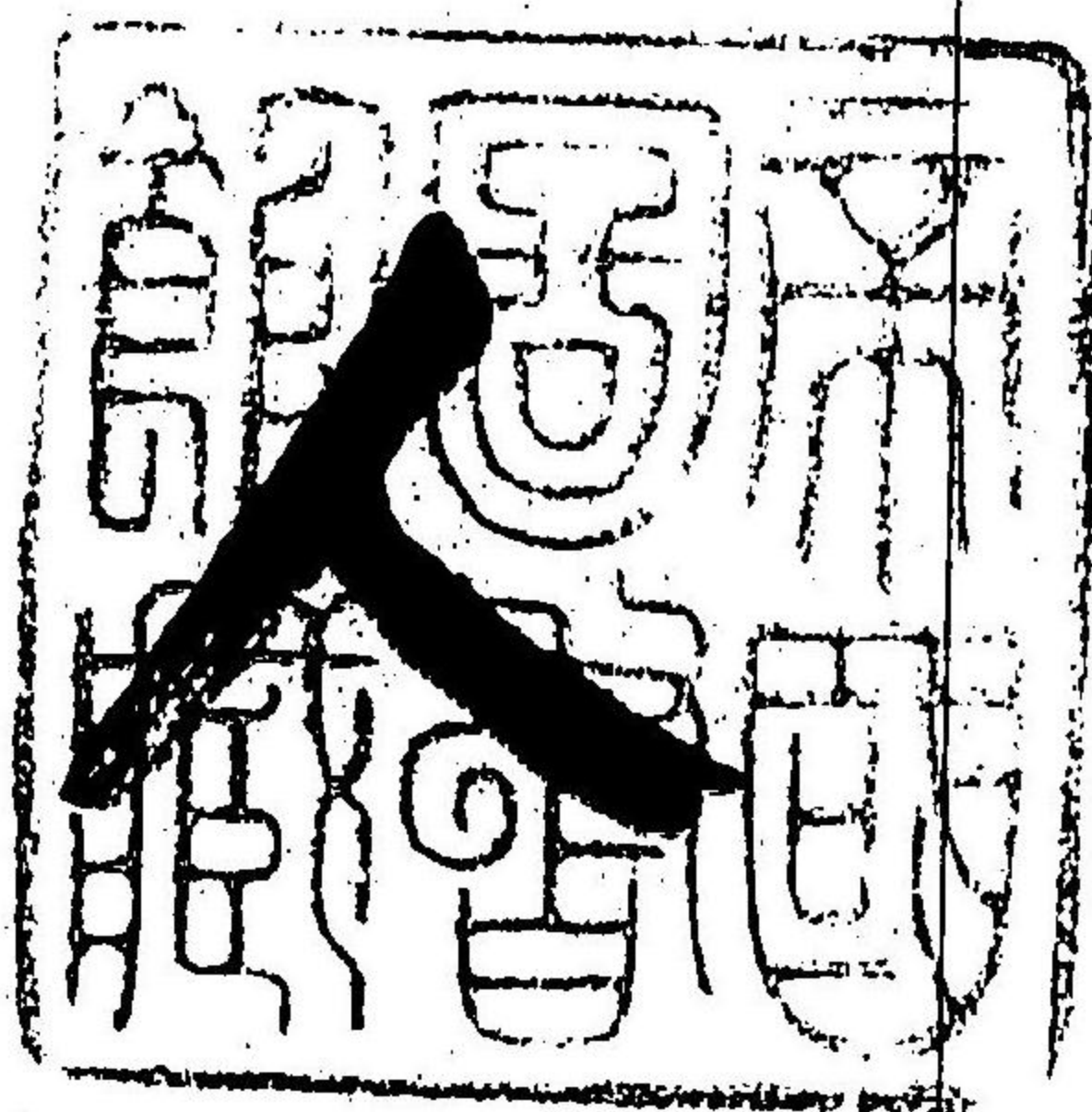
310537-000-0

62-402

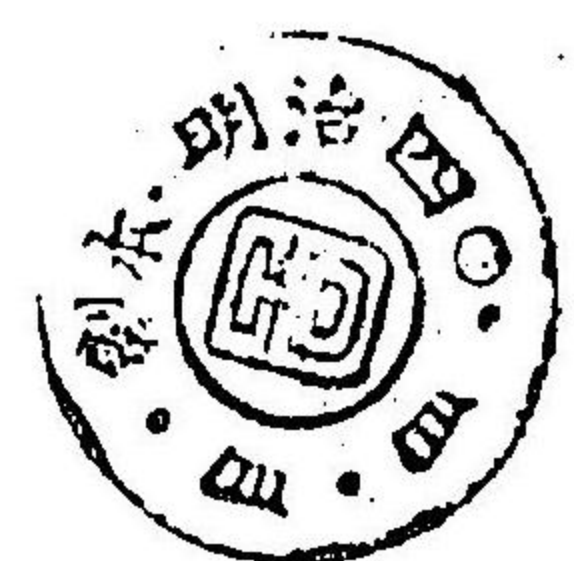
人類学

坪井 正五郎 講述

理學博士 坪井正五郎講述



# 類學



早稻田大學出版部藏版

目次

緒言……………一頁

總論……………一〇

人類本質論……………二四

人類現狀論……………五八

一 アジヤ系統人民……………八一

二 ヨーロッパ系統人民……………一〇二

三 アメリカ系統人民……………一四〇

四 アフリカ系統人民……………一五八

五 海岸島嶼住民……………一六九

目次終

# 人類學

理學博士 坪井正五郎述

## 緒言

先づ人類學の趣味といふとを申しませうが、人類學の趣味とは、いかなる點にあるかといふに、近い例をとりますれば、芝居を見るものが、舞臺の道具立を見、又筋書を見、而して役者の實際舞臺に登るのを見て楽しむ、これを人事に比較し、又今日まで人間の學問として見て居るところに當て、見ると、道具立は地理、筋書は歴史、はたらいて居る人類は役者に當るのであります。役者がある事柄を演じて居るのを見て、面白味を感ずるは勿論であります。然るに今日まで、筋書たる歴史と道具立たる地理とは、研究せられ進んで來たに拘はらず、働いて居る役者たる人類のはたらきといふものは、頓と忘れて居たのであります。

人類のはたらき如何を知ると、これが即ち人類學でありますから、そのいかに興味深

さものなるかは右の例を以て知られるてありませう。殊に現在我等自身が、その役者の一人なのでありますから、趣味の一層深かるべきは勿論のことと思はれます。以上は人類学の趣味といふとについて述べたのであります。次には、人類研究は、事實に於ても亦高尚なる快樂を得る學科であるといふとを申しませう。すべて人が自分の身邊にあるものに就いて、よく知ると知らぬとによつて、心の樂しみに多少があります。はじめての家にゆきましては、鄭重に取扱はれても居にくいもので、自分の宅うちであれば、何はなくとも心が安まります。又ひろく萬物を見ましても、多少それを知ると知らぬとによつて、興味が違ひます。吾人自ら人類であつて、人類とはいかなるものかといふとを知ると知らぬは、興味によほどの違ひがあるべきは、いふに及ばぬとであります。吾人は自然物をも使用し、自然力をも自由につかふ、この吾人がいかにして世界に出て、いかにして世界にあるか、即ちつゞめていへば、己を知るといふとは、高尚な快樂と考へるのであります。

次に智識の必要上、人類學は必要であります。日月星辰の行運に關しては、天文學によつて學ぶとが出來ます。又知らぬとは、天文學者に就いて知るとが出來ます。海陸山川の成立變動に關しましては、地質學に於て學ぶとが出來ます。又その道の學者に

就いて學ぶとも出來ます。金石に就いては、金石學、動物に就いては、動物學、植物に就いては、植物學など、皆それ／＼に就いて學ぶとが出來るのであります。然るにひとり人類のとに就いては、缺けて居るのは、智識の必要に於て缺けて居るものと云はなければなりません。されば他の學科との釣合を見ても、この學科は新たに研究を要するものと考へます。

從來の解剖學、生理學、心理學、言語學、社會學などいふこれらの學科が研究して居り、する、人類の諸性質の幾分かづゝを集めれば、人類研究とならうとの考も出ませうが、これらの諸學科は何れも人類を一の完全なものとして研究するものでありません。解剖學は人體の構造言語學は人類の持つて居る言語の組織發達等の研究であります。その他孰れも人類そのもの、研究ではありません。人間が身體からだでも言語でもない以上は、身體からだや言語等のとを、それらの諸學科にのみ任せて置くとは出來ません。それならば、諸學科を集めたらといふに、それを集めたゞけて、人類専門の學科とは申されません。恰かも大工左官などが集まりましても、間取まどりを引く、圖面えんめんを書く人がなければ、家は出來せん様なもの、又恰も一の味の宜しい汁じゆをつくらうとするのに、砂糖醬油味淋等を並べて、これで汁が出來たとはいはれません様なものであります。一定

の量を集めて之を混和して煮るといふ風の手續を要します。人類研究にも、これらのものを並べたばかりではなりません、統括を要します。人類研究は、どこまでも人類といふとを主題として研究するので、這般の目的のある學科がありませんから、よつて新たに研究の必要があるのであります。

學科の系統をたづねれば無論動物學の一部とせなければなりません。しかしかやうに論ずれば、動物學も亦博物學の一部であります、尙遑つていへば、これは理學の一つであります、ひろくいふ學問の一部といふことになります。學科系統よりいへば、近いところを考へますれば動物學の一つでありますが、ひろくいへば學問の一つであるといふとに歸します。しかし本草學が昔動物を合して扱ひましたものが、學問が進んで、こまかくなりまして、植物學動物學とわかれたのであります、それによれば動物學もこまかく別れなければならん筈であります、他の動物につきまして人類ほど委しく研究する必要はありません。人類だけは、特に離して研究する必要がありません。大きな店の番頭が支店を出すのと同じとて、無論動物學の外に於て獨立したものとするのが出來ます。尙他の學科の之に似たとを申して見ますれば、天文學は天體のといふもので地球も天體でありますから、その中でなくばならぬの

であるに、地理の研究は一般天文學者の普通の研究よりも研究するものが多く、又我等の常に接して居る事實も多い、故に地球の研究は天文學より獨立して地質學となつて居ります。人類學が動物學より離れて獨立するのも同じ譯であります。

次に人類學の應用のことに就いて云ひますが、人類學が趣味深き學科でありまして、又高尚なる快樂を與ふる學で、又他の智識に對する釣合に對しても必要であるといふとは已に述べましたが、その應用に就いて話しますれば、近く日本版圖内について考へて見ましてもわかります。北にはアイヌあり、中央には我等日本種族あり、南には臺灣土人と、支那種もあり、臺灣蠻人といふ古來の民もあります。これらを誘導する政治家教育家等は、これを諸人種の心の異同等を知つて取扱を別にするといふ必要があり、同じ扱ひをすれば失敗します。これらの失敗を救ふのは人類學上の智識の應用であります。かういふことの必要は何處の政治家教育家にも同じであります。醫者が病人の平生の身體を知つて居て施藥するのと知らずに施藥するによつて治療上に差があるのと同じとて、ある種族に施したとを他の種族にあてはめやうとする時などに必要であります。内地雜居外交等の行はれまする今日、内治外交に關する人は、益この必要があります。

他の方面より見ましても亦人間研究の必要があります。理學上の研究に従へば、人類の起源如何、又人類の古く居た土地如何、人類は大凡いつの頃よりこの世に居たか、萬物に對する人類の地位如何等を知るのと全く知らぬのとは、宗教家等にとつても大に關係するところであります。諸種族の心理上の性質、古來の習慣等をしらべるとも亦いかなる宗旨をひろげるに就いても、搜り置かんならんとてあります、ある種族に就いて古人の考へましたとを、他の種族に強いてあてはめんとしても、充分の結果を得ません。

人類學上の常識は、軍人にも必要があります。ある種族を兵として使ふのに、離れ離れに働らかせるがよいか、合せてがよいかは兵を率ゐる者にとりましても、又敵兵を知るにも必要であります。商人にも、諸種族のあらゆる差別を知る必要があります。これらを推し究むれば、人類學を知る知らぬに損得のあるのは明であります。素より學問の研究目的は、その學を進むるにあつて、應用は考へぬが、様々の違つた學問をなし、又それの職業をして居る人でも、注意さへすればこの専門學科の應用をすることが出来ます。人類學の研究は、これらの必要があるからやる必要がないからやめるといふとではありませんが、このことを告げて置くのは必要であると思ひます。

次に人類學上の智識をひろげるには、如何といふに、イギリスの人類學者タイラアは、人類學を普通學の一科としやうと申すのであります。タイラア氏の考は我等とは違ひますが、とにかく人類研究の結果を普及する方法として、教授すべき事柄の多い今日、更に新學科を授けやうとするのは困難に見えるかも知れぬが、むしろ勞をふやすものでなくて減らすものである、荷を擔いでゆく人を見るに、背に杵を用ひて、それに荷を懸けて荷なふのである、他の方法よりは擔ぎ易い利があるからである、人類研究といふとを入れねば、歴史とか地理とか、つながらぬに、これを入れれば一つに纏まつてしまふのである、恰かも杵を背につける様なものであるといふのであります。まして、これはよく云ひあらはしたと思ひます。

氏の所謂人類學は、あるひは人種學の一部、社會學の一部、言語學の一部といふやうに、種々のものを並べたものを人類學と申して居るので、一の目的を持つて居るものとは見做されぬが、しかし何れも人類研究に關するには相違ないが、かういふ考を以ても他の學科をよせあつめる力があると承認されて居る位であります故に、もつと判然たる意味を持つて居る人類學なら、尙更よくこのたとへにあてるとが出来ます。それで一見何の關係もなきやうな言語の調査と解剖生理との關係も、人類を中心に

置けば悉く結ばれると出来るのであります。故にこの學科を普及させるには普通教育の學科中に入れるとは宜しいが今俄かに用ふるにはむづかしい、教へるとも困難であります。教科書もなし、學科の組み合はせ、時間の工合などで、すぐにこの學は置くといふ譯には参りません。そこで何か便利な方法はないかと申しまするに、考へればいくらかもある。まづ歴史を教へる人は主として記録、この方を述べるのはあります、その前に太古の人のとを申し、人類發達のとを申し、後に記録を残すまでに發達して來たとを教へるとが出来ます。又地理を教へる人は各土地のとを述ぶる時、そこに住つて居た人類のとを併せ云ふ、又地文學のとを説く時、海のとをいふとき、人類の移住との關係、分布との關係、地層を説くとき、人類の遺物のとをいひ、動物學を教へるものが、人類と諸動物との分類上の關係、人口の分布と諸動物の分布とを説くといふやうにすれば、特に多くの學科を置かずとも、學ぶ者に人類學の智識を與へるとが出来ます、生徒は知らず識らずの間に、人類學のとを幾分か知るとが出来ます。特別の人類學といふものを置いて、諸學科と共に學ばせるとが、背に棒やを持つて荷を負ふに當らば、今、いふところは風呂敷包又は細ちからげ位には當りませう。この學の智識を得んには種子たねはどこから取るかといふに、これはよい書物も少く、又

八

書を見る方にも標準を定むる必要がであります。人類を目的として居るとを、どこまでも考へて居るとが必要であります、そのとさへ考へて居りますれば、新聞雜誌を讀みましても、人類はいかなるものかを知るとが出来ます。唯書名のみによつて見るときは、人類研究に悖つた考を得る患があります。故に人類學研究者は、人類學はいかなるものかを心に定めて、適當な書を読みゑらぶ必要がであります。即ち人類研究は如何といふとを定め、それを以て研究する様にすべきであります。以上を緒言と致します。



今も云ふ通り、人類學研究者は主義を定めるといふとが必要であります。と申すわけは、定義を申せば知れます。我等が常にいふ定義は、人類學は人類の理學なりといふだけで澤山であります。しかし他にはどういふ定義があるか、又なぜかゝる簡単な言葉を以て意を盡して居るかを一通り申述べませう。

フランスのブロカ(Broca)は、人類學は人類そのもの及び人類と他の萬物との關係を考究するを以て目的とする理學であると申して居ります。イギリスの人類學者ベンヂン(Bendish)は、人類學は人類のみの表出する現象にして、ある法則に歸するを得べきもの總體に關する理學であるといふやうに云つて居るです。イギリスのワレス(Walace)氏は、人類學は人類を動物として、又道德智識を具へたるものとして、下等生物に對し、同類に對し、並びに宇宙に對する關係を考究する理學なりといふて居ります。ドイツのワイツ(Weit)氏は、人類學はその名の示すが如く人類總體に關する理學、尙適切にいへば人類の性質に關する理學であると云つて居ります。この他いくらもありますが、大體先づこんなとてあります。言葉は此の如くいろいろ、あるひは長くいひ、あるひは短く申しませんが、とにかく人類學は人類の理學である

といふとに過ぎませぬ、あるものは人類といふとを敷衍して申し、あるものは理學といふとの説明をして居るのであります。理學といへばいづれ、そのもの及びそのもの、周囲との關係を研究するものでありますから、單に理學と申せばこれだけの意味は含んでしまふ、人類學は人類の理學也といふ簡単な言葉だけでは、即ち人類學は人類學也といふに過ぎぬわけで、定義の用はなさぬと難ずる人がありますが、人類學は人類學也と知れれば結構、其事は次にいふところの、人類學の名實に就いて之を明にするのが出來ます。

人類學とはイギリス語ではアンソロポロジイ(Anthropology)、フランス語ではアンソロポロジイ(Anthropologie)、ドイツ語ではアントロポロギイ(Anthropologie)と申しまして、つまりはギリシア語のアンソロポス即ち人、ロゴス即ち論といふ語から成り立つて居ります。この言葉は古來様々に用ひられました、フランスのブロカもこの注に注意して、この學問の基礎即ち人類研究の基礎が定まらなかつた時分には、アンソロポロジイといふ名はいろいろ異なる意味に用ひられて居た、これは人といふものが種々の點より研究するに於て、以來るからである、ギリシアの古い頃の哲學者は、人の心理上の研究、或は身體上の研究によつて人の性質を論じた故を以てアンソロポロジス

トと呼ばれたとがある。近來の哲學者中にはアンソロポロジイを心理學と同義に用ひて居る人がある。又この名を解剖書、生理書、衛生書等に帶ばしめて居る人もある。ある辭書には人體の記述と解し、ある辭書には人類の自然史と解釋して居ると云つて居ります。アメリカのパウエル(Powell)もアンソロポロジイといふ名は最初神學上、人類關係の説の總稱であつたが、後に理學者が借りてつかふに至つた。そこで新たにこの語に與へられた意味は、人類を動物の一としての研究といふとであつた。その意味に初めてこの語を用ひられたのは、人種のしらべ、即ち人類の分類といふとが盛に行はれた頃である。しかし一人種と一人種との間には判然たる境界といふものは認められぬとのが知られてより以來、この人類分類の研究の爲に集められた材料總體を取扱ふ學問、言ひ換へれば人類の理學的の全體をアンソロポロジイと呼ぶに至つた」と云つて居ります。人類研究の一として、人種の差をしらべるときが盛であつて、來まして、人種別なやつたが、此目的以外に、いふとが、少くも、開へ方が、あるの、で、それらの方、いふ様になつたと云ふのであり、ます。

右の兩氏の述ぶる外、尙このアンソロポロジイに、いろ／＼の意味をつけられて居ります。この三四百年來に出來たものに就いて、我等の見たところを擧げませうに、あ

る書には人體解剖と意味をつけてあります。あるものには人生研究にこの名を命じてあります。又心理學と解剖學を總稱してあるともある。又前にも申しました通り、全く心理學のとをいつてあるものもあり、又解剖學、生理學、衛生學、心理學の四を含めてこの名を以て總稱したのもあり、又ある美術家は、ギリシヤで發見する古い壺の表面にある人物畫の研究にこの名を命じました。又エンゼルと人類とサタンのとを總括して書いてあるものに聖書のアンソロポロジイと命名してあるものもある。又アメリカで出來ました秘事のアンソロポロジイといふ書は、生理學、解剖學、衛生學、戀愛論を含むて居ります。これらを見て、アンソロポロジイと云ふ者がいかに違つた意味に用ひられて居るかを知らるとが出來ます。

されば意義如何に構はずこの語を人類學と譯する時には、その含む所は非常に廣くなります。それで日本でこれまで世に公けに成つて居る書にも人類學といふものがある。古くは高橋五郎氏の人類學、近くは山田寅之助氏の人類學(翻譯)といふものがあります。が、我等のいふのとは大に違ひます。特に山田氏の書には、人類學及び罪惡の教理を論ずるものなりと有つて、我等には思ひも寄らぬ事であります。これらから觀れば、我等のいふ、人類學は人類學也といふに等しい定義も決して無用で無い

事が悟れませう。

以上は人類學の名稱が、いかに様々に用ひられて居るかといふ例であります。これに次いでいふべきとは、人類學の實體といふとあります。この學問は天から降つて來たものでもなければ、地から湧き出したものでもありません。源があります。アリストートル風には人類をば、鳥獸魚介と同じく動物の一として研究致しました。其説は動物史に載つて居ます。ローマのプリニイの博物學書中にも、人類のとがありません。スウェーデンのリンネ、フランスのブフォン、イギリスのゴオルドスミス等は、何れも理學的の研究を人類にあてはめた人で、何れも博物學の一部として書いて居ります。却つて今日の博物書には、昔ほど人類のとを悉しく書きませぬ。ブフォンの時にはじめて人類のとの研究を、とにかく書物を別にして書きました。これが西紀千七百四十九年のとであります。それには己れの意見を示すのみでありまして、研究の方法を書いて後人を導くなどのとはなかつたのであります。人類を研究し、かたはら研究法を後世のために残したのはドイツのブルメンバッハでありまして、其書の公けに成つたのは即ち千七百七十五年のとであります。後諸國に種々の學者がออกมาして、近年に至つて人類研究のとだけは普通博物學の一部とせず、特別のととして人が注目

するに至つたのであります。しかし尙未だ明らかに獨立の學問と認めない人が有つて、ある時は地理學中にかくれ、ある時には人類の歴史、又は人類の自然史、人類の研究、人類の理學、人種學等の名を以て呼ばれるともあります。人類研究は斯く古く違つた名で呼ばれたともあり、又違つた學問中にかくれて居たともありますから、一方に於ては人類學といふ名を當てにして書物を讀めば大に違つて居るとがある。同時に、違つた表題の書物を見て人類學の潛て居るのを發見するとがある。故に人類學研究者はどこまでも此學問は其名の如く、人類の學であると思つて、書名によらずして書物を見るやうにすべきである。これが極めて肝要のとであるのです。

次に人類學の部門のとを申しませう。人類學は既に申しました通り、人類に關する研究をなす學問であるのですが、人類に關する研究といつても實に様々のとがあつて纏まりがつかませぬ。故にその中を幾個かの部門に分つ必要があります。動物學でいへば背骨のあるものと無いものとにわかち、植物學に於ては隱花顯花にわか等の如く分つ必要があります。然るに茲に注意を要するは、凡そ一學科中に部門のあるといふとに就いては二つの考ふべきとがあります。一はある定まつた目的を持つて居るものをその目的を達するに便なるためにわけるといふと、一は様々

の研究事項を集め括つて、それに一つの名をつけるといふとであるのです。一國の政府は國民の安寧幸福をはかるための組み立てであり、その目的を達するためには大藏省とか文部省とかなどにわかれて居ります。又各省も何局何局といふ風にわかれて居ります。これは一の目的を達せんために分つところの例であります。又擊劍柔術乗馬などいふものは各別々の事柄であるですが、これは悉く武藝といふ名を以て呼ばれて居ります。これは武藝といふとを先に考へてそれを分けたのではないのであります。學問上のわかり、名稱、即ち何學といふものが幾個かに分けてあるそのわかりでもこの二つの見方があります。人類學の分ちに就いても、この二つの別のあるとを注意せねばなりません。

前述の心理學、解剖學生理學、衛生學等をあつめて人類學といふ名をつけるといふ如きは、即ち擊劍柔術などを武藝といふ名を以てよぶと同じ呼び方で、人間といふとに縁故を持つて居るといふとのために名けたのであります。イギリスのタイラーの仕方はこの方であり、氏は社會學、人種學、比較宗教開化史の研究等をよせて、それにアンソロポロジイなる名を與へて居ります。定議を與へるときには人類學は人類の自然史なりと云つて居りますが、氏の記して居る事實を見ると斯うなのであ

ります。アメリカの人類學者でオウエン、バイク(Owen Pike)の如きは先史考古學、言語學、神話研究、心理學、及び體格研究を總括して人類學と呼んで居ります。又アメリカのブリントン(Brinton)は人類の動物學的研究、開化の研究、土俗の研究等を併せて人類學と呼んで居るのであります。

此の如き分け方と、たとへば政府がその目的を達せむために各省にわかれるその別かれ方とは、表に書けば同様に見えるから甚だ混同し易いが、注意を要するとである。この二つの分け方は根本的に違つて居るのであります。

今我等の云はむとするところは、獨立の目的を有して居る人類學を一の學科として、その中に分類を致すとであります。イギリスのラサム(Latham)の業は人類學者のすることとして適して居りますが、その人は「人の自然史」と云ふのを總稱として之れを二つにし、一をアンソロポロジイ、一をエスノロジイと稱して居ります。人類と他の哺乳動物との關係を研究するのをアンソロポロジイと申し、諸人種相互の關係を研究するのをエスノロジイと申して、かく二つに分けて居ります。しかしこの二部分にはいづれの問題の残つて居ります。人類の起源、人種形成の原因、人種形成は根本的のものか、徐々ならぬものか、の研究等は入れ所がありません。又フランスのブロカは、人種に

就いての研究人類の全體に就いての研究と分つて居ります。しかしその實第二は第一をも含む故に殆んど部門の用をなしませぬ。イギリスのハント(Hunt)は人類學を三部に分つて人類發達の研究、諸人種現狀の研究、諸人種相互の關係の研究として居ります。これには人類の生物學的性質の研究自然に於ける人類の地位等は、この中の何れにも入れるとが出来ませぬ。アメリカのメーソン(O. H. Mason)氏は總稱を「人類研究」として、一、アンソロポジエニイ(Anthropogony)、二、アンソロポグラフィ(Anthropography)、三、アンソロポロジイ(Anthropology)、四、アンソロポノミイ(Anthroponomy)と分つて居ります。一は人類起源の研究、二は人類現狀の研究、三は人類分類の研究、世界の人類はいかに、四は人類天則の研究、人類の理の研究でありますが、この中には人種形成の研究が缺けて居ります。開化の發達のと、人智の進歩如何の研究もこの中にありませぬ。又終の四は別に置くべき必要はありませぬ。一、二、三の中に人類の天則の研究も含んで居る譯であります。從來學者の示しましたところの部門は先づ以上の様なもので有りませんが、これに従はうといふべきものは一もございませぬ。

我等自身の考ては、人類を研究する學問の部門を分つには、其目的を明かにし目的を達するに都合の好い様に分つたがよからうと思ひます。人類研究に拘はらず、すべて學問はある疑問を晴らさむとするところから起るのである。而して人類に就いての疑があつてこれを解かむために人類學は起つたのであります。てその疑は數多くして一々に並べされませぬが、歸するところ、三つとなるのであります。このとは他の學科にもあてはめ得るものと思ひますが、ともかく人類學のみに就いて申しませうに何であるか、どうあるか、いかにして斯く有るか、の三つであるのです。人類に就いてこの三つを明らかにするのが人類學であります。故に「人類學は人類の本質、現狀及び由來を明らかにするとを力める學問である」と云つても差支はありませぬ。されば人に就いての三大疑問に解釋を與へやうとするのが人類學の目的であります。人類の解剖、生理、心理等に關する研究、自然に於ける人類の位置等は第一に屬せしむべく、諸地方住民の容貌、體格、風俗、習慣の調査、人種別の研究等は第二に屬せしむべく、人類の過去の狀態如何、人種はいかにして出來たか、人類はいかにしてこの世に出來たか、これらの研究が第三に入るものであります。新なる事實の研究に着手するに於ても、研究の結果を講述するに於ても、かくの如き三分法を採るが然るべき事と思ひます。即ち人類學は人類本質論、人類現狀論、人類由來論と、かやうに目的の方から三部門に分かつことが肝要と思ふのであります。

次に引續き起る間は人類學の範圍のとてあります。人類に關するすべての研究と云つては廣いが、どのくらゐの範圍迄研究すべきか、世には廣過ぎて一人の手にあはぬとまで感じて居る人もある様でありますから、今此事を明らかにしやうと思ひます。これは人類學の目的といふとを知れば迷ふには及びませぬ、人類學者は解剖學者が人體の組み立てを明らかにするが如くに人體の事を知る必要はない、人と人ならざる者との異同を知るとか一人種と他人種との皮膚の色が違ふ工合はどういふ風で有るとか云ふ様な事を知るに於て必要で、他の細い事は一々知るに及びませぬ。又古物遺蹟の調査にちかましてもこれを遺したのは何と云ふ者か、これを造つたのは何と云ふ者か、などいふとは人類學の側より見れば必要のないとてあります、人種の移轉、人智の發達などといふとだけ知ればよいのであります。世人は往々あやまつて、人類學者が解剖のとを論ずるときは、醫者の様である、醫者の仕事に踏み込んで居る杯と云ひますが、それは各學科の目的の各異なる所以を忘れた話してあるので、醫學は人の病を治するのが目的であります、人類學はさうでありませぬ。言語調査に於ても人類の用ふる言語と、一般動物の思想を表述する方法とは、いかなる違ひがあるか、各人種の言語の差は如何之を生じた原因は如何等を知るだけでよ

いのであります。家の建築の例を以ていへば家をつくるに、間取りを考へ圖をひくものが、自から山に入り木を伐り、擔いで來て削つて穴を明け、又山から鐵を取つて來て、火で熔いて釘をつくり、又泥をこねて壁をつくる等の必要はないのである、これと同じわけて人類學者とて人類に關する何から何までを調べる用は有りませぬ。人類研究者は、人類研究の目的を明かにして、その目的に合ふところのものに通ずれば宜しい、悉くに通じて居つても害はありませぬが、強て知る必要はありませぬ、決して他學科と混ぜべきものでありませぬ。どこまでも人類學は前述の三疑問を明らかにするものと見れば迷ふ事はないでありませぬ、これに要するだけの材料を取ればよいのであります。人類學は古物しらべであると思ふて居る人もある様ですが、その誤なるとは已に申しました。又人類學者は猿をば人の祖であるといふが如き説を主張するものであると思つて居る人もありますが、かゝる説を立てる人もありませぬ、又悉く否定する人もありませぬ、どちらにしても人類學上の問題であります。人類學は人類に關するある特別の説を述べものにあらずして、苟も人類全體に關して説をなす時にはそれが人類學なのであります、決してある説のみを守るものが人類學者なのでありませぬ。又人類學者は吾人の崇め尊ぶべき神様の事

を輕々敷く扱ひはせぬかといふ取越苦勞をする人もありますが斯かる人々は定義を示せば安心させる事を得ませう。即ち人類學は人類の學である人間の研究である神様のとは研究外でありませう。人類學は神のみに就いて云爲するものではないのであります。斯かる餘計な心配をする人の有ると云ふのは人類學の讀んで字の通りなる意義を忘れたためであります。人類學の性質について誤の行はれて居るのは日本のみでなく他國にもあります。フランスに於ては人骨の研究が盛んで有る故にその研究者が直ちに人類學とあやまられ、イギリスに於ては領地が廣く殖民地が多くして、宣教師、軍人、貿易商などが各地に行きまして蠻人の風俗習慣等の報告などを齎らす事が多い故に、人類學者中其研究をする者が多く随つて野蠻人の穿鑿の事と思つて居る人が有ります。決して日本計りの事では有りませんが、あやまりを彼に倣ふ必要はありませぬ。

次には人類學の材料といふとを申しませう。すべてのものゝ材料は用ひやうによつてきまるのである。前からきまつて居るのではないのであります。一本の木を見て、これ何の材料なりと云ふことは出來ぬ。柱とすれば家屋の材たり、橋とすれば橋の材たり、焼けば薪の材料たり、初より之を何の材料也とはいふことの出來ぬものであります。新聞の事などには、曲玉を掘り出せば人類學の材料などゝ書きませう。或ひは史家の材料ともなれば、金石學の材料ともなる。美術家の材料ともなりませう。又玩弄物ともなりませう。必しも人類學の材料とは限りませぬ。初めから材料の方が極まつて居て、夫れを扱ふ人が何學者と云ふ様に考へれば、總べて曲玉をいぢる人をば誰彼無しに人類學者だなどゝあやまることになりませぬ。人類學は文字通り人類學で有るといふことを知れば、これらの迷ひは霽れ去るてございませう。

## 人類本質論

人類本質論といふのは、我等人類は抑何であるかといふとを研究するのであります。が、そのはじめに、人類とはいかなるものを指していふかと云ふ事を明かにして置く必要があります。一體文字で人類と書けば、人の類といふとで、無論世界全體の人の總稱であります。ところがひとといふ言葉は日本の言葉で人の字は支那の字であります。さすればその起源より人といふとひとといふ言葉と已に一して居たと考へられぬ。今我等は世界にある同類を呼んでひとと云ひ又人の字をあてゝ居ますが、これは段々と範圍が廣くなつて含ひに至りましたので、元來はこの語の字の含む所ではなかつたのであります。されば後世に至つて人といふ字の意、ひとといふ言葉の意が、かはつて來たといふことを知つて置く必要があります。古人の所謂人といひ、ひとといふ意味と、唯今の人といひ、ひとといふ意味とは、意味が違つて居るといふことを知つて置く必要があります。日本でひとといふには、十ばかりの意味があります。

一、我等同類、即ちひろくいふところの人

二、世人。

三、他人「人のふり見て我がふり直せ」などのひと。

四、ある人「人が來てまじ」などのひと。

五、ある格段なるもの「強い意味でいふ時のひと」は、この種の意味を持つて居ります。安宅の謡曲中の「あはれ」の「あはれ」は、この種の意味を持つて居ります。候程に「と云ふた」の「あはれ」は、この種の意味を持つて居ります。持つて居ります。ある格段なるもの、即ち「あはれ」といふ意味を

六、行正しきもの「人となれ人、人となせ人」など、古歌にあるひと、又「あれは人でない」などいふ時のひとなど。

七、大人「又は成人」「小兒が生長して人と成る」のひと。

八、夫妻「夫のひとを」といふ時。

九、臣下「君に對して臣下をいふ」といふ人。

十、召使「主人が召使をいふとき、人を遣はすなどいふこの人。」

これらの十種は、我等が常に聞くところであり、他にもまだ多くあるてございませう。故に唯ひとといへば、この中の何れかは、わからぬ譯であります。一の意味は最もひろく、二以下十までは、ひろい意味のひとの中より、特に制限を立てたので



ありまする、何れも皆人類といふことではあるが、それに多くの又は種々の制限をつけたのであります。

今人類學でさすひとはこの十種中の第一の意味のひとであります。然るにこの第一の意味のひと、即ち我等同類をさしていふひとは、範圍が段々と變化してゆきまする。知識の廣狹で意味が違ひます。初めてひとといふ言葉のつくられ又行はれるやうになつた時に於ては、その中に含まれる者は今日でいふ日本人丈で有つたと云つて宜いで有りませう。他と交通するに随つては是は、日本の人これは他國の人と區別するに至りましたせうが、それを知らぬ間はひと、即ち日本人日本人即ちひとと考へられて居たに相違ございませぬ。ところが支那文學が我邦に入るに及びまして人といふ文字の含んで居る意味がひとといふ言葉の含んで居る意味と互によく似て居ましたから、初めは似て居る位に思つて居つたてでありませうか、遂には合體してしまつたのであります。さうしまするとひとといふ意味の中には人の含む意味もはいつて來たのであります。又人といふ文字について居る意味の外に、ひとといふ言葉について居る意味も人といふ文字の意味につきました。そこで人といふ言葉の意味を知る必要が起つて來ます、人の意味は尠くとも左の五種あらうと思ひます。

思ひます。

- 一、我等同類全體「人誰か過なからむ」
- 二、支那人「天に十日あり」などの人。
- 三、賢者「人が無いとしか」人を得
- 四、他人「己を修めて人を責めざれば、難を免る」などいふ時の人。
- 五、あるもの「誰とさふなどいふ時の人。」

また他にもありませうが、重なるものは斯んなものであります。人には尠くもこの五つの意義があります。この中のあるものはひとの意に違つて居るものもあります。人即ちひとといふとになれば兩方の意味が含まれてしまひます。而して支那人の思ふて居た同類全體は、日本人の思ふて居た同類全體よりひろいのであります。支那では日本の如き島國とは違つて居りますから、古くから諸地方に人類の住んで居ることを知つて居たに相違ないのです。因て人即ちひとといふことになりますれば、今日の言葉で東洋人と云ふもの全體を含むに至つたのであります。これが「人」の意味變遷の第二期であります。

後西洋の事情が次第に知れて來まするに随つて、あるひはイギリス語のマン、フラン

ス語のオーム、ドイツ語のメンシなどと云ふ言葉が丁度日本の人に當らうといふところから初めはエウロパ人は人に似たもの位に思つて居ましたのが事情が次第にわかつて来るに随ひまして、これは同類と見なければならんといふことになりまして、例へば *Man* 即ち人などいふことになつて來まして、字書にもさう書く様になりました。

かくの如く段々に範圍が廣くなつて來まして、今日では人と云へば世界の人類全體悉くを含むやうになつて來ました。一體範圍がひろくなつて來れば、その中のもの相互の共通の性質は、段々尠くなつて來るもので有ます。一個人の持つて居る性質は、舉げかねる位多くございしますが、十人と成れば最早共通性は、さうはありませぬ。人といふ語の含む所がかくひろくなつて來たに連れ、その共通の性質は極めて尠くなりました。例へば多くの人に面白からしめる事は極めて尠いが如くであります。故に日本人の性質中の、髪が黒いとか真直であるとか、皮膚に何分かの黄色味があるとか云ふことは、昔は人か人でないかを判断する標準としたてありませうが、今日ではこれらは人といふ言葉の含む性質で無い事になりました、人といふものゝ範圍がひろくなれば、なるほど共通性はこれと反比例をなして益々尠くなつてゆきます。今

日に於ては、どれだけ人が人の共通性かといふに、今日ではネグロの如きちりれ毛で黒い皮膚の者の居る事が知れて居ますから髪の色や皮膚の色などの事は、人であるか入でないかを定める標準とはならぬことになりました。背丈の高さがどう有らうとも言葉がどう有らうとも人と云ふに違ひは有りませぬ、衣服を着るものも人、着ぬものも人であります。かう考へれば世界全體にひろがつて居る我等同類の共通性で、しかも他と區別される點は、極めて尠くなります。人は進行に際し直立歩行するもので、身體は明瞭に區別されたる頭と胴と四肢とより成り、耳目鼻口の存する部分が、頭の他の部分より小さい、換言すれば腦の入つて居る部が見たり聞いたり嗅いだり食つたりする道具の部分より大きい、而して四肢即ち手足には各五本の指が有り、且つ足の第一指指姆と第二指との長さが殆んど同一である、手では第一指指姆より第二指の方が、ずつと長い以上が他の者と人間とを區別するに足る人間の通有性であります。この他眼が二つあるとか、鼻が一つあるとかいふとは、人類の通有性でも他と區別する性質では有りませぬ、犬でも猫でも眼は二つ鼻は一つ持つて居るのであります。以上舉 たいげのものを具へて居れば、髪の色は真直でもちりれて居ても、皮膚の色は白くても黒くても、衣服を着ても着なくても、皆人といはねばならぬの

て有ります。孤島或は深山に於て見馴れぬ生き物に出會つてもこの條件を具へて居れば即ち人といはねばなりません。此の如きものが人類學といふ人であります。之を明にして置かねと我等の所謂人は、宗教家道徳家法律家等のいふ人とは違ふかも知れませぬから、人類學で人と名づくるは、どこまでも此様なものであるといふことを明らかにして置く必要があります。

かく根據を立てますれば、次にはじめて、かくの如き人と云ふものは抑も何かといふ問題を研究する事が出来まします。「人は何かと云へば、人は動物の一であるとは殆んど説明するに及ばぬと思ふ人が有るかも知れませぬが、エウロパ諸國の開けた國におきまして、まだこの説は一致しませぬ、有名なる學者の中にも、人は動物でないといふ人もあります。されば此事を詳説する必要があると思ひます。

古より支那に於ても、人は萬物の靈などといひましたが、これは人の靈妙不思議な事を云つたので、自然に於ける人の位置を定めたのではありませぬ。支那人は又、人は裸蟲の長であるなど、いふて居ります。これはやゝ人とは何ぞやといふ問ひの答へに成つて居る、即ち人類は身體保護の付きものを持たぬ生き物の長と認められて居るのであります。西洋の古い言葉にも、人は何々の動物で有るといふ語が深山あ

ります。人は道具をつかふ動物ともいひ、又は人は道具を造る動物ともいひ、又は人は食物を調理する動物、又は人は眞似をする動物杯とも云はれる。すべからいふ風、人は何々の動物といふことが、エウロパ人の昔から云ひ來つた言葉であります。又は人は不平の動物なり、人は音楽を要する動物なりなど、近來は申します。かく動物動物といくらか昔からいふに拘はらず、時としては反對があるのであります。

いかなる點に於て反對があるか段々お話致しませうが、それをいふ前に人と他のとの異同を述べる事に致します。

それでこの世界にある様々のものを見ますに、各何の關係も無い別々のものではありませぬ。あるひはよく似たもの又は少しく似寄りのものがありまして、類を以て集めることが出来る。先づ萬物の中には明らかに二つの別が認められる。その一は養分を外界より取込んで、そのものが次第に大きくなるもの、このものには、どの所は何の働をするといふ風に各部が違つて居る、これを有機物といふ。他の一つは自ら生長すると云ふことが無く、壊すとか寄せるとか、しない以上は形を變へぬものであります。而してそのものは部分に随つて働を異にする、となく、その一部分をとりましても完全を缺かず、かつた一部も一物と認められる、とられた方も一部として完

全てあります、これを無機物と申します。有機物中にも二種あります、生活力の外に知覚及び運動を具へて居るものと、生活はして居るが知覚はなく、又通常運動の力の缺けて居るといふものがあります。一を動物、二を植物と呼んで居る。下等生物には動物植物の區別のつかぬものもあります、が肉眼を以て常に見て居る物では彼れ此れ迷ふ様な事は有りませぬ。

ある學者は、動物植物の他に中間物の部敷を置きましたけれども、これは却つて混雜を増します。第三者と動物の境界、第三者と植物の境界と、疑點が二つになるので、却つて混雜を増しますから、此考へは、今行はれて居りませぬ。夜と晝との區別はよく人が知つて居ますが、その境界の判然せぬが事實なると同じく、別に分界をいかに立て、ひかた苦心する必要はなからうと思ひます。人が勝手に動物植物と區別するので、天然自然には分界の明かならぬものと見るが、妥當であります。今や人類は、いかなるものかといふ事を考へるのに、顯微鏡検査の必要有る下等生物との比較をするに及びませぬ。人類以外のものを大きく分かつて、無機物有機物となるので、無機物は即ち礦物有機物は更に分かれて、植物動物となりませんが、人類を之に比すれば、これに近いかといふに、無論礦物とは違ひ、有機物中の植物も、違つて動物に縁の近きも

のなるとは誰が見ても明らかであります。そこで知りたいたは、人類は動物の中か、唯動物に近いに止まるかといふとであります。

まづ發育に就いて考へまするに、動物は皆自分に似た親より生れて、自分に似た子を生みゆくもので、下等動物に於ては雌雄間の關係なしに生殖するものが有ります。これを無性生殖と申します。その無性生殖の中には、又分裂と出芽との二様の生殖法がありまして、分裂とは一つの物が割れて、殖えるのをいひ、出芽とは大きなもの側に小さな瘤の様なものが出て、それが分離して一つの獨立のものとなるを申します。分裂には親子の關係はありませぬが、出芽は多少親子の關係があります。高等の動物即ち構造の複雑な動物に、あつては同類の繁殖は雌雄の關係によります。雄の原素とも云ふべき細胞と、雌の原素とも云ふべき細胞との接觸の結果、卵即ち雌性細胞が分裂をはじめ、二となり四となり、段々細かく割れて、遂に細粒より成り立つ母の實の様になり、更にこまかく分れますると、粉で出来た團子のやうになりまして、母體からの養ひによつて細胞が澤山に殖え、其中に部分に由て分裂の遅速が有る、爲に外面の延び方が一樣に成らず、全形がゴムの鞠の一部を押し回めて、コップ形にしたと云ふ様に成る。斯くて舊の位置を保つて居る部の内面と凹み込んだ部の内面と

が密着し、此二枚に成つた所が段々變化して來ます。此部の外側をなして居る所が身體の外側ともなり、又疊み込まれて神経系統とも成り、内側をなして居る所が内臓となり、内側外側の間にも生じた細胞層が筋肉血管生殖器となるのであります。そこで様々の動物の中でも、鳥、蛙、魚の如きは卵で生れてその中の黄味が養になります。が獸類では皆胞衣が附いて母胎内で母から營養を受けて胎内で發育します。そこで人間の發生は如何といふに、能々試験する事は固より出來ぬが、偶病死した婦人を解剖して得た結果とか、半産流産とかによつて材料を得る事が出来る。それによつて考ふれば、人類の發育は大體に於て獸類のとかほつたとはありませぬ。或る時期に於ては尾を備へて居るが、或る時期に達して他部分の發達の方が盛に成つて來ると尾は體内にかゝれて仕舞ひます、又或る時期には全身に毛があらりますが、生れる頃に成つて始めて目立たない様に成る。

獸類と人類との發育は、かく大同小異でありますが、一體動物といふものには、顕微鏡で初めて見えるやうな小さなものも有り、鳥や獸の様な大きいものも有り、其發育の順序にも色々の違ひがあるので、獸類と人類との間に存する相違位は諸動物相互の間に存する相違に比べれば誠に僅なもので有ります。今云はうとする事は、人は動物なるか如何といふとてありますが、どの點から考へても發育上人類は動物と區別すべきもので無いと言はなければ成りませぬ。

次に生長したものについて身體の構造を見ますに、此點に於ても亦人類は動物の一であるといふと示して居ります。人類の身體には毛の生えかたが少く、獸類の身體には毛の生えかたが多いけれども、これは多少の差あるに過ぎぬので有無の別ではありませぬ。人類には多くの獸類と異つて外部に見える尾は有りませんが、類人猿即ちオラングウタ、ゴリラ、ギボン、チンパンジー等にも外部に見える尾は有りませぬ。骨格で云へば彼れにも此れにも尾椎骨と云ふものがあります。皮を剥いて比較すれば人と獸類との差は更に少くなります。肉を去つて内部を見れば、呼吸器、消化器、其他様々の器官に於ても人と獸類との似て居る事は明かて有ります。更に骨格を調べて見るに是亦よく似て居ります。體格上の比較も人の動物たる事を告げて居るのであります。

以上の性質よりしては、古來異論がありませぬが、心理上の性質となると人によつて種々の説があります。ある人は此點に於て人類をば半は動物、半は動物以上といひ、又は全く動物以上とも申します。人類には感情がある、動物には感情がないといふ

事を唱へる人もあります。しかし鳥や獸を飼ふて居る人は固よりの事特別に飼はなくとも鳥獸の爲る事を観察して居る人は感情は人類の専有でないとはよく知つて居る。

又推理力は人の専有であるといふ人もありますが果してさうて有りませうか。犬が山中で水を探すには谷の方へと下りてゆきます。又象が鼻の先から息を吸いて物を動かすとがあるが不用の物を他へ遣らうとする場合には鼻の先を其物より手前にして息を吹き近くへ取り寄せようとする場合にはその物の向ふへ鼻をやつて息を吹いて吹き寄せるのであります。又アメリカの猿に蕨を興へて行つた試験があります。はじめ砂糖を入れてやつたときには喜んで嘗めました。が次に蜂を入れてやりましたときには明けて見て驚きました。その後は先づ蕨を耳へ當て、見て音がすれば明けて音がせねば明けたといふとであります。これらを以て見れば動物に推理力なしとは申されませぬ。

又言語は人類の専有であるといふ人もありますが言語は意志疏通の働きをするもので廣く考へれば蟻が齧を叩きあはすのでも言語でありますから人類ばかりが之を有するとはいはれぬのであります。又口から發する者にして初めて言語と云ふべ

きもので有ると狭く限つて見ても鳥や獸が口から出す聲で意を通ずることがあるから人類のみが言語を有するとの説は立ちませぬ。又宗教と云ふものが人類に特別のもので之が人類の動物で無い肝要な點で有ると云ふ人が有ります。植物と礦物とは生活力の有無で違ふ。生活力の有る上に知覺運動を具ふるものが動物である。人類はその上に宗教心を具へて居るから礦物植物動物が相互に別界を成す通りに、人類は人類で動物から離れて人類界を形成すべきものであると云ふのが此論を主張する人の論據で有ります。フランスの有名な人類學者カアトル・ブアジは此論者中の有力者で有りますが斯う云ふ事を云つて居る人は已れの運命を支配する優者の存在を信じ且つ靈魂の不滅を信ずる。この二條の信仰を生ずる原因を假りに人心といふ。この人心の具はつて居ると居らぬとを以て人類と動物との差を見る標準とする。この當否は二つの方面より吟味せねばなりません。氏の所謂宗教は人類悉く具へ居るか如何といふ方からと動物にはかういふとが缺乏して居るのであるか如何といふ方からと此二方面から考へねばなりません。第一の方から考へまするに野蠻未開人中には智識の度低く已れの運命などといふとのわからぬものもあり、又人よりも上のものがある杯といふ信仰を持たぬものもあります。靈魂といふとの考も浮

ばぬものもあり、又不滅なるとを考へぬものもあります。又智識の高いために、ある研究をなし、ある信仰をもつて運命又は優者と云ふ者を容れず、靈魂の有ると云ふ説又その不滅で有ると云ふ説を探らぬ人もあります。されば智識の低いもの、中にも、高いもの、中にも、カント、ルソーの云ふ如き宗教を有さぬ人がある故に、かくの如き宗教心は人類全體に共通ではないのであります。次に第二の方から考へまするに、諸動物の比較心理學は今研究の初歩であるから、それを根據として信仰上の事を論ずるのは大早計と云はなければ成りませぬ。馬は主人を蹴ず、犬は飼ひ主に噛み附かず、象の様な大きなものでも常に親しんで居るものには柔順であります、これらに於て我等は、人類中のあるものが天神等を想像して尊崇の心を持つて居ると同じと認めるのであります。これらの信仰を人間は無形のものに對して有し、獸類は形あるものに對して有するだけの差で、人類中でも野蠻人中には有形物の信仰を専らにする者がある。一體宗教と云ふものは想像、恐怖、好奇心、推理力等が一定のまざり方をすれば出来るものであります。が、これらの想像力も恐怖心も好奇心も推理力も諸動物が有して居ります。寝て居る犬が俄かに起きて吠えることがありますが、これは夢の結果で斯かる事の有るのは間接に想像力を備へて居る事を告げ

ると云つて好いて有りませう。又猫が鼠の出さうな穴の前に待つて居るのも想像力があるからであります。推理の事は前に申しました恐怖、好奇等は云ふまでも有りませぬ。これらの心理上の働きか人類以外の物に於て組み合はせらるゝものかどうかは我等の未だ明言し得ぬところであります。野蠻人の何分か持つて居る宗教心の兆が犬猫等にあるかないか判するのには困難であります、一方に於ては宗教心は人に普通といへませぬし、又一方に於ては諸動物の心の働きが未だ明かには知れて居りませぬから、これを以て動物と人とをわかつかつ據とすることは出来ませぬ。此所が動物と違ふと云ふ點が無い以上は、人類は動物の一であると言はねばなりません。たしかに動物の中であり、單に似たものたるに止まるのであります。人類は心理上獸類に優つて居る事勿論でありますが、姪でも蚯蚓でも顯微鏡の力を藉りて僅に見得る微細な虫類でも等しく動物と呼ばれて居るので、獸類とこれらとの心理上の差に比べれば、人類と獸類との心理上の差の如きは誠に僅なものと言はなければならぬのであります。

しかしかういふとを、あからさまに云へば、人間の品格が下る、専門學者の研究の結果がかくの通りといふのはよいが、之を世に示すとは差控へたらよからう、若し人は動

物であるといふことになつたらば、自から我を棄て、社會のとは無頓着となり、道徳は地に墜ち、世は紊れるであらうと思ふ人が有るかも知れませんが、人は自然に萬物を支配すべき運命を有すると思ふよりは、智識の高い爲め斯かる有様で居るので有る。徳義を重んずる爲め社會が成立して居るので有る、これらの事を等閑にする時には、人の價値を失つて他の動物と擇ばぬに至らうと思はなければならぬといふ方が、自身の誠まこととなり、又人を導くにも、この方がむしろ有力であらうと思ひます。人類は動物の一であるといふとは、決して教への害になりませぬ。人は自分の腕で茲處まで進んで來たのであつて、かういふ風にして進んでいつたならば、今後いかに進むかわからぬ昔から祖先が様々に苦しんで來た御蔭に、今まで進んで來たのであるから、其功を無にせぬ爲め益々働かなければならぬと云へば、大に勵みに成ると信じます。

以上が萬物に於ける人類の位置といふことのお話であります。尙これより進んで動物界に於て、人類の位置はいづこにあるかを述べませう。二體動物の種類は夥しいけれども、構造と發育とを土臺として考ふれば、凡そ十一の大部門に分つとが出来ます。その一つ一つのわがりのことを門と稱します。この中第一門より第十門まで

は連続した骨のない動物を含んで居ります。十一番目は脊骨を備へて居るもの之を脊椎動物(Vertebrata)と申します。假りに人類を除いて、あとの動物を分類すれば、斯く十一番目中の動物によく似て居るのであります。

そこでこの第十一門はいかなるものを含むかといふに、魚の如きも鳥も獸も皆此部にはいります。これらに通ずる性質はいかなるものかといふに、體の一端に腦のかたまりがあつて、それから引き續いて紐の如きものがある、この二者は同物質であるが一方は玉の形となり、一方は紐の形となるのであります。この玉は時としては軟骨を以て包まれることがありますが、又膜で囊をかぶせた様になつて居ることもあります。多数の場合では堅い骨で包まれて居ります。即ちいくつかの骨が連なり合つて其容れ物と成つて居るのであります。これを腦蓋骨あるひは頭蓋骨と申します。細く延び出て居るもの、即ち背髄は多くの輪形の骨の連続より成る脊柱の中に包まれて居ります。これらの骨の外部には諸種のやわらかい機關、即ち肺臟、心臟、胃及び腸の如きものがあります。而して以上の總體が大きい囊で包まれて居ります。此他に幾つかの骨があつて、其中には體を動かす道具も有る。以上が第十一門の通性であります。



今述べた性質は悉く人類に備はつて居ります。若し鳥魚獸の如く異なるものも之を一部類とするならば人も當に第十一門たるべきものであります。人は固より獸とは違ひますが、その差は鳥と獸、魚などの差の甚しきよりは、遙かに小さい差であります。されば人と獸の相違の間に獸と鳥との間の様な段階を置くとは出来ませぬ。況んや十一門と他の動物との如き差の大なるには比すべくもないとてあります。故に人類をばたしかに第十一門の中に入れねばなりません。

然るに第十一門も亦一様ではありませぬ。そこでしばらく人類を脇に置きまして他の十一門の動物はいかに分たるゝかといふに凡そ五つにわかれます。このわかちを綱(Orders)と申します。即ち五綱あるのであります。一は魚類、二は兩棲類、三は爬虫類、四は鳥類、五は哺乳類、即ちこれであります。これだけは明らかに脊椎動物中に區別され得るものであります。人類は無論この五に近い、即ち獸類に近いのであります。

人類の性質を考ふるには哺乳類中に容るべきものか、又は之に近いが別のものとするべきかを考へねばなりません。しばらく人類を他に置いて哺乳類を考ふるに、身體に多少の毛が生じて雌雄共に乳腺を具へ動脈弓が身體の左方にのみあります。胸

の内部<sup>心</sup>と腹の内部<sup>腸</sup>が横隔膜を以て界せられて居ります。これが哺乳類の特性でありまして、他のものと區別する性質であります。人類は今述べた性を悉く具へて居ります。哺乳類が他と區別する要點は即ち人間の具へて居ります重要な性質であります。人類は無論犬、猿などに見分けはつきませんが、それらと人類との相違はそれらと鳥、魚などの差の如く大なるものでは無論ありませぬ。魚、鳥、獸を一門として、その中に各綱をわかつとすれば、人類と哺乳類との差が鳥、魚などの差と等しかつたならば別綱とすべきでありますが、さうでないからして、人類は別綱とすゝるが出来ませぬ。故に人類は第五綱中に入れるが適當であります。即ち哺乳類中の一であるのであります。

然るに哺乳類中に又各別があります。その各の別を目(Order)と申します。しばらく人類を除けて考ふれば十一目あります。例を述べれば第一目の例は、<sup>かもの</sup>は、<sup>し</sup>體は<sup>獸</sup>持<sup>つ</sup>もの、<sup>如</sup>第二目の例は<sup>カンガルウ</sup>、<sup>第三目</sup>の例は<sup>なまけもの</sup>、<sup>四</sup>足<sup>あり</sup>な<sup>ある</sup>く<sup>と</sup>が<sup>出</sup>來<sup>ず</sup>爪<sup>の</sup>先<sup>が</sup>繼<sup>る</sup>の<sup>様</sup>にな<sup>つ</sup>、<sup>第四目</sup>の例は<sup>海牛</sup>、<sup>第五目</sup>の例は<sup>くじら</sup>、<sup>第六目</sup>の例は<sup>馬類</sup>、<sup>鹿類</sup>など、<sup>第七目</sup>の例は<sup>兎鼠</sup>などの如きもの、<sup>第八目</sup>の例は<sup>犬</sup>、<sup>第九目</sup>は<sup>もぐら</sup>、<sup>第十目</sup>は<sup>蝙蝠</sup>、<sup>第十一目</sup>の例は<sup>猿類</sup>であります。

哺乳類中にも斯く各種類の違ひがあります。この位のちがひを目的の違ひと動物學者は認めて居ります。人類はこの第十一目によく似て居ります。殊に類人猿中には脊丈の高さが五尺もあるのがありますから、人は最も猿に似て居ります。

この部類は靈長類と申します。この類の特性は、どれだけかといふに、奥歯は物を磨り潰すに適する、即ち臼の如き形をして居る、而してその奥歯中の後臼歯は、前臼歯よりも構造が一體に複雑であります。殊に肝要なるは眼のはいつて居る、くほみ、即ち眼窩は全く骨を以て圍まれて居るとであります。他の獸類ではゆきぬけのところは横に眼球が載つて居りますが、靈長類では全く骨の茶碗の中に眼がある様なものであります。又腕の骨は橈骨、尺骨の二つであつて、各獨立して並んで用をなして居ります。今一つの肝要なる性質は、小腸と大腸とのつながり、目の所に鳥渡横に行き止まりの盲腸が附いて居ります。これらが靈長類の特徴であります。人類を見るに人類は皆之を具へて居ります。無論人類と猿とは明らかに區別が出来、まするが、その差は各目の違ひほど違ふかどうかといふに、目ほどの違ひ、即ち猿と蝙蝠の差、馬とくじらの差の如き差は到底猿と人類との間には認められませぬ、さすれば人類を別目とするとは出来ませぬ。故に人類は十一目に属すべきものであります。されば

人類は動物界中の第十一門の脊椎動物中の第五綱哺乳類中の第十一目靈長類に属すべきものであります。

各目を又各科 (Family) にわかつ、靈長類中の科にはいかなるものがあるかといふに、しばらく人類を除けていへば八つあります。一から五までは人類に直接の關係なき故に省きます。第六科は西半球の猿、即ちア、メ、第七科は東半球の猿、尾のあ、第八科は類人猿、又似人猿とも申します。尾のなし、以上であります。比較して見ますと、人類は最も八に近いのであります。

第八科類人猿の性は、上顎下顎に二對の門歯、次に一對の大歯があり、次に二對の前臼歯があります。その奥に三對の後臼歯があります。故に口全體の歯を數ふれば三十二枚あります。而して尻尾がない、頬に囊がない、上肢手が下肢足よりも長いのであります。人類は、ある點は之に似、ある點は違ひます。即ち上肢下肢の長さの割合は正反對であります。その他尙肝要な點に於て、第八科と人類とは違ひがあります。即ち耳目鼻口の存する部分が、腦のはいつて居る部分より小さいとてあります。類人猿は反對であります。人類の男子の犬歯は、牙と名をつけるほど、ひどく突起して居ませぬが、類人猿のは牙の形をして居ります。又人類に於ては脊柱が直立して、丁度

頭を載せるに適した様な形に成つて居りますが、類人猿のは直立は出来るには出来ませんが、それは常の形ではありませぬ。又人類の足の拇指は、他の指と殆んど同じとてありますが、類人猿の後足の拇指は次の指より短いのであります。又類人猿は足の拇指を他の指に向けることが出来ませんが、人はそれが出来ませぬ。これらの肝要な點で、類人猿と人類とはちがひます。

扱これらの違ひは一の科と他の科との差と認むべきものか如何といふに、比較の爲めに七科と六科との差を調べ、それらと八科とを比較し、次に八科と人類との差を見れば判断が付くのであります。七科の性質は、各の顎に二對の門齒、一對の犬齒、三對の前臼齒、三對の後臼齒があつて、齒の總數は三十二枚であります。頬の囊は種類によつて有つたり無かつたりします。尾は必ずあるが、その尾は物に巻きつくといふ方はありません。下肢は上肢よりも少し長いのであります。この七科と八科の間には、尻尾の有無、上肢下肢の長さの割り合ひに於て違ひがあるのであります。第六科の猿の性質は、各の顎に二對の門齒、一對の犬齒、三對の前臼齒、三對の後臼齒がありまして、齒の總數が三十六枚、いづれも尻尾があります。種類によつて物に巻きつぐ方のあるものとありません。又無いものもあります。六科と七科とは、齒の數と尾の力

とて違ふのであります。六科と八科を比較してその差を見るに、齒數がちがひ、又尻尾の有無の差があります。かくの如きが靈長類中の科の相違であります。此位の違ひが有れば別の科と認めるのであります。

第八科と人類との間に存する相違點は、丁度科の相違くらゐのものであります。上肢下肢の長さの割合とか、拇指の長短、腦の部と耳目鼻口の部との大小くらゐのものであります。然らば人類は、第八科に近いけれども別の科を設けるとが釣合上適當と認めねばなりません。故に第九科を置いて、之を人類科と名けます。さすれば人類は動物中の第十一門の第五綱の第十一目の第九科即ち人類科(Hominidae)を作つて居るのであります。

一般動物を考ふれば、一科中に又各別がありました。之を屬(Genus)と申します。人類の場合に於てはどうであるか、言ひ換へれば人類科は世界全體の人類を含んで居るのであるが、その中にいくつの屬があるかといふのであります。

屬とは何程の價值のものか例を擧げて見ませう。哺乳類中の第六目第十二科中には、鹿及び馴鹿が有ります。即ち同科中で、鹿と馴鹿とは別の屬と認められて居ります。又第六目の第十五科は、牛羊等てあります。牛

羊は即ち科を同じくして屬を異にして居ります、即ちこれらくらゐの差を動物學者は認めて屬の差と致します。又類人猿中に四つの別があります、それも即ち一科中の屬の相異を示すのであります。その一はボルネオ、スマトラあたりに棲むオラングウタン(猩々)であります、これは頭が頂上に於て尖つた様になつて居て、胸も四肢も太く逞ましく、上肢が立つたとき、くろぶしの所まで達する、肋骨が十二對、身長が五尺一二寸であります。その二はアジアの大陸の南及びマレー地方に棲むギョボンであります、これは頭の頂上が尖つて居らず、胸も四肢も細く瘦せて、上肢は甚だ長く身體を直立すれば、指先が地面につきまする、肋骨が十二對、身長は三尺ばかりあります。その三は中央アフリカに棲んで、チンパンジーとよぶものであります、頭の骨は極く行儀よくまんまるく、上肢は膝の少し下に達する位であります、肋骨は十三對、身長五尺ぐらゐであります。その四も中央アフリカに棲むゴリラ、これは頭骨は別に高くなつて居らず、胸と四肢は極く太く逞ましい、上肢は膝に達し、肋骨は十三對、身長五尺ばかりであります。第八科中の屬の違ひといふのは、からいふものであります。

この例を以て推して見て、世界中の人類中に幾個の屬が認められるかといふに、北海道の毛の多いアイヌ、毛の少い臺灣の生蕃等を比較しても、牛羊の差、オランダウタとゴリラとの差の如き差は認められませぬ。して見れば、人類中には、地方地方によつて様々の相違があるは明らかであります、屬の相違は決してその間に認めるとが出来ませぬ。故に人類は唯一屬でありまする、この一屬をホモ (Homo) と申します。そこで繰り返していへば、人類は動物界中の第十一門、第五綱、第十一目、第九科中に於てホモ屬に屬するものであります。

屬中に又小別があります、之を種 (Species) と申します。これは一般動物界の通則であります。例せば、獅子、虎、豹、猫、これらは同一屬中各、獨立して居る種であります。人類の場合について、茲に起る問題は、ホモ屬はいくつの種より成り立つて居るかといふこととあります。

人類の場合に於ては、専門學者以外の人がいろく説を立てます、故に種々の争があります。今もまだこの争のために派が分れて居ります。人類は一種である、云ふ説を立てる人は之を一種論者と申します、又人類は數種から成り立つと云ふ人も有りまして、之を數種論者(多種論者)と申します。創世記の字句信仰家はすべての人類はアダム、イブの子孫であると思つて居る、この一派は人類の一種ならむことを

希望して居ります。又人類多種説も、ある人々が爲めにするところあつて主張した事がありました。即ち奴隸賣買のためでありました。慈善家宗教家等は黒人を同胞と申すに反し、奴隸制度の繼續を喜ぶ人々は、彼は同胞でないとし、その方面の人々は、多種論を歓迎致しました。そのためにこれら兩派の論者は、各學問上の研究といふ方でなく、學説のひい、いといふ様のもになりました。益、混雜をふやして來まして、簡單なる種の問題が感情問題社會問題となつて來ました。千八百四十年頃單に大問題といへば、人類は一種か數種かの論であると知られた程でありました。

一種論者も多種論者も主とする要點は二つに過ぎませぬ。一種論者の論點は、世界人類中に見る相違は、一種の動物中に見るところの變種の相違くらゐのもので、種の相違ほどの差でない、世界全體を通じてどこの男と、どこの女とを結婚させても子が出来る、一般動物で考ふるに、種の違ふ物の間には子が出来ぬ、これを以て見れば人類は一種であるといふ論なのであります。

多種論者の論據は、違つた地方にある人類の差の中には、他の動物に於ける種の違ひほどのものがある、といふのが一の論據であります。今一つの論據は、違つた地方の男と女との間の生殖力には差がある、同一地方のものゝ結婚は、子の生れかたが多く

て強い、異なつたる地方の男女の間の結婚は、之に反して子の生れかたが少くて、其子が弱い。獅子と虎、馬と驢馬の如き、誰が見ても異種であるが、その間に子は生れるが、血統の繼續はない。諸人種相互間の結婚もこれに似て居るといふ論なのであります。

以上兩派の論者の論旨を公平に考へますれば、共に薄弱といはねばなりません。人類間には類例の撰び方に由つて變種の相違くらいとも云へれば、種の相違と認めらるゝと云へるもありません。故にこれでは判断が出来ないのであります。

生殖力のとほ兩者共に材料が少い、また吾人は世界何れの人の男女の間にも子が出来る、と云ふ丈の經驗を有して居ませぬ、又たしかに同一地方の者の間にも子の生れぬものもあります、故に生殖力によつて種をさめるとは出来ませぬ、生殖力の間に相違があるかないかは尙更申されませぬ。他の動物に於ける別種間の配偶もわかりませぬ、故に斯の如き事では何れとも判断がつかぬのであります。さすれば人類は一種か數種かといふとの判断は到底出来ぬかといふに、これは種とは何ぞやといふとをさめればわかる筈である、一般生物界に於て種とは何ぞやといふとを定め、それを人に當てはめれば論は決するのであります。種の上の屬、その上の科、目、綱、門などを

いふ如き別は學説であります。天然自然にこれらのものがあるのではありませぬ。種といふのはそれと大に趣を異にして居ります。昔から誰も彼も眼に見える別がこれ種でありませぬ。常識を具へて居るものは皆これを知て居るものであります。馬と牛と間違へるものはない。別のものとは誰も認めませぬ。されば大きい動物についての種といふとは、學者の説でなく世人の常識で認めて居るものであります。即ち世人が一種一種と認めて居るものを、これを學問上の言葉に直せば宜いのであります。日々手で持つ箸のもちかたも之を云ひあらはすは、難いものであります。誰も種といふとは知つて居りますけれどもいかなるものを一種の動物といふかといふとは甚だむづかしいのであります。古來の學者の申しました種の定義も、數多くあります。が、人類の事を論じた人の説だけを二つ三つ左に挙げませう。

ドイツのブルメンバハ(Bumenbach)は、形狀構造相類似し、又はたとひ差異があるも、それは唯變化のために生じたるものと見ゆるに過ぎざる動物の團體を種と名けると申しました。

フランスのキビエエ(Quvier)は、血統を傳へて相襲へるもの(即ち親子の關係親を一にするもの、即ち兄弟及び相互に似ると尙親子兄弟互に似る如くなるものを總稱して一種の動物と云ふと申しました。

イギリスのブリチャド(Prichard)は、特種の起源を有し、特種の體質を遺傳繼承するところのものを一種の動物と云ふと申しました。

アメリカのブリントン(Brinton)は、明瞭なる類似點のある動物の團體にして、一對の先祖より系統をひきあるひはひけるが如くに想像さるゝものを種と云ふといひました。

以上はいづれも人類研究者中の、重なる國々の人々の種といふ点についての考を撰び出したのであります。ブルメンバハの如きは即ち人類を一種と申し、キビエエも即ち一種論、ブリチャドも一種論であります。ブリントンも一種論であります。が、反對の側から見れば、ブルメンバハの説では、白人と黒人との差を變化から出來たと見ると云ふが、どうもさうは見えないといへば、それでも論は立つ、即ち變化と云ふ事が判然しません。キビエエの論に付いても、反對論を立てるとが出來ます。世界の人種の差は、親子兄弟間の相違より大である、故に數種である、一種でないともいふとが出來ます。ブリチャドのは、特種の起源を誰が知るか、誰も知る筈はない、只信ずるのみである、然らばある人は信じ、ある人は信ぜぬとすれば、定義は役に立たぬの

であります。ブリントンの言葉にある想像といふとも、人々の勝手次第のものであるから、これ亦好い定義とは云はれませぬ。以上はいづれも人類に關する論を決する丈の力のない定義であります。

ロオマネス(Romnes)の近頃のひました種の定義は宜うございます、しかし極々肝要な點が一つ脱けて居ります、それを入れれば完全なる定義となりませう。ロオマネスの定義は左の如くであります。

雌雄の別の他形態上同一様なるもの、あるひはたとひ兩極端の例の間に多少の相違を認むるとあるも、二者を連続させる中間物の存し或は存したる事の知れた場合には、斯る動物を總稱して種といふ。

これは従來の人の與へた定義よりは餘程よろしい。但し中間物といふとについて、ロオマネス氏は、中間物が現に存在せるか、あるひはさなくも化石の研究によつて其存在の知れた場合には、これを種と總稱すると云ふて居りますが、さうすれば恐らくあらゆる動物は一種となつてしまひませう。種とは我等の見て居る現在のものゝとてあります。故に始めに同一時代に生存するものにしてと云ふ數語を加へ且つ中間物を現存のものに限るのが穩當であります。

種をばかくの如きものとして世界中の人類は如何と見れば世界人類の一種か數種かは直に判断が出来ます。

上の種の定義を人類にあてはめたらどうであるかといふに世界のいろ／＼と違つた人類を見ると、離れた所には違つたものがあります。たとへばバタゴニア人は生長した男子は平均五尺九寸の身長であります、アフリカ内地には平均三尺少し餘位のものがあります。けれども世界の諸地方のものを比較して見まするに、平均にすれば五尺九寸のものでも五尺九寸以下のものもあり、以上のものもある、アフリカに於ても三尺位もあり、モット高いものもあり、尙ほ諸地のものを調べると凡てがつながつてしまひます。各種族連続して、決して、さりの出来るものにはありません。

又ちがつた地方に於て最も眼のつく相違は皮膚の色であります、が、エウロパの北方の白い人と、アフリカの中央の西部に住せる黒人とを比すれば、雪と炭といふ風の差があります、世界全體に就いてしらべれば、中間の色が有つて一方の色と一方の色と互に連絡します。

どこの種族でも、表皮は半透明であります。表皮と眞皮との境目のところに、色素

があります。これは細<sup>さい</sup>かい褐色の點であります。その點の多少によつて、所謂人種の色が定まるのであります。半透明の表皮を隔て、中に見える組織の色は一般に白く而して毛細管を通る血の色は赤うございます。普通のエウロパ人は、この白と赤とが混じて見える色素が少いと目に立たぬので一體に桃色に見えるのであります。エウロパ人中でもスペイン人又はポルトガル人は褐色を帯びて居ります。これは色素の分量が多いからであります。やゝ褐色に見えるところは皆さうで、アジア人は皮下の組織の白いと、毛細管の血の赤いと、表皮の半透明なると等はエウロパ人と異なる所はありませぬが、色素の多いためやゝ黄色に見えるので黒人もその黒く見えるのは色素の量が多いためのみであります。血の赤いのも皮下の組織の白みも赤みも隠れて見えないのであります。人種の色は即ち色素の多少の度<sup>ど</sup>合<sup>ご</sup>の問<sup>もん</sup>題となつてしまひます。而して諸種族についての色素の量を比べれば段々について總べて連続します。故に身長<sup>身長</sup>の差と同じく、根本的の差のないものであります。

又頭の幅をはかつて廣狹を申しますが、世界全體を見まするに連絡があります。エウロパの北方のラップ人は、前後を百とすれば左右八十五、アイヌは前後を百とす

ば左右七十七といふ割合であります。かういふ様な差はありますが世界全體について見ますればつながつてゆきまします。どこを界といふことが出来ませぬ。

この他の點に於ても、皆中間を以て連絡します。心理上に於ても、智惠のあると思<sup>おも</sup>なるとの差はありますが、其間に連絡はあります。賢愚の差は一國一族中にもある差であります。故に此上からも判別することは出来ませぬ。風俗習慣は人爲のものであり、言葉におきまして、日本人でも幼少からエウロパに居りますればエウロバ語を用ひませう。さればこれらは世界人類の種を考へる役には立ちませぬ、いづれ持つて生れたところのものであります。されば前にあげました種の定義にあてはめますれば、人類には種の差はないといはねばなりません。

又世界人種は數種であるといふ者、即ち數種論者も種の數は幾つであるとは云ひ得ないのであります。これは即ち謂所一種と一種間の判然たる差のないことを證するものであります。地方を異にしても配偶すれば子が出来るとか出来ぬとかの説は別問題であります。一種であるか數種であるかの論とは別の事であり、生殖の問題や本源の問題などを持って來なくても、種の問題の解釋は出来るのであります。

そこで人類の屬はホモと申しますが、種としてはホモ・セピアンズ (Homo sapiens) と



云ふ名が下されて居るので有ります。

### 人類現狀論

人類本質論に於ては人はいかなるものかを申しました。本篇に於てはこのホモ・セピアンスなる一種の人類が世界に如何に分布して居るかを研究します。これに第一に研究を要するは、人類の地理學的分布、即ち如何に人類が世界にひろがつて居るかの研究、これが第一に必要であります。

北は北緯七八十度の所にも人は住んで居ります、エスキモオは即ちこれであり、温帯にも熱帯にも人間はひろがり、赤道邊にも多く人は住み、南の温帯にも人は住み、南米の南のはづれのテラデルフウゴの土人の如きは、南緯五六十度の邊まで住んで居ります。この南北の間、アジア、エウロパ、アフリカ、太平洋の島々に至るまで、到る處人類のないところはない位であります、無人島は珍らしかるゝほど人類はひろく世界全體に居るのであります。

一體動物の分布は、かういふものかといふに、決してさうではありませぬ。通則とし

て陸産哺乳動物の如きは、決して人間の如くひろい分布をしては居りませぬ。オランダグウタンはアジアの南にしか住みませぬ、ギボンもアジアの南、マレー諸島にしか住みませぬ、ゴリラ、チンパンジー等は、アフリカの中央に限られます。陸産哺乳動物中、最も分布のひろい獅子が、アフリカ全體、アラビア、印度、ペルシア等に限られて居ります。又アメリカには大きな猫に似たるビュウマと稱する動物が廣がつて居りますが、これは他の地方には居りませぬ。馴鹿はエウロパにもアジアにもアメリカにもありませんが、これも極北地方に限ります。かう考へますと、人類の分布は一種の動物の分布としては、あまりひろすぎます。この點に於て、ある人は人類の一種たるとは他の點に於ては疑はぬが、この分布の點に於て疑ふと申します。故に動物學上の一種といふと、その地理學的分布とは、いかなる關係があるか明らかにするところが肝要であります。

動物園にゆけば、随分違つた地方の動物が来て居ますが、かやうに處を限り時を限りしないでも、随分ある動物を他の地方にうつしても棲息させることが出来る、繁殖させるとが出来る。アウストラリア又はニュージーランドには元來豕も兎も居りませぬだが、エウロパ人が連れて来て、茲處に移しましたので、今は自然の繁殖

の如くになりました。南アメリカには、元來牛も馬もありませなんだが、エウロパ人が連れて行きまして放ちましたので、今は殆んど昔からあつた如く野生のものまであるに至りました。これを以て見れば、一種であるといふと、地理學的區域とは、關係があると限られたものでありませぬ。

されば天然自然の地理學的分布に構はずして人為で以て動物をうつして分布させるとが出来るのであります。同様に人間が人間を他所へうつし得るものなるとは明らかでありませう。歴史により、口碑により、又は諸地方に残つて居る古物遺跡によつて考へて見ても、人類の人為分布は昔から行はれて居たのであります。凡そ人類の移轉は、口碑古傳説の常に語る所であります。歴史口碑古物遺跡の調査すべて人間は昔より動きまわつて居りましたものであるとを明らかにします。されば人は、もとは今日ほど廣がつて居なくて、どこかに限られて居たものであらうといふとは考へるとが出来る。

南洋諸島中のポリネシアの住民は、マタ方々の口碑によれば、西曆紀元の初まり頃、アジア大陸に近き或る島のあたりから分れて來て、他の幾つかの島を夫々中心として更に分々に分れ、又分れた島を中心として方々に分れたのであるといふとであります。

これから見ても、古くから人類が全世界に分布したのではないのであります。されば人類の種の事を分布だけに就いて、殊に疑ふ必要はない、たゞ偶人類には分布の便宜多く、他動物は動かつたに過ぎぬのであります。

こゝで肝要なとは、人類と他の陸産哺乳動物との分布に、いかにしてかく差違が生じ來つたかといふとて、これを研究する必要があります。分布區域の定まるのは、外から内へ押す力と、内から外へひろがる力との二つによります。内から外へひろがるといふのは、即ち生殖作用で段々と數が多くなつてひろがるのと、必要がなくとも好奇心に驅られひろがるのと、又偶然の出來事によつてのひろがり、たとへば海流に隨つて漂着するとか、木の上に乗つて流されてゆくとかいふやうなとてあります。又外から内へ押す力といふのは、これは氣候の相違氣候が異つて居る生活、食物のさまざま常食たる食物がない時、地理のさまざま川、山、斷崖、絶壁のある時などは、道が塞かつて行くことが出来ぬ、これらのさまざまをいふのであります。これらのさまざまは、ひろがらむとするのを外より押へるものであります。人類と人類以外の哺乳動物とは、これらの點に於て、いかに違ふかといふに、繁殖の力の多少は、他動物の統計がありませんから不明であります。が、人の繁殖力もなかく、強い、好奇心も他動物より多く、偶然に分布すること

動物よりは人間の方が多く、漂着などは屢あることとあります。ひろがらうとする方には、人類は他の動物よりも非常に強い力があります。押へる力は人類にいかの影響するかといふに、人類は氣候にはあまり影響せられませぬ、人爲を以て工夫して、あまり影響せられぬやうに致します。これらは人類以外の動物には決して出来ないものであります。食物に就いては、いかにといふに、食物のない所に行くには、食物のある所から持つてゆきます。又食へぬものも料理法によつて食へるやうに、こしらへ直す。又耕作をして植物性の食物を殖やし、又牧畜をして、動物性の食物を殖やす。これらは他の哺乳動物に出来ぬとてあります。人類はドン／＼食物の困難に打ち勝つてゆくものであります。地理のさまざまに於ても、人類は水を越え山を越え砂漠を越えて行きます。上り下りの出来ぬ山は道をつける。他の陸産動物は、決してかういふとは出来ませぬ。かく考へますれば、擴がる力が多くて、押へる力は、あまり人類には妨をなさぬのであります。さすれば人類の分布力の大なるとは明らかであります。故に如何に分布が廣くても人類の一種で有るといふに差聞ありませぬ。

次に、ひろく世界にひろがつて居る人類は、地方によつていかに異同があるかといふに、全く同じではなく、無論異同があります。時とすると、一地方と一地方との間に甚しい段階のあるとがあります。虹に就いて見まするに、赤と黄と青の境界はつきませぬが、それらの色も並べかたによりましては、違ひを認めるとが出来ます。人類も順序好く並べては變化の境界が不明であるが世界の各地方に今日分布せるものに就いて見れば、互に特別の團體を認め得ないではない。一地方にある體格ある言語、ある風俗を有する人類が居る、之に隣る地に於ては、又異つた體格言語風俗の異なるものが居る、或は體格は似て居て他の點の異ると云ふ様な事もある。かういふ差を通例人種の別と申します。

これまで多くの人のいふ人種といふ言葉の意味は、つまりある性質を通じて有する人類の團體、又はどうかいふ方法によつて分類した人類の一部分、といふとて有りませぬ。扱いかなる性質によりいかなる方法を以て人種をわかつかといふとは、學者間にその標準がさまつて居ませぬ。随つて諸學者の説は一致しませぬ、唯大體のうちに随つて見ましても、その説は、まことに區々でありませぬ。或は二つに分ち、或は三つに分ち、或は四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、十一、十三、十五、十六、二十六、六十三、かういふ様に人類はいろ／＼に分かたれて居ります。極く尠く分つ人は二つにわかち、極

く多くわかつ人は六十三に分ちます。されば數少く分けたときには多くの種族が一人種となり多く分けたときは似寄つた種族も別になります。其元を明に知つて置かねば即ち何を土臺にしての分類であるといふとを聞かねばある種族とある種族とが同人種であるとか異人種であるとかいふとはわかりませぬ。若しこれらの人種別が學問上不必要ならば廢してしまふがよいこれは考へるまでもないものであるが若しも何か人種別を立てるといふ必要があるなら人種別を立てるにはどう云ふ分類法に従ふべきかについて意見を定めて置かなければなりません。

人種の別を立てますと次の二つの利益があると考へます。一は諸地方の人民相互の縁故を明らかにする。他の一つは諸地方人民に關する説明を簡單にします。人種別を立てれば以上二つの利益があります。利益があるなら分類の意見を極めて置くが宜しい。夫れて無いと始終話しが混雜する。フランス人の如きは體格からいへばケルトでありますが言語から申せばラテン民族であります。又政治上歴史上の關係より申しますれば北方チャトンの一の分れなるフランス人がいつて來て國が成り立つたので有りますからチャトンであります。さればイタリア人とフランス人とは同人種であるとも申されまします。又ドイツ人とフランス人とも

同人種といはれます。政治上又スコットランド人とフランス人とも同じ部類とも申されまします。格。かくの如き次第でありますからいかなる根據よりした分類かといふとを定めて置く必要があります。さなくば唯々混亂にのみ陥る處があります。人類分類の意見を定めるに當つては先づ分類とは抑何かといふとから考へる必要があります。

分類には先づ趣意の上で二つの別があります。

一、便宜分類。

二、自然分類。

第一はいふまでもなく早解かりといふとを重んじます。即ち書物に付いて居る索引の如きがこの分類であります。第二は第一章何々と書物の初にある目次の如きがこれです。すべて分類にはこの二つがあります。而してこの第一の分類の方に又二つの別があります。

甲、常識分類。

乙、人為分類。

甲は直ぐにわかる分類深く考へるまでもなくわかる分類であります。たとへば假綴

の本と本綴の本との別の如きもの、又木と草と云ふが如きこれでありませう。乙は何によると云ふ事を極めての分類であります。たとへば大さによつて書物をわかつか、目方によつてわかつか、價によつてわかつか、紙類によつてわかつか、表紙の色によつて分つとかいふのがこれでありませう。

第二即ち自然分類の方にも亦二つの別があります。

甲、類似分類。

乙、系圖分類。

甲はいろ／＼の性質をはかつて似たものを寄せ集めるので、礦物を寄せ集めるのに石炭とダイヤモンドとを一所にするといふ如き分類であります。常識ではこれは寶玉と燃料と甚しく異つて居るが本來の性質は似て居るので同部類とするのであります。乙は系統的の分類で植物が種子を遺すとか動物が子を遺すとかと云ふ事から推して單に似て居ると云ふ點から計りて無く眞の縁故を探つての分類であるのです。甲は又た金石學的分類乙は又た動物學的分類とも呼ばれて居るのであります。即ち分類といふことには大別すれば二通り、小別すれば四通りあるのであります。

昔から學者によつて諸種のわかちかたをしたと云ふのは専らこれらの不同から起つた事てあります。支那人の如きは自分等を中華の民と云ふて他方の者を東夷北狄南蠻西戎といふ。斯く方角で區別するが如きは常識分類と申すべきであります。エウロパ人種アジア人種など、地方で分つのも同じく常識分類であります。人爲分類はたとへばリニアスが人類を色によつて分ち、エウロパの白色人アジアの褐色人など、申しました。かういふ分類が人爲分類であります。モンゴリアン、コオカシアン、エシオピアン、マレー、アメリカンなど、云ふのは類似分類であります。ブルメンバハの分類法は、この方法でありまして、今も盛に行はれて居ります。しかし人は動物の一にして、其研究を動物學的にすべきものなると明らかになつた今日、人類を金石の如くに類似分類にするは後れて居るといはねばならぬ。今日では人類分類は系圖分類でなくてはならぬと云ふ事に成つたのであります。系圖的自然分類これが今日に於ては最も學問の趣旨に適つた分類といはねばならぬのであります。

次に系圖分類をするにはどうしたら出来るか、どうしたら搜るとが出来るか、それを述べませう。第一は史傳によつて搜るのであります。例を申さうにアメリカ大

陸のものが明らかにになりました。所謂新世界の方にエウロパ人がゆきました。それと共にアフリカのニグロも奴隸として連れられてゆきました。これらのものが明らかでありますから、アメリカに於て、或る人々はエウロパ人に似て居る、或る人々はニグロに似て居ると認むるときに、それらの人々はたしかに彼等の子孫であるといふに付いて疑ひがありません。又支那の古き漢人も純粹ではありませぬが、それと満人とが合して今の清國人をなして居ります。此混入も歴史が直ぐ告げますから、他の研究を要しませぬ。又アフリカの南部に、エウロパ人に克く似たものが居ります。これも何時オランダ人が行つたといふとが明らかであります。同じくアフリカの南方を見ますと、古くからエウロパ人と土人との間に雜種が出来て居る、これも歴史で明らかであります。又日本に於ても、古史によつて、朝鮮人も支那人も来て居るとがわかつて居ります。故に日本人中にその子孫のあるとは歴史によつても明らかであります。記録なき開けぬ人民中にも、口碑傳説によつて人民の移轉又は交つたを示すものが多くあります。例へば南洋諸島に傳はる口碑の如きは、どこから来たとか、一部がどこへ行つたとかいふとを傳説して居ります。これらによつてどこのものと、どこのものとのいかなる關係があるといふとを知ることが出来

ます。若し人類のはじめからしてこれらの口碑傳説などが傳はつて居るならば、人類分類は容易であります。傳説は比較的近き頃よりして、やうやく明らかになつて來ましたのみで、今日傳はつて居るものは、人類經歷の長さには比ぶれば極めて短い年代のものとあります。故にその前のとは、くわしくわかりませぬ。

然らば、その以前のとは、到底さぐり得ぬかといふにさうてありませぬ。まづ風俗習慣、これによつて知ることが出來ます。一體一の團體をなせる人民がある事情によつて、幾個かに分れたとすれば、それらは分れると同時に、すべての習慣を棄て、新習慣を始めるといふとはありうべからざるとである。されば分れた兩者の間には、多少本來の風俗習慣を残して居るとは明らかであります。

今アメリカ、アウストラリア等に於ける事實を見ますに、開明人はイギリス人と同じ風習を有して居る、これらにはつまりイギリスから分れ出た者で、故國の風を守つて居る者で、假りに歴史が傳はらぬとしても、吾人はその相互の關係を推知し得るのであります。しかしこれらは歴史があつて推知するまでもなく、明らかであります。が、一步深入りして歴史のないときとはどうかといふに、やはり同様に考へる事が出来るのであります。マダカスカルとジブとは、歴史上連絡を示さないが風俗は似

て居ります。兩者は互に關係あるものと思はれる。歴史の傳ふる所によつて風俗習慣に關係ある所以を知り得るは無論であるが、歴史がなくとも、風俗習慣をたよつて關係を知ることが出來ます。しかし縁故の有無は一二の點で、似て居るといふとを以ては判斷の出來ないとは無論であります。

この判斷をするに記憶すべき事が一つ二つあります。先づ風俗習慣の一致は、實際上の關係によるともある、日本で西洋風の行はれると、支那で漢人と滿人と同一の風をして居るとなどを以て推すとが出來ます。又同じ様な有様に應じてゐることがあります。支那の内地、スペインのグラナダ、アフリカの北方チュニス、アルゼリ等、こゝらには山の横に穴を穿つて住居するとが行はれますが、これらは決して住民間に相互の關係あるのではなく、全く生活に都合のよい場所、山の岩が掘りやすいなど、いふ狀況の同じい爲めに、同じ風俗が出來たのであるから、これを以て相互の關係を説くとは出來ませぬ。又偶然の暗合といふとがあります。アウストラリアのクインズランド人は、一方の足を地につけて、他の一方の足を舉げて立つて居る方の片足に着けて休む風があります。アフリカのナイール地方の人民もさう致します。これらは偶然の暗合といはねばなりません。又人が坐るのに膝を折る風は離れた地方に

も随分ありますが、これも我が邦の風と偶然の暗合をして居るものといはねばなりません。この通りに違つた地方の住民の風俗習慣相互の一致は、或は學んだのもあり、又暗合もあり、同状態から自ら一致するものもありますから、これらのみを以て縁故の有益を決するとは出來ませぬ。

ある異種族の風俗習慣を比較して見て、偶然にしては類似は多過ぎるとか同事情から出來たものとも見えぬとかいふ事、或有つたら、或は縁故が有るのかも知れぬと云ふ事に成る。併し借り用ゐた分との見別けを付けなければならぬ。いかなる點に於て種族の關係を見るとが出來るかといふに、先づ多數の點の類似、それも表面に出た類似でなしに、内部に隠れて居ると、即ち家内の私事など、いふとについては、類似といふとも参考になる。次に大人のするとよりも、子供のする遊戯といふやうなものが参考になる。親が子供に自分の子供の時をとを教へて遊ばせるからして、古いものが残つて居ります。衣服や住居なども、表面に見える所は變つて居ても、内部は變つて居らぬ事がある。上着ウエスタよりも下帯腰巻などにも、その形が残つて居ります。便所や臺所などは、座敷や玄關ほどに變るものでありませぬ。故にある地方の家と他の地方の家とをくらべるときには、便所や臺所を見、衣服をくらべるには、腰巻を調

べると云ふ様なとが必要であります。ものゝ排列方跡をおどる時の手つき足つきなども嗜好を示すもので、随分古い事が残つて居ります。

今一つ系圖的關係をさぐる材料となるものは、言語であります。言語は人々自由自在に變へるのではない、人の云ふのを覚えてゆくものでありますから、何分かの變化はありますが、新しい言語が俄かに出て來るといふとはない。又いづれに行つても、急に本國の言語を忘れるものではありませぬ。故に言語の類似或は一致は、異なつた種族間の關係を知り得るものであります。しかし一致するからとて、直ちに系圖的關係があると斷言は出來ませぬ。言葉の中でも殊に名詞の一致といふとは、一種族より他の種族が借りたのから起るとあります。ランプ、パンなどは、外國語でありますけれども、今日日本語中に行はれて居りまして、他の字を當ても容易に行はれませぬ、これらは他から移つて來たに過ぎませぬ。又名詞中に於ても鳥獸の名の類似は、鳴く聲を示すので類似するとあります、例へば日本語で「からす」といひ、イギリス語では之を「クロオ」といふなどは、音を眞似ての名であるから類似して居るので、つまり同じ考から出たから同じ名になつたのに過ぎませぬ。又言葉の中で暗合するともあります、言語の數はいづれの國も澤山ありますが、成るべく短く示

さうと致します、示さうとするものは數多いのに、示さうとする言語は尠く致さうと致しますから、類似の出來るといふことは、あるべきこととあります。新とニツ(NEW)の一致の如き、切るとキル(CUT)の一致の如き類は、即ちこの偶然の一致であつて、緣故のあるわけではありませぬ。かくの如く時としては、移つて來た爲めに一致して居るのもあり、又時としては同じ考から出た爲めに一致するものもあり、又偶然の一致もあるから、言葉を比較するに方つては、まづこれらの疑ひを糺して見なければなりません。

言葉の比較の時にいかなる點に重きを置いてしらべればよいかといふに、親族の名稱の如きは、最も參考となる者であります、親族關係の名はいづれの種類に於てもない所はない。又生活上日々用ふるに大切なもの、火水などにも名のない筈はありません。我彼等の代名詞、數を示す言葉、からだの部分の名、これらは一方が他のものをうつしたとは申されませぬ。さればこの邊の點に注意することは、肝要であります。又連續したる思想を表はす爲めの言葉の並べかた、即ち文法は種々あるべきに、それが類似して居る一致して居るといふならば、相互の間には系圖的關係があるかも知れぬと云ふ事が出來ます。しかし茲に注意を要するは、言葉のみならず、文法



迄も、ある事情の爲に他から借り用ゐる事があるとの事でありませぬ。アフリカのマダガスカル島に居るニグロはもとパンツウ語(Bantu)を用ひて居りましたが、此の所に來ましてから、ホヱア(Ewe)種族がその土地に勢力あるため、その種族の語を用ふるに至りました。又た北海道のアイヌは、アイヌ語あるに拘はらず、内地人と交はるに便なる爲めに漸次日本語を用ひる様になりました。かういふこともあるからして、唯言語のみに重きを置いて、一種族と他種族との系圖的關係を斷ずることは出來ぬのであります。言語は生れてから後に覺えるもので、生れながら持つて來るものてはありませぬから、教へかたによつて、いかなる言葉もつかふことが出来るのでありますから、必ずしも系圖上の關係を示すとのみ限りいふとは出來ないのであります。史傳風俗習慣言語等が系圖的關係をしらべるに参考となることは上述の通りである。しかしこれらばかりによつて斷定を下す事は出來ぬのであります。この他に系圖的關係をしらべるたよりとなるものはないかといふに、最も肝要なものがまた一つあります。それは身體上の性質であります。これは生れつきの性質であつて、他をまねると云ふ様なものは出來ませぬ。

それで體格上の調査といふものは、いかなる價值があるかといふに、人類の體格に

古今變化がないとは申されませぬ。しかし大體に於て通じた性は、いくらかもありません。極く似て居るのは近い縁で、似て居ないのは遠い縁同士であると認むることは出來ます。體格の中にも變りやすい所と、かはりにくい所とがあります。背の高さなどは當になりませぬ。故に體格上の調査をするには、

一、古今實際變化の動きもの。

二、一の團體に於ける通有性一團體中に於て性の。

この二つを調査して發見し得たものを以て判斷をすれば宜しいのであります。

骨格は古いものが残つて居りますが、骨格の他の點は、エジプトのミイラによつて、しらべることが出来るのみであります。ミイラによつて何千年前のエジプト人と今日のエジプト人とを比較する如きは第一の調査に必要であります。

この類の調査を以て見ますれば、髮の毛の縮れて居るとか、又は、伸びて居るとか、いふ性質は古今變りが見えず、鼻の形は、ローマ、ギリシアの古代の彫刻に現れて居るものと今日のイタリヤ人、ギリシヤ人の鼻と一致して居る、即ちギリシヤ鼻は額と鼻の峯とが一直線に近づいて居ると古今變らず、又ローマ鼻は額との堺に窪みがあつて、顴の嘴の如く反つて弓形となつて居ります、これも古今通じて居る。皮膚の色も古

今あまり變化がありません。エジプトの古繪畫に於て有るアフリカ内地の土人は黒く塗つてあります。これは今日のアフリカの黒人と同じこととあります。以上は古い物と今日のものとの比較、即ち第一の調査であります。次に第二の調査を試みます。一種族中にも背丈の高さ、眼つき、口つきなど様々なる中にも、髪の色、鼻の形、皮膚の色などは最も多く似通つて居る性質であります。さればこの三つが比較的變化の少いものであることは明らかであります。故にこの三つを調査することは、諸種の關係を考へるに最も肝要なることと明らかであります。これらは決して一種族が他種族のを眞似るといふこともあり得べからず、又三つの點に於て偶然に一致するといふことも考へ難く、又生理上さうあらねばならぬ必要もないものであります。已に然りとすれば、この三つは系圖的關係をしらべるのに、極めて肝要なることは明らかであります。

そこで、比較的近いとは歴史でわかる。風俗習慣等も参考になる。歴史のない時代とは風俗習慣言語などで知ることが出来る。しかしこれもいつとなしに變化するものでありますから、極古い時のことを考へるにはとてもこれらでは斷案をなすことは出来ませぬ。古い時からの關係は體格によつてしらべるより致し方がありません。大別から小別に入るとすれば、

第一、體格調査。

第二、第一に加ふるに言語風俗習慣の研究。

第三、第一第二に更に加ふるに歴史の研究。

かくの如くにして、各の調査が相扶けていつてはじめて系圖的關係のしらべが出来るのであります。故に先づ第一を以て分類し、次に第二を以て分類し、次に第三を以て分類するといふ風に、段々と小さく分けて行くのが適當であります。

アメリカのプリンントンのしらべかたは略ぼ之に一致して居ります。細かい點に於ては必しも同様ではありませんが以下説く所は大體に於てはプリンントンの分類法に従つたのであります。

前述の考へ方によれば、世界の人類は明らかに四團體にわかつことが出来まする。

一、髪の色が眞直で皮膚の色が比較的黃味を帯び、鼻は狭いと廣いとの中間に位するもの。

二、髪の色が波状を呈して、皮膚の色は主として白く、鼻の幅は狭いもの。

三、髪の色が縮れて居て、皮膚が黒く、鼻の幅が廣いもの。

四、髪<sup>まつ</sup>の毛が眞直あるひは波打つて居て、皮膚の色は銅色を帯び、鼻の形は中間のもの。

七八

この四區別は明らかに認め得るものであります。

第一に屬するものは、アジアの大部分、ヨーロッパの北方の一小部分とにひろがつて居ります。よつて私は之をアジア系統の人民と呼びます。

第二に屬するものは、ヨーロッパの大部分とアフリカの北部、アジアの西南部にひろがつて居ります。このものの中、歴史上古く知られて居たのは、アフリカの方のものそれからヨーロッパに居るもの、其の次がアジアに居るものであります。舊來の分布の面積から云つても、此の順である。よつてブリンソンは名つけてユールアフリカンと云つて居ますが、私は前のアジア系統に對してヨーロッパ系統の人民と呼びます。

第三に屬するものは、サハラ<sup>サハラ</sup>の砂漠をこめて、その南方のアフリカ全體にひろがつて居る昔からの住民であります。このことを南方アフリカ人とも云ひますが、私はアジア系統人民と呼びます。

第四に屬するものは、南北アメリカを通じて居る舊來の土人で有ります。

これをアメリカ系統の人民と呼びます。

右の何れにも入らぬものは、オーストラリアの土人、印度の海岸に居るもの、マレー地方よりヒリピン、マダガスカル南洋諸島等に居るものであります。これらの數も、尠くありません。これらのあるものは、第一に似、あるものは、第三に似て居りますけれども、一體島々や海岸といふものは、他から人が漂着して歸らぬといふことが屢々あります。故に、中には純粹の種族もありませうが、悉く純粹とは申されませぬから、島によつて分類をするなどいふとは出来にくいのであります。殊に隣りの島若くは同じ島の中にも、全く縁故のないものが交つて居るといふ場合も往々ありますから、この以上の系統中に入らぬ一群の人民は、更に分類するとは出来にくいのであります。上述の四系統に在つて今日でこそ一人民のひろがつて居ると他人のひろがつて居るのが相接して居りますけれども、昔を考へれば、系統各中心がどこかにあつたらしく考へられますので、人類としては又別てありますが、人種としては四つの中心があつたことと察せられます。然るに島々に於ては、どこがもとでひろがつたのか、今明らかにいふと出来ませぬ、大陸に居るものゝ如くには明らかに考へると出来ませぬ。さればこれを據所なく海岸島嶼住民といふ名を以て假り

に呼んで置きます。

八〇

前の四人民中ではアジャ系統の人民は聲の生をかたが多くない、ヨーロッパ系統の人民は聲が多い、アメリカ系統の人民は聲が極く少く、南方アメリカ系統の人民は主として聲が無い、海岸島嶼人民はいろいろであります。一體天然自然のものは必しも人間がわかつに都合よく出来て居りませぬ。これまでの人種別をする人々の中には、恰かもチャンと割り切れるものゝ如くに考へて居る人が有る様で有りますが、それはあやまつて居ります。世界の人類の大別はいくつかと問はれますれば、四つのものと一群の残りものと答ふるより外致しかたがありません。

世界の諸住民は系圖しらべを主意として考へれば、上の如くにするのが動きのないう分けかたといふべきであります。系圖しらべといふ主意に従へば、ある場合には言語も體格も参考になります。この主意に適ふ材料さへ用ひて考へればよいのであります、必らずしも一樣の材料のみで考へる必要は無いので有りあります。廣く人類として見ます時分にはこれに先づ所のものとがあつて、それが幾つかになつたといふべきでありますが、其の事は人類由來論に於て説くと致しまして、これより右の四系統及び海岸島嶼人民の各についてお話を致しませう。

### 一 アジャ系統人民

この人民のひろがつて居る土地は北方の平地勝ちの所と南方の山勝ちの所とに分かれ、各部の住民は用語の組み立てを異にして居ります。

南部に属するものは孤立語即ち語の位置によつて意を示す言葉を用ひ、北部に属するものは漆着語即ちニヲハの有る言葉を用ひて居ります。支那の語の如きは孤立語の適例、漆着語の例は日本の語の如きものがこれであります。以上の二つは略ぼ分れて孤立語の行はれます支那、西藏、暹羅、安南等を支那部とも申しますが、私は南部と呼びます。又漆着語の行はれる部をシベリア部とも申しますが、此所には北部と呼んで置きます。

#### 甲 南部

##### イ 支那人

支那の住民は人種として純粹でありませぬ、古くから居ました漢人と、滿洲地方から來ました滿人とが混じて居ります。滿人は北部に属し、漢人は南部のものであります。今日の支那住民は混じて居りますが、人種でいふ支那人は漢人のみを意味します。臺灣土人と云ふ者も、種としては漢人であります。

漢人の體格は、一般アジャ系統人民の體質を具へて居るとは無論でありすが北方ツングースと比すれば、額の所が前の方へ少しく張り出て居ります。ツングースは頭が左右に張つて居ります。顔の形が、モンゴリア人に比しては高さが多い。容貌は、滿人に比して、やさしげであります。

髯は自然に任すれば生えますが、風俗として若い中は剃ります。男子は太つて居るのを宜しとし、女子は痩せて居るのを宜しと致しますのが古くからの習慣であります。

同じ漢人中でも、南北によつて、いくらかの差があらます。南方のものは頭の幅を測りますと、前後を百として測定しますれば、左右八十二から八十五といふ様の測定であります。日本人は、北方の漢人は、前後を百とすれば、左右七十七ぐらゐてあります。身長は男子の生長したもののについて平均して見れば、南方の漢人は五尺三寸五分日本人は平均五尺五寸であります。

男子の頭髮はもと結束したので有りませんが、滿人の爲めに辮髮の風に變られました。地方によつて辮髮に長短がありまして、北方及び中部は短く、南方は長く又太く致します。髮が短ければ、馬の毛などを加へます。アラビヤ人トルコ人ペルシア人な

どが髯を大切にする如く、支那人はこの辮髮を大切に致します。

女子は鬘カサを結むすひます。

又足を縮める風がありました。女子は子供の時から足を布で巻まひまして、無理に小さい靴の中に入れます。これは漢人特有の風で、滿人には無いこととあります。滿人が始めて支那に勢力を得ました時にも、この女子の纏足のみは改めさせることが出来ませんでした。

服装はゆるい着物ゆるい袴を用ひまして、大體の構造は、男女とも似たものであります。一體に漢人間には、寒い時は、着物で身を温あたむるとが行はれます。滿人は着物よりも火を以て家を温めて暖をとる風があります。

家は煉瓦様の物を積んで作つたのも有り、木造も有り、塗り家も有ります。

食物は、米が常食で、肉食は豚、鳥、魚などから原料を取ります。牛肉を用ふることは尠すくうございます。嗜好品としては、酒、煙草、阿片が盛に行はれて居ります。茶も食事の時のみならず、間にも飲みます。

支那人に似たものは、隣の西藏人チベット人であります。

ロ、西藏人

西藏人は大凡の體格に於ては漢人と克く似て居りますが、尙こまかくいへば脊丈の高さは、地方によつていろ／＼の違ひはあるが低い所で五尺二寸ぐらゐ、高い所で五尺五寸ぐらゐと云ふのが男子の生長したものの平均身長であります。頭の形は前後、百に對して左右八十ぐらゐてありまして、大約日本人と同じであります。

髻は削つてしまひます。男子は頭のまわりにくつもの辮髪を下げまして、後でこれを集めて束ねて置きますのが古くからの風であります。中には頭髪を短く切つて、頭に片をぐる／＼巻き附けるものもあります。これは回々教の信者であります。女子は左右二本の辮髪をこしらへて居ります、又多くの辮髪をつくりて後に束ねて居るのもあります。

裝飾は多くつけます。以前は印度風が多かつたのですが、今は支那風が多くなつて居ます。又裝飾を兼ねて、御守を入れる容器を美しくこしらへて肩から下げる風があります。

着物は日本服の如く裾の長いものでありますが、原料は毛織、又は毛皮であります。ゆるい筒袖で裾が長く、少しく着物を上へあげて帯を締めますから、帯の上に袋の様にふくれた所が出来ます、こゝに物を入れます。男子は左の片肌を脱いで居ること

とが往々であります。寒い時には羊の毛皮の股引を引ぬることがあります。帯には紐をつけて、小刀その他の道具を下げます。富んで居るものは支那から緞子杯の衣服を取り寄せて着て居ます。

住居は木造で、土を塗つたのがあり、又天幕も行はれて居ります。

常食は、麥粉を捏つて食べます。

男女の關係については殆どあらゆる組み合わせのあるといふ面白い事實があります。喇嘛教の僧侶は無妻であります。普通の人の間には一夫一婦もあり、一夫多妻もあり、一女數夫もあります。兄弟數人ある所に一人の女を娶つて共同の妻とする如きが一女數夫であります。

#### ハ、印度支那人

ビルマ、暹羅、カンボヂア、交趾、安南などの住民は、皆似寄つたものであります。それを總稱して印度支那人と申します。皆漢人に似寄つて居ります。この代表として暹羅人のとを話致しませう。

暹羅人は、大體の容貌に於て、漢人に似て居りますが、相違を求めれば、額は狭く、顎狭く、頬骨が左右に張つて居るから、顔は菱形になつて居ります。鼻は低く、背丈の高さ

は五尺三寸、頭の幅は八十三前後の百に對し、髻は極く抄うございます。

八六

近來西洋風になつて來ましたので髻を生やすものが殖えて來ました。髪の毛は、女子も散髪にして撫でつけて居ります。しかしこれは近來西洋風になるにつれて西洋は婦人も散髪であると誤解してこれを眞似たわけでありませぬ。元來の風は男子は髪を剃つて中央の部分だけ残して、残した髪の毛を僅かな長さで切りませぬ、すると刷毛の様に毛が頭の上へ立ちます。女子は髪の毛を頭の中心の所丈伸ばして、他の部は短く切りませぬ。

容貌だけ見れば男女の區別が鳥渡付き兼ねませぬ。衣服もさうであります。凡そ世界中で男女の外形の一番わかりにくいのはエスキモーで、その次にわかりにくいのは暹羅人であるといはれて居ります。男女共木綿又は絹の布を腰のまはりに括り付け、後の縁を股をくゞらせて前に出し、その端を腹の所に挟んで置ませぬ。近來は襦袢の様なものを上に着て居りますが、下の方はやはりこの股をくゞらせて腹の所に挟むものに過ぎませぬ。

家は、元來のつくりでいへば、多く竹を材料としたのです。床は高く、其上に筵を敷く。

常食は米で、魚肉、獸肉なども用ひませぬ。

これだけで、南部を終ると致します。

### 乙、北部

アジヤの北方に住つて居るものと、エウロツパの北部に住つて居るものとの、相互に似て居るとは、古くから人の知つて居ることでありませぬ、それらは等しくアジヤ系統北部に屬するのです。

それで、ベルジムの博物學者ドマリオス・ダロイといふ人が注意して、これは離れた所に居るけれども、互によく似て居るから、學問上、通じた名をつけるとが必要であると云ひはじめました。

曾てこの團體をチラニアン(其元はペルシア人の敵國といふ意味の言葉から、とつた名なのであります)と申しましたが、今日ではこの語は、人が之を濫用して、アジヤ住民の中、アリアン語、セミチック語、及び支那語と關係を持たざる人民を總稱すると云ふ様な漢とした意味になつてしまひました。大體同じものであります。どういふ性質のものといふといふのでなく、どういふ性質でないものといふといふのであるから、正しい名といふとは出來ませぬ。

又ウラル山とアルタイ山の地方に住んで居るからといふので、ウラル・アルタイック (Ural-Altaic) といふ名を以て、この團體をよぶ人もあります。又フィン・オウグリック (Fino-Ugric) といふ名を以て、呼ぶ人もあります。これは、この種族中のフィン、ウグリアンなる二種族の名をとつたのであります。又モンゴリック (Mongolic) といふ人もあります。いづれも大意は同じとてありますが、モンゴリックといへば、蒙古人をいふ時の名と混じやすく、ウラル・アルタイック、フィン・ウグリックなどの名も、わるくはないが、分布の位置から云つて北部とするが穩かてせう。アメリカのブリントン はシベリア部と稱しましたが北部と云ふ方が他人種に於ける名稱と好く伴ふと思ひます。

この中に入るべきものは、

- イ、ツングウス。(純粹通古斯及び滿洲人)
- ロ、蒙古人。
- ハ、タアタア。
- ニ、フィン及びラップ。
- ホ、極北地方住民。
- ヘ、日本種族及び朝鮮族。

大凡右の六區別があります。各區別を次に述べませう。

イ、ツングウス。

このツングウス系のものゝひろがつて居るのは、支那の北のはづれより、カムチャツカに至る海岸を東の界とし、西はエニセイ河に至るまでの間にひろがつて居ります。先づその中、滿洲人について申しませう。

滿洲人は、今は南にひろがつて漢人と共に支那人民をなして居りますが、もとは支那本部から北に當る所に居たのです。

今日では、滿人と漢人とが混じて居りますから、一人一人のものをつれ出して、これは漢人か滿人であるかといふとは鳥渡むつかしい。しかし總括して見ればその間に自から區別は認められます。

滿洲人は比較的颜色が白い、漢人の方が黄色味を多く持つて居ります。體格も滿人の方が堅固で、髯の量が多く、利口そうに鋭く見えます。漢人はゆつたりして居る。舉動に於ては傲る如く見え、仕事の規模も滿人の方が大きい様であります。髯の色は髪の色とは違つて茶褐色の事があります。眼の色は淺黄色のものも往々ありますが、日本人の如く栗色なのが普通であります。



風俗は今日支那に行はるゝものであります。但し女子間に足を縮める風のあ  
るのは漢人で、滿人には、この風はありません。

又滿洲には一種の文字があつて、漢字の如き一字一字に意味あるものでなく、日本  
の假字の如きものであります。西暦千五百九十九年に、蒙古の字を學んでつくり出  
したるものであります。この字は滿人が用ひて居りますが、今日の支那の國では  
あまり勢力のある字ではありません。今日の支那の國ではやは、漢字を用ひて居  
ります。公の記録には、多くの人にわかるやうに漢文と滿文とを書きますが、それ  
でも漢文の方を重なることを書き留めるものと致します。

次に純粹ツングウス(通古斯)について、お話を致しませう。此人民は滿洲より北に  
當る所の森や沼や原のある所に群居して居ります。

容貌體格は、滿人に似て居りますが、生活程度は滿人より低うございます。殊に不  
潔にして居る爲めに、近傍に住んで居る、あまり清潔ではないものさへも、ツングウス  
を汚いと申して居ります。元來ツングウスとは、韃靼人が命じた名で、即ち豚と云ふ  
意だと申す事であります。

この人民は、體格上の性質からいへば、滿人に似、又彼等相互も相似て居るが、生活の  
状態と風俗の差によつて、この間に又分つとが出来ます。森の中に居るツングウ  
スと、野原に居るツングウスとは、先づ明らかに分たれます。

前者は人が往來するにも、荷物を運搬するにも、獸の力をからず、人自から致します。  
平原に居るものは、種々の動物を使ひます、ある所では馬を用ひ、ある所では馴鹿、ある  
所では犬を用ひます。よつて用ふる獸によつて、馬のツングウス、馴鹿のツングウス、  
犬のツングウスと區別致します。馬を用ふるものは、馬を用ふるものと蒙古人と同じき  
のみならず、他の生活状態も似て居ります。馴鹿を用ふるものは、コリヤックに似、犬  
をつかふものは、ユスキモーに似て居ります。

風俗の中には、滿人の風をなして居るものもありますが、又固有の風をも有して居  
ります。衣服は、毛皮又は布でこしらへ、又魚皮をつないで作る。又髪は短く切るも  
のもあり長くして居るものもあります。支那人は之によつて、別つて断毛子、長毛子  
と稱します。それから魚の皮の衣を着る者を、魚皮套子と云ひます。女子は髪を  
伸ばして編んで長く垂れて居ります。

#### ロ、蒙古人。

蒙古系のもものは、滿人、ツングウスなど、容貌體格に著しい差は認められませぬ。

氣質は北方の方は勇敢にしてよく勞に堪え、又人を疑ふとなく、一般に質朴の風があります。南方に住んで居るものは、漢人と雜居混交して、一體の性質容貌などが漢人と似て居る所があります。北方に比すれば、狡猾であります。

この人種は蒙古地方が本場でありますが、昔はずと西方までひろがつて行きましたとあります。カスピアンシイの近邊のウラルが邊までひろがつてゆきまして、カルマック(Kalmuck)と稱する人民を作りました。後又東方に立戻つて來て多數の者は本部の蒙古人と一所になつてしまひました。

衣服は今日の支那風、即ち滿洲風に似て居りまして、男子の髪は風も辮髪であります。女子は娘の間は數條の辮髪を下げて居まして、人の妻となれば、一つに纏めて編んで下げます。

鳥や魚の肉は、けがれたものとして、食ひませぬ。獸肉は食ひます。住居には二種類あります。一つは農業する者の家で、これらは、長く残る様に、木造に致します。一つは水草を逐ふ牧畜者の家で、これらは一種の天幕の如きものであります。矢來の様に細い木を立てめぐらしまして、屋根も多くの木材を以てつくり、蝙蝠傘を開いた様にして、その上に毛織の幕をかぶせるのであります。いつでも、脇へ持つて行くことが出来ます。

蒙古人は話が好きて、家が離れて居ても、わづかのとでも吹聴し歩きます。馬に乗るとが好きて、又多く馬を飼ふて居ります。わづかのとを話さうとするにも、馬に乗つて飛んでゆきます。男女共に馬に乗ります。

かやうに方々にゆきまします故に、東西南北と云ふ方角の念が強く、物の位置を云ふに、右、左といふ言葉は用ひませずして、何れの東とか何れの西とか、汝の東とか汝の西とか申します。

距離を申しますのも何里といふ確なとはわかりませぬ。馬に乗つて幾日かゝるとか、駱駝で幾日かゝるとか、駱駝で走れば幾日かゝるとか、馬でゆる／＼行けば幾日かゝるとか、馬や駱駝の走り、或は徐行するによつて、遠近を測つて居ります。

#### ハ、タアタア。

タアタアの本據は、トルキスタンでありますが、方々へひろがり出て、今日に於て、最も肝要なる人民となつて居るのは、トルコ人です。

一體トルコはエウロッパ、アジア兩大陸にまたがつて、兩大陸の人間が混じて居ります。今日のトルコ住民には、アラビヤ人、ギリシヤ人、サアカシヤ人、アルメニア人

なども雑居して居ります。トルコ人はサアカシア人、シールシア人など、トルキスタン人との雑種であります。

この地方に於ては、妻の他に、妾として美人を他から多く集めて来る風があります。然るに、この邊で美人のあるのは、コーカサス地方であります。而してこの邊の人は美人を妾に出すを耻ぢませぬ。よつてトルコには、多くのコーカサス地方の美女が来て居ります。

男女共筒袖で、裁附袴の様なものを着けます。男子は毛皮でこしらへた高帽子をかぶり、女子は頭に片を巻きつけ、男女とも靴を穿いて居ります。

トルコ人は、種々の點に於てヨーロッパ風に化し、容貌體格もコーカサス邊の住民に似た者がありますが、言葉は餘り變らずトルキスタンの舊を存して居ります。

#### ニ、フィン部

フィン部類に屬する重なるものは、フィン(Finn)、ラップ(Lapp)の二つであります。これはヨロロッパの北部ボスニア灣の近邊に住んで居ります。土地はヨーロッパであります。今日では、ボスニア灣の北に居りますのがラップ、東方に居りますのがフィンであります。ラップの居ります所をラップランド、フィン部の居ります所をフィンランドと申します。昔は今日のフィンランドにラップが居りましたが、フィンが後から来て、ラップは北方へ移りました。フィン部をフィンランド、ラップ部をラップランドと申すともあります。

兩者共に、ヨーロッパ住民としては、背が低うございます。フィンは、男子の生長したものに於いて測るに身長五尺三寸、ラップは四尺九寸であります。兩者共に額は丸く、フィンの方は前後百として左右八十三、ラップは八十五六であります。兩者共に額が短く、額は平で、押し附けた様で額骨が出て居まして、髻は少く、額は太く、唇は厚うございます。これはこの邊の人一般の特徴であります。ラップに於て殊に著しく見えます。開化の度を申しませうに、フィンとラップとは大にちがひます。フィンは男子は筒袖を着、女子は袴をはくなど、一般にヨーロッパ諸地の者とかはりませぬ。ラップは生活の狀態が餘程違ひまして、開化の度も低いのであります。

元來ラップは自からはサブメ(Sahme)と稱して居ります。ラップ(Lapp or Lepp)とは、スエーデンの言葉で魔法使ひといふ意味であります。このものゝ服装は、毛皮の筒袖股引であります。帽子は、烏帽子の如き、尖の尖つたものをかぶつて居るものもあるが、又ひさしの無い角帽をかぶつて居るものもある。

この人民の平生して居るとは馴鹿を多く飼ひ、バター、チーズなどをこしらへます。家は簡単な小屋がけ又は天幕テントであります。

ホ、極北地方人民

アジヤの東北に住んで居るものを總稱して申します。その一例はチュクチ (Chukchi or Tchukchi) であります。このチュクチといふ言葉はこの土地の言葉でスキ (Ski) 即ち兄弟分といふ言葉から訛つたのであります。

こゝに居るものは、エスキモーに似て居ります。エスキモーのわかれてはいないかといふ人もありますが、エスキモーよりは頭の幅が廣うございます。又用ふる言葉も、エスキモーのは聚合語を用ひまするし、チュクチのはさうでありません。他の點に於ては、北方で同じ様な所に住んで居りますから相似て居りまして、ある場合には混雜する如く見えるとがあります。

チュクチには、鱗はありませぬ。衣服は毛皮製の筒袖股引を用ひます。海陸の獸の毛皮でこしらへた靴を用ひて居ります。女子間には、身體裝飾として、いれずみを致す風がありますが、但し口の邊に線を引くらゐの簡単ないれずみであります。男子間には唇の兩端又は上下に穴を明けて、海獸の牙でこしらへました釘ネジを箱コめて

唇飾リップと致します。今日では男子間のこの風は衰へましたが、女子間のいれずみは今尙行はれて居ります。

家を造るには、極く簡単な小屋がけをつくり、又は何分か窪くぼまして、堅穴の如くにして家をつくります。馴鹿を常に飼ひまして運搬の用に供し、又其皮を用ひ肉を食ひます。鯨や海獸なども捕ります。用ふる道具は、開化の民と交通して、時に鐵の道具を得て用ひて居りますが、一般にいへば、まだ石器時代と申してよろしいのであります。

又チュクチの他にカムチアデエル(カムチルカ)といふのがあります。これも極北地方人民の一例であります。このものはイチチュレン (Italen) と自稱して居ります。今日では、その數は尠うございます。冬は穴に住み、夏は椽の高い家に住んで居ります。本來の風でありますが、今日では漸次ロシア化せられまして、衣服家屋など、皆ロシア風になつて居ります。元來の風から申せば、これ亦石器時代の人民であります。木鉢をこしらへまして、煮ようと申すものの中に入れて、水を入れて、石を焼いて水の中へ入れて、ジュウと云はせて、何度もかうして物を温めるのであります。

プリントンは、この極北地方住民中にアイヌを入れて居りますが、アイヌは世界

て有名な髯の多いものであるに、チヌチなどは髯がありません。分類上から云ふと此所に入れるべきものではありませんが、眞の地位が明かでありませぬから唯々地理の關係上此部で述べる事に致します。

アイヌの體格上の特徴としては、毛の深いと云ふのが最も著しいとてあります。殊に南に住んで居る我等日本人北に住んで居るチヌチなど、比較すれば尙更目立つて毛の多いとが知れます。

アイヌは、頭の形は日本人に比して狭うございます。前後百として左右七十七であります。又日本人に比して眼が窪んで居ります。以上はヨーロッパ人に似て居りますが、鼻の形は違つて低うございます。齒はよく美しく揃つて居ります。又アイヌの頭骨は一枚骨であるといふ俗説が北海道にあります。しかしこれほどのものでも、年をとればくつきまする。若いものは縫合が明らかに見えて居ります。故にこれは殊に珍らしいとはありませぬ。

髪は波形又は鈎形になつて居ります。男子は髪を耳の下邊で切つて置くのですが、先は縮れ上り或は巻き込んだ如くになつて居ります。襟の所は上の方まで剃り上げ、額の所は生際から指二本並べただけのひろさの所を剃ります。髯は大切に

蓄へて居ります。髯は多くは左右から寄せ、中央で尖らせずに左右にわけた形に成つて居ります。女子は髪を肩の邊で切ります。又女子は口のまはり手の甲及び腕に、いれずみを致します。口のまはりのいれずみは子供の時から少しづつ施しまして人の妻となる時分に完全するのであります。妻となつたしに、いれずみするのではありませぬ。男女共耳朶に穴を明けて環を箱めまします。

衣服は日本服に似たもので、其原料は楡の木皮を裂いて、水で晒して織り上げた布です。そのきれ地は、之をアツシと申しまして、それでこしらへた衣服をアミツト申します。脚胼は、はきまするが、足袋手袋はありませぬ。アイヌの婦人は、内地の婦人よりも好く肌を黧つて居ります。

家屋は、地面に柱を掘立てにし四角に造つて、まはりに藁箆張の如く茅を厚くめぐらし、屋根も茅を幾段にもして葺き、箆を地上に敷いて、其上にキナといふ藁を敷く。中央には囲爐をつくり、主人夫婦の爲めには、一尺乃至一尺五寸位の高さの寢臺をこしらへてあります。他のものは皆藁を敷いて、その上に寝るのであります。

うば百合を採つて葛粉の如きものをこしらへ、葛湯の類や團子の如きものをこしらへて食べます。又今日では粟種などをつくりまして、粥などをこしらへて食ひ

ます。又熊鹿鯨<sup>クマシカ</sup>鮭<sup>サケ</sup>などを食ひます。但し今日では漫りに鹿を捕るとは禁じてあります。

アイヌの風俗については、多くいふべきとありますが、他との釣合上、今は唯大體を脱くに止めて置きます。アイヌは、元來の住地と言葉の點からして北部の者と關係深きものとしてありますが、諸性質に於て總てさうと云ふのはありません。

へ、日本部

これに含むものは二つあります。一は即ち朝鮮人、一は日本人であります。まづ朝鮮人のとから申しませう。

朝鮮人は、顔の形は様々であります。先づ面長な方で、顎小く、尖つてやうしへへ壓し附けた様な風になり、口の形は、への字形になつて居まして、左右の兩端が下へさがつて居るために、弱げに見えます。齒は美しくして揃つて居ります。眼の外は上つて居る様ですが、これは鉢巻をして態と此の如くするので、癖が付いて居るのであります。この鉢巻は強く致しますから、時とすると頭にひだがつくほどであります。但しこれは男子に限ります。

男子も毛を伸ばして置くのですが、獨身の間は後にさげて編んで置きます。妻

を持ちますれば、頭上に髻を結びます。早婚の弊は認められて居ても、妻なきものは、いつまでも子供扱ひにせられ、大人扱ひを受けんが爲、早婚する風があります。女子は髪を後に垂れて編み又いろく<sup>く</sup>の髻も結びます。

衣服は住居に比べると餘程清潔です。男子は寛い袴を穿き、寛い筒袖を着て居ます。女子の着物は極短いのですが、胸の邊から装の如きものを着けて居ります。家は土と石とで壁を作り、之に草葺き又は瓦葺きの屋根を添へたものです。椽の下には室内を暖める爲め、煙が通るやうにして有ります。米を常食とし、魚や牛の肉をも食ひます。

次に我等日本人のとを申しませう。日本種族のある者は、朝鮮人に似て居りますが、他の者は、南西に居るマレー人に似て居ります。又地方によつては、北方のアイヌに似て居る體質のものもあります。日本人は實に區々でありまして、混交種族であるとは明らかであります。體格上のみならず、風俗習慣なども、いろく交つて居る様に思はれます。古代の遺物によつて見ても、亦其事が見えます。マレー方の分子、大陸方の分子、アイヌの分子などが、いろくの度に混じて居ります。而してこれらの諸分子は、よく混和されて居りますから、日本種族はいろく<sup>く</sup>の事に應

じ得る力を具へて居るものと見るとが出来ます。

以上でアジア系統の部を終りました。是等諸種族の西に住んで居るものは、印度人、アラビヤ人、ヨーロッパの東部人民等でありますが、これらはアジア系統人民に接しては居ますが體質が違ひます。一體地理のわかちと人種のわかちとは、一致しませんが或る者はヨーロッパに居てもアジア系統の人民といふべきであります。又アジアの住民中にも他の系統のものが居るので、夫等の事は追々に述べます。アジア系統に次ぐべきはヨーロッパ系統の事でありませぬ。

## 二 ヨーロッパ系統人民

ヨーロッパの大部分に住する人民は、皮膚の色主として白く、髪の色は波打つて居て、鼻の幅が狭く、又髭多きものであります。ヨーロッパは東北部を除いては、此の如きものが殆んど全體にひろがつて居ります。それと同じ體格のものが、アジアの一部に、アラビア邊から印度にかけて住んで居ります。又地中海の南方チニス、アルゼリイなどの地方にも色は褐色を帯びて居るが、他の點でヨーロッパ大部分の住民に似たものが居ります。

溯つてしらべて見て、古くはこのものはどの邊に居たかといふに、アジアの方へは

いつて来たことは凡そ知れて居りますが、いつからと知れぬのは、ヨーロッパのとアフリカのとであります。歴史の初に於て知れて居る所によつて、諸方にひろがつて居る割合を比較して見ますに、昔はアフリカとヨーロッパに多かつたので、アジアはその次でありました。此故に或學者は是等の人民をヨーロッパ、アフリカ系統人民、即ちイウル、アフリカンとも申します。サハラの砂漠邊から南には、色黒く、その他種々の點でヨーロッパ系統の者と違つた人民が住み、アジアに於ても印度、アラビアの東には違つた者が居る、即ちヨーロッパ系統の者は、明らかに一部類をなして居ります。

スイツランド、ベルジウム、フランス、イタリイ、スペイン、ポルトガル等には、この人民の太古の跡がありますが、印度の方にはありませぬ。西から東へ延びたと云ふのが、誠にしいのであります。又アフリカの北海岸にひろがつて居るものに就いては、すべて見ますに、やはり西の方がもとの様でありませぬ。さうして見ますと、此人民の本源地といふものは、何處であるかといふに、地中海の西のはづれ、即ちヨーロッパではスペインの邊、アフリカではマロッコなどのあたりらしく思はれる、それから段々わかれひろがつたものと考られます。

かく古くからの移住の方向から考へても、又現在の事實を本としても此人民は明らかに二つの部類に分つとが出来ます。即ち地中海の南部と北部とに分つとが出来ます。一を北部一を南部と稱します。

甲、南部。

西、マロッコより、東、紅海を越えてアラビア邊に住するもの、之を南部と申します。この中を類別すれば又明らかに二區別があります。西の方を古來ハミチック、東の方をセミチックと申します。昔の話しにあるノアの子のハムとセムとが、この邊の祖になつたのであると、古くから信ぜられて居ります。其話しは學問上價值はありませんが、今日のしらべによりまするも、兄弟分の如く似た點があると申すので、尙ほ此名が用ゐられて居るのであります。

イ、ハミチック。

ハミチックの中に、地方によつて又更に三つの小別を置くとが出来ます。アフリカ北部の中で、西に寄つて居るのがリビア人、その東隣に居るのがエジプト人、エジプトの東南、即ち紅海の出口の所に居るもの、之を東方アフリカ種族と申します。

一) リビア人。

このものは、今日地圖の上で名の附いて居る所をいふと、西の端はマロッコ、其次はアルゼリア、次がチニス、次がトリポリ、この邊にひろがつて居ります。現在の土人は、普通ベルベル(Barber)と稱せられ、その人間の居るところでありますから、この邊の事をバルバリーとも申します。

ベルベルと云ふ稱へに付いてはいろいろな説もありますが、土地の言葉で申せば、自由の民といふとであるのです。又スペインの古傳説によれば、今日のスペイン人の前に一人種がありました。これをイベリと申したと申して居ります。而してスペインの地名で、スペイン語ではわからぬ地名があるのを、段々しらべましたるに、リビア語であることがわかりました。よつてこのイベリはリビア語であらうと知らべます。いかにリビア語で自由の人といふとあります。この語の肝要な部はベルの音で、これが單數、複數は繰り返して云ふので、ベルベルと成る即ちリビア人とのである。これで兩地方の古代住民の同一種族なる事が推知出来ます。

このものは、體格上の性質を申しますと、一般にヨーロッパ系統人民の性質を具へて居る中に、背丈は高く、髭は多く、眉の骨が高く出て居まして、随つて眼が窪み、眼の光彩が青又は灰白色、髪の色は黄味又は赤味を帯んで居ります。



此の如き體格のものは、ヨーロッパの北方のものにも居ります。即ちドイツ、ノールウェー、スウェーデン、オランダ、イギリスの大部分などに居るものも、これと同じ性質であります。この形式のものをリビヤチュウトン形式と申します。相互相隔つて居りませけれども、彼等の本源は一つであると想像せらるゝものであります。

リビヤ人の風俗は、男は髪を短く切り、片を巻きつけて居るものもあり、頭を剃つてすかり合ふ頭巾の様な帽子をかぶつて居るものもあり、毛を一部分残し他を剃つて居る者もあります。女は毛を伸ばして後に垂れて居ります。

衣服は袖無しシャツ様のものと身に巻きつける大きな布とであります。女子は耳環、腕環などを用ひ、又足にも環をはめて居ります。女子の頭巾には額の所に飾をつけます。

パン、果物を重なる食物と致し、肉は御馳走としてのみ食ひます。酒も多くは飲まず、平生は水を呑んで居ります。

住居については、奇妙などがこの地方にあります。或は木材を取つて小屋の如き家をつくり、又天幕を張り平たい石を重ねて壁とし、又屋根にも平たい石を置いて、悉く石造にし、又山の半腹を掘つて横穴をつくつて、穴居とする者もあります。ト

リボリのゼンサンには一千以上の横穴があります。この邊の人口六千人でありますから、一つの穴に五六人づゝ住んで居る割合であります。かく様々の住居をつくるとは、他に例尠きとであります。

リビヤには、一種の文字もありますが、これは慰みに用ふるのて、後世に書きのこすとか、信書をつくるとかいふときの用は、なしませぬ。

リビヤ人は、今日はあまり勢力なく、他に支配せられて居りますが、西暦紀元前千四百年の頃には、エジプト人と戦ひ、三萬の兵を送つたなどいふとがあります。この時敗れて、エジプトの方へ、いろくのものを取られたとがあります。これはリビヤ人の方には記録も残つて居りませぬが、エジプトの方で、しらべるとが出來ます。この時エジプト人がリビヤ人から取つた戦利品の中には、馬、馬車、金、銀、真鍮、銅などの細工物、剃刀、その他の刃物、鏡などもありまして、當時のリビヤの開化の度は察せられます。

リビヤ人は、古くから、いくつかの小部分にわかれて居りましたが、他と戦ふときは相連合しました。それが爲めに、リビヤ人は、他地方のものから、いろくの名を以て呼ばれて居ります。エジプト人は、ナバウトと申しました、九つの弓といふ意であ

ります。ローマ人はクイイクイゼンテスと申しました、五つの人民といふとであります。今日アラビア人はカバイルと申します、聯邦といふ意味であります。いづれもいくつかの者が團結をして居ることを意味して居ります。

リビヤ人は、衣服などは簡單でありますがいろ／＼な工芸技術は巧たくみでありまして、又陶器たがひなども盛にこしらへます。次に東隣のエジプト人のとについてお話を致しませう。

## (二) エジプト人。

ナイルの岸に古くから住んで居る人民であります。今日その土地には、いろいろの他の國人が入り込んで居ります、トルコ人、アラビア人、シリア人、ギリシア人、エヂヤ人、その他様々のエウロパ人が多く入り込んで居りますが、人口から申せば、無論古くからのエジプト人が多数であります。此土地の元來の名はカムト(Kamte)と云ふのです。黒の國の義で、他に比して土が黒い土地が豊饒であるとの意であります。

エジプトといふ名は、ヘトプターカといふエジプト語の訛りから出たといふ事てあります。此國の古い都をメネフエトと云ひますが其所にプター(Pute)神の社を建てたので、一名をヘトプターカ即ちプターの神靈の社と云つたのです。此一地方

の名が廣く國名の如くに思ひ誤られたのであらうといふとてあります。

エジプト古來の住民には二部類あります。一はコプト(Copt or Kopt)一はフエラ(Fallah)即ちこれてあります。體格上の性質は、共に西隣のリビヤ人と似て居ります。同じやうなものをどうして二つに分つかといふに、フエラとはマホメット教の信者コプトとは耶蘇教の信者であります。數から申せば、フエラの方が多くて、百七十五萬人あります、コプトの方はこれに對して十五萬人といふ割合てあります。

一體にコプトの方が、社會の上にては、よく扱はれて居りまして、フエラの方は勞働者であります、従つて風俗にも優劣があります。

古くからの習慣として、男子は頭髮を剃り、女子は髪を伸ばして居ります。フエラは今も尙その古習慣を存して居ります。コプト中には、この古習慣を改ためるものもあります。

衣服は、ゆるい筒袖で、裾が長く、日本の浴衣ゆかたの裾を長くし袖を細くした如きものであります。男子は頭に布を巻きつけ、女子は頭を布で蔽ひ尙ほ其上に、眼だけを出す覆面おほひをする。コプトの風は次第に西洋風に化してゆきましたが、それでも頭あたまにはしかり合ふところの赤帽子に青總あざむすを下げたものをかぶります。コプトの女子も西

洋風は致しますが、覆面は舊の儘存して居ります。

エジプト人はリビヤ人に比し身長や、低く、眼の光彩には茶褐色のものがあ  
ります。又髪はや、黒味を帯びて居ります。

婦人の装飾としては、耳環、鼻環即ち小鼻に穴を明けてはめるもの、及び指環などが  
行はれます。又一種の化粧として、指先や掌を赤く染めるとがあります。又女子は、  
眼の周囲に墨をつけて、眼をは、さりさせるといふとを致します。古書によれば、男子  
も昔は眼のまはりに墨をつけたものであります。この風は、ヨーロッパ婦人間にも今  
尚ほ何分かは行はれて居ります。

農業が盛でありまして、穀物も多く、パンの類が常食と成つて居ます。又野菜果物  
も食用に供されて居ます。いろいろの肉食は、特別の御馳走としてあります。

家屋の建築材料は、石もあり煉瓦もあります。その他に、土を固めて煉瓦形にして、  
天日で乾かしたのもあります。此邊では雨を防ぐ必要がありません。屋根は  
唯日を蔽へば足るのであります。故に椰子の幹を並べる位で用が済んで居ります。  
平屋が多うございますが、都會の地には二階づくり三階づくりもあり、而して、  
上の方へゆくほど室がひろく出来て居ります。地震のないところであり、

からいふ家でも維持せられるのであります。

エジプトは今日では他のものに壓しつけられて居りますが、昔は盛なもので、ロー  
マ、ギリシャの文明の母でありました。しかしこれらのは、今現在の人民のとい  
ふについては、脇道でありますから申しませぬが、このとは記憶すべきとであります。

### (三) 東方アフリカ種族。

體格上の性質から申せば、リビヤ、エジプト等の人に似て居ますが、開化の度は、ズット  
低く未開の有様であります。衣服とて態々縫ひ合はせたものはなく、布を唯から  
だにぐる／＼巻きまして、それで身體を蔽ふて居るのみであります。男子は髪の手  
を集めて、鬘様につくつて装飾をつけます。一體野蠻人は多く男子の方が飾ります  
が、この種族に於ても、男子の方が多く飾ります。人を殺せば、そのい、として駝鳥  
の羽根を頭に押し、羽根を多く有して居るものは多く人を殺した、して、その  
地方の人からは尊ばれるのであります。

家の如きも、極く簡単な、圓錐形の小屋であります。牧畜をなし、又蜂を飼ふとを  
致しますが、長く一所に止まつて業を執ることは致しませぬ。

開化の度は一般に低く、氣性も殺伐であります。金屬で武器をつくとなどは知

つて居ります。風俗中には、古代のエジプトの畫で見ると、如き風をそのまゝに傳へて居るものがあります。一跡アフリカの土人中には、不釣合に、ある事柄の發達して居る者があります。これらは或はエジプトが盛であつた時分に傳へられたものであらうかと考へられます。

以上リビア人、エジプト人、東方アフリカ種族の三者は、言語なり體格なりで、一部類をなして居るので、總括してハミチックと申します。

ロ、セミチック。

以上の三者と似て、しかも三者が相似るほどには似ないものが、他にあります。それは即ちアラビア人などでありまして、總稱してセミチックと申します。

(一) アラビア人。

アラビア人の體格は前述ハミチックの者に似て居ますが、鼻の鷹鼻である事と、ひげの多い事が特に目立ちます。

抑、アフリカとアラビアとの交通の道は、一はスエスの地峽、一は紅海の南の口なるバブエルマンデブの海峽、この二つよりありませぬ。アラビア人は、西の方のアフリカ住民には似ては居りますが、東方の印度地方の者には似寄りが尠うございます。

しかしアフリカの東の方アラビヤに對する所にアラビシニ人といふのが住んで居りますが、これはアラビヤ人のわかれて有らうとの事でありませぬ。アラビヤ人の一部は其地の南端から西の方アラビシニに移つたらしく、又南部のアラビヤ人は元來北部から擴がつた形迹があるので、アラビヤ人が此地に入り込んだのは、恐らく北方スエスの地峽を通過しての事でありませぬ。

アラビヤ人は、生活の状態によつて、二つに分たれます。一は土着して商業などに従事して居るもの、一は水草を逐ふてあちらこちら移るもの、この二つに分たれます。土着のものは、久しく残る様な家をこしらへますが、水草を逐ふてゆくものは、天幕をつくります。この第二のものをベドウィン (Bedouin) と稱します。アラビヤ語で原野の人民といふ意味であります。

ベドウィンと土着アラビヤ人とは、生活の有様が違ふために、風俗も多少違ひます。土着はベドウィンよりは多少優等であります。兩者の著しく違ふ所は、ベドウィンの男は風呂敷の如きもので頭を包んで縛つて居ります。土着人は布を巻きつけて居ります。衣服は共に日本の衣服の如く、袖ゆるく裾の長いものであります。女は頭から片をかぶつて居ます。土着アラビヤ人の女は、知らぬ人には顔を見せず、眼ばかり

り出して居ります。又女は夫に見せ、又自ら楽しむ爲めに、裝飾として指環、足環などを用ひ、頸飾としていろ／＼のものをを用ひます。

パンと果物が常食で種々の獸肉も食用に供されまする。

アラビヤ人の間には、奇妙な風俗があります。黑人を連れて来て奴隸と致し、するが七年の間よく働させ、且つマホメットの教の信者になれば自由の人とするのみならず、従來の主人の家の家族同様に取り扱はれます。故に女はアラビヤ人に嫁ぎ、男はアラビヤ人を妻とするのがあります。斯様な譯からして血統の交つたものが幾らもあります。

(二) アビシニヤ人。

體格の性質はアラビヤ人と同じとてあります。開化の度はアラビヤ人よりは低いが近所の東方アフリカ人よりは稍優等てあります。

男子は髪の毛を一種の結びかたにして、髷の様にして頭の上に大きな玉をこしらへて餘の毛を下げ、する。女子は、毛を所々紐を以て壓へ附けて置まするるので自然髷の様になります。それへ簪を挿し、する簪は、金屬でこしらへ、まして丁度日本の平打ちの簪の如きものであります。或は又自然の花を挿すともあります。

衣服は男女共布をざり／＼巻き附けるばかりてあります。原料のよし、あしよりも、長いのを誇る傾きであります。

家屋も極く粗末てありますが、塗屋ぬりやてあります。食物としては獸肉を好み、殊に生肉なまにくを喜びます。

(三) ユダヤ人。

ユダヤ人は、昔はカルデヤといふ國をなして居りましたので、學問上カルデヤンとも申します。ユダヤ人即ちジウは、世界中方々あちこちにひろがつて居り、まして、總數九百萬人もあらうと云ふ事です。

容貌の特徴は鼻が中高なかなかになつて、弓形かまがたに反つて居り、小鼻の切り込みの深いこととす。

今日世界の諸國に居り、その土地土地の風に隨ふて居りますから、特別の風俗と申すものはありませぬが、性質に於てはユダヤ風を守つて居ります。一體に勇氣が尠く、且つ勞働を嫌ひます。しかし金の儲かるとなれば、どんな賤しいとでも致します。ヨーロッパ諸地方にて古着屋、又は塵芥掃除人などはよくユダヤ人が仕て居ります。日曜日にも、ユダヤ人は、他のヨーロッパ人と違つて、休まず店を開いて居り

ます。

ユダヤ人の中には政治家も學者も有りますが、一般にいへば賤しい心根があります。併し自身には血統の古く尊きとを誇つて居ります。

以上のアラビヤ人、アビシニヤ人、ユダヤ人の三つをこめてセミチックと稱します。

乙 北部。

ヨーロッパの大部からアジアの西部に擴がつて居るものが、これに屬します。この中又三つの別があります。一はスペインとフランスとの間のピレネイス山の山間に住んで居るものでありまして、今日では數少くなつて居りますもの、これをイッスカリック (Euskarie) と申します。今一つは、最もひろくひろがつて居るものでありまして、ヨーロッパの大部分から印度の方に連なつて居ります、之をアリアック (Aryae or Aryan) と申します。第三はコーカサスの山間に居るもの、之をコーカシク (Caucasic) と申します。

イ、ユースカリック (Euskarie)。

これはピレネイス山の邊に住んで居る者であります。此所の者は自分の用ゐる言葉をユースカラと云ひ、自分の居る土地をユースケリヤと呼び、自分等を總稱して

ユースカルドナックと申します。それで此ユースクと云ふ稱へを取つて種族名をユースカリクと云ふので有ります。通常バスク (Bask) (Basque) と呼ばれて居ます。これは (Vascone) と云ふ舊名から轉じて來たのです。

風俗は、普通我等の知つて居るヨーロッパ風と大した變りはありません。

言葉は若いものはスペイン語又はフランス語を用ひて、次第に全部さうなつてゆく様であります。元來の言葉はヨーロッパ語の古い形を存して居るので、ヨーロッパ語に付いての學問上の調べをするには、この邊は大切な所であります。

男女共活潑でありまして、體格よく親切でありまして、且つ狭い地には居りますが、その土地を念ふと強く、遠方に出稼しても歸つて参ります。中にはアメリカへゆきまして鯨を捕るとなどを業として居る者もありますが、決して國を忘れませぬ。成文法律とはありませぬが習慣をよく守りまして、約束を背きませぬ。

今日ではこの種族は、ピレネイスの一小部分に引込んで居りますが、もとは大分廣がつて居つた様であります。そのとは地名によつて知るとが出來ます。アストといふ言葉がスペイン、ポルトガルの地名に残つて居ります。又ウルといふ言葉の附いて居る地名があります。アストはバスク語で岩石又は山といふと、ウルはバスク

語で都會といふ事てあります。これらの地名の存する所は元來バスクが居たので有りませう。此他古物遺跡等を参考し又バスク語の殘つて居る事を調べて見ますと此種族は元フランス、イタリア、コルシカ、サアデニア、シシリイ、イギリスの一部分等にも廣がつて居たと察せられるのであります。今日では、其人口僅かに三十萬位となりました。

ロ、アリアック。(Ariac.)

これは大變分布が廣うございます。一體ヨーロッパの住民とアジア住民の或る者とは、互ひに關係して居るものであらうといふとは、随分古くから考へられて居たことでありまして又ヨーロッパ人の祖先は東方から來たものであらうとの考へも廣く行はれて居りました。これは主として創世記を信じての事でありました。ところが追々學問的に調べた結果、サンスクリット、印度のゼンド、ペルシアの古語、ギリシヤ語、ローマの古ラテン語、上これらの言葉が文法上互ひに縁故あるものなるとが明らかになつて來ました。即ち前には唯信仰よりしてアジア、ヨーロッパ兩者の關係を信じて居たものが、後にはたしかな證據を得たのであります。しかし尙東から西にうつたものといふ考は存して居りました。それで段々考へて見まするに、ヨーロッパにも、いか

にも東から人が來たといふ形迹もありませんが印度について云つて見まするに、ヒンヅーは西北方から來たものでも居たものを奴隸とし、又追ひ遣つたとの傳へとなつて居ります。又ヨーロッパに殘つて居ります古物は、石器から鐵器に至るまでのそれ／＼の順序が明らかに揃ふて居りますが、ペルシアや印度などには、初期に屬する石器類はありませぬ。これらから考へて今日ではヨーロッパの方がもとでありまして、それからヘルシア、印度などへ廣がつたものであるといふと、大概間違なからうといふと、なつて來ました。

そこでこれらの諸種族を總べて、假にアリアンと名づけるのであります。そこでこのアリアンなる人民は、どこがもとかといふに、諸學者研究の結果、ヨーロッパの西部が本源地らしい。それが第一に二つに分れたものであらう、その一つは北方に棲んだもので、皮膚の色の白いもの、一つは南方に棲んだもので、皮膚の色は、やゝ褐色を帯びたるものとなつたのであらうと云ふ事に成つて居ます。その白いものゝとをブルンド、褐色を帯びて居るものゝとをブルウネットといふ。北方が又いくつかに小別せられる、その一はレット及びスライヴ、その次がチウトン、東へ行つてインドエラニア、南方のわかれがケルチック、ヘレニック、イルリック、イタリックなどになつたのであるといふ

事に成つて居る。南方にも色々の別れがあります。

現在のアリアンに就いて申して見ますると、今も申しました通り凡そ八つ位に區別するとが出来ます。以下順を追つて述べませう。

(一)ケルチック。(Celtic, Kelt or Celt.)

この名は古くからありまして、ヨーロッパの古史にも見えてあります。ケルトといふのは總括した名でありまして、この中にゴール(Gaul)シムリ(Cymri)の二別があります。

その廣がつて居る場所は、ゴールの方はヨーロッパ大陸でいふと、ライン河の西南の方からフランスの中央及びスキッルランドの邊にひろがつて居ります、それから又スコットランド、アイルランド、アイルオスマンなどにも居ります。シムリはヨーロッパ大陸の方に於ては、ある部分はゴールと同地方に廣がつて居りまして又もつと西南の方に廣がつて居ります。フランス、ベルジウムなどにはゴール、シムリ兩者の種が残つて居ります。イギリスに於てはウェールズ、ゴンウオールなどがシムリの居る所であります。

シムリとゴールとは大體に於ては同じものであります、兩者をくらべて見ますれば、その間に自から別を認めるとが出来ます。シムリは丈の高さがゴールより高うございます、毛の色は、シムリの方は赤味を帯び、ゴールの方は濃い褐色であります。

今日のイギリス人は多くチウトンであります、その中に幾分かのケルトがあります。殊に北方は、チウトンでなく、ゴールのものが重に居ります。それでイギリスにおきましては英語が悉く行はれて居るといふわけにはありませぬ、北方にはゴールの語が行はれて居ります。アイルランドの如きは今日九十萬人中七十五萬人は英語がわかりますが、十五萬人は全く英語がわからぬのであります、これらの十五萬人は即ちケルト語を話して居るのであります。

一體このケルトの性質といふものは、心が動きやすく、高慢で、短氣で、勇氣はありますがそれは一時の勇氣で長く續かないと云ふ傾きがある、これは昔から著名のとてあります、今日でも尙さうであります。

古くローマ人はゴール地方に居るものは、シムリでもゴールでも皆すべてゴールと呼びました。イギリスに居るものゝ事はこれをブリトンと呼んだこともあり、またある場合には大陸に於ても



イギリスに於ても、それがゴールと分けられた事もあります。フランス人はウエルス人をさしてガロアと申します、ウエルス人はシムリの方にはいるのでありますが、それをフランス人はかく呼びます。而してウエルス人はアイルランド人をさして、これをギヂイルと申します。スコットランド人は、自分とアイルランド人とを同じ部類のものと認めてゲエルと申して居ります。かくの如く現在ゴールと名乗つて居るものはありませぬが、かくの如くゴールといふ言葉から轉じたらしい言葉は、あちこちに残つてあるのであります。

ケルトの最もよき例はフランス人でありませぬ。フランス人は、一體諸種族の雜ざりてありますが、もと今日のフランスの地に居たのはケルトであります。ローマの影響を受けて、言葉はラテン語を用ふる様になつて來ました、今日のフランス語は、ラテン語の轉化した者であります。後、北方からフランク人と云ふ種族がこの地へはいつて來ました。これは北方チウトンの分かれてあります。このフランク人が、大勢力を有する様になりました。しかし人種としてはケルトがフランスには大多數で、これに少數のチウトンとイタリイの方から來た人とがまじつてフランス人を成して居るわけでありませぬ。フランス、フレンチ杯といふ名はフランク人から出たのであります。

であります。ラテン民族と云ふのは言葉をもとにしての名です。

血統の方から云ふと住民の五分の三はケルトであります。故にまづフランス人をケルトの一として見て宜しい。フランス人、今日の性質中にはよく古來のケルトの性質を傳へて居ります。フランス人とイギリス人との仕事を比較しますれば、性質の差が容易にわかります。フランス人は名譽を好んで氣早であります、イギリス人は沈思熟考して實益を重んじます、フランス人は新奇の事物を好みます、イギリス人は古來の事物を大丈夫として好みます。

往々人のあやまつて居ることは、フランス人は華美で奢つて居ると思ふて居ることとであります。フランス人は晴れの席へは美しき着物を着て出ますが、平常は質素な風をする。食物におきましても、イギリス人ならば骨は棄てしまふと云ふところを、フランス人は少しもすたりのないやうに遣ふ。又フランス人は、他で食はぬものを食ひます。蛙、蝸牛、鼠、猫、鼠、狐、鹿などを食ふて怪みませぬ。平生の飲物はコーヒエであります、イギリスでは茶が常用として行はれて居るのであります。フランス人は又葡萄酒を盛に飲みます。

(二) イタリック。(Italic.)

人類學 人類現狀論 二、ヨーロッパ系統人民

イタリアの土地には、元いろくの人民が居りましたが、アリアンに属するものは南方にラテン、北方にウムブリカン及びサムニテスなどがありました。これらのものが段々と勢力を得て、イタリアを支配する様に成つて参りました。

イタリア人は、古くは中々勢力のあつたものでありまして、ヨーロッパの他の國々が開けぬ前、餘程の開化に達して居りまして今日のヨーロッパ文明のもとをなして居ります。併し今日では一體に他に後れ特に地方にいつて見ますと餘程後れて居る事があります。その著しい例は、穀物の皮を取りまするに、まづ牛に踏ませて、その後で箕にかけます。又麻をつくつてこれより自から糸をつくり、自から機を織り、自から染めて着る者もあります。又處によつては貨幣が通用せずして物品交換であります。今日のヨーロッパに、かういふ處があらうとは思はれぬ位であります。

繪畫彫刻等によつて調べて見ますると、古代のイタリア人と今日のイタリア人と容貌に變化の無い事が分かります。古畫彫刻等によりますれば、頭が大きく、額高からず、頭の頂が扁平であつて、鼻と額の間に窪みがあつて、鼻が弓形に反つて張り出して居ります。鼻と額の間は、それから下顎の幅が廣く、頤が角張つて見えまゝです。今日のイタリア人、殊にローマ地方の住民にも、この通りのものがいくらもあり

ます。故に今日のヨーロッパの畫家などは、モデルとする爲めに、これらの人々を雇ひます。イタリア人中にはこれを職業として諸方に雇はれてゆく人もあります。その他の性質を現在のイタリア人についていへば、髪の色も黒く、皮膚の色はやゝ褐色を帯びて居ります。

衣服は、今日普通のヨーロッパの衣服と同じものであります。食物に付てはマカロニといふものを盛んに食ふと云ふが注意すべきこととあります。管形の饅頭の如きものであります。

今日のイタリアは、近傍の國の發達に伴はず、比較的衰へて居る様であります。ある點におきましては世界に大勢力を持つて居ります。それは何かと云ふとラテン語から變化した所謂ローマンス語が世界にひろがつて居ることとあります。イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語、シラキア語、スキツラニア語、ラヂニシ語などは皆ラテン語から變化したものであります。これらの言葉は、現在その地方に行はれて居るのみならず、アメリカにこれらの言葉のいづれかが行はれて居ります。昔ローマ帝國の極々盛であつた時の領分に比べて見ても、其五倍の廣さの所にこのラテン系統の言葉が廣がつて居るのであります。

## (三) イルリアン。(Illyre.)

アルパニアの住民を申します。今日二百萬人ほどあります。昔のイルリアンと少数のギリシア人及びスラヴ人とのまじつて居るものでありますが、しかし大部分はイルリアンであります。彼等自身は今日はスキペター (Skypetar) と申して居ります。山間の民といふ意であります。

この者は格體よく背丈も高く立派であります。一體に派出なものを好みまして、男女共衣服はうつくしく見えるものを用ひ、あるさかたも威張つてあるくといふ様な風を好みます。すべて高慢な風を好みます。女子の風はヨーロッパ一般の風に似て居りますが、男子は下には足にし、かり合ふ股引の如きものはき、上衣の裾の所には膝を蔽ふくらゐの装の様なものを着け、頭は美しいさかれて包んで居ります。男女共に刀をさします。

半開の有様でありまして、心が動きやすく、争が好物でありまして、武張つたを好みます。今日トルコの兵の中、格體上からいへば最もよい兵を、こゝから出します。しかし多く集つて號令に従つてよく働くと云ふ様なものは他のものに及びませぬ。一人一人の兵としては最も強いと云ふ事でありまして。互に倭しあふて、弱いものを

強い者がいぢめるとを常として居ります。一旦信用を得て友達となれば親友となりますが、間違つて敵とすれば猛悪なる敵となります。もとは耶蘇教を奉じて居りましたが、西暦十五世紀の頃、トルコ政府の爲めに強ひられて、回々教に籍を置く様になりました。

## (四) ヘレニク。(Hellenic.)

今日でいふギリシア人のとであります。もとのヘレネスといふものに、他のものがまじつたのでありまして、極く純粹とは申されませぬ。そのまじりものはスラヴ、トルコ等であります。

ギリシアの土地のついで先に申し置きたいとは、海岸に出入りが多く、山が又多いといふとであります。爲めに多くの小地方に限られてしまひまして、大都會が出来ませぬ。故に人口が殖えませぬれば、其一部分は他の地方にゆきまして又そこに町をひらきます。かくの如く一つの町を離れて他へゆく時には、其他にいつた所の人は、もとの市をメトロポリス (Metropolis) と申して、母の町といふとあります。

此言葉は、今日では唯都といふだけの意でありますが、實は母市の意であります。

ギリシア人の體格上の性質も、古來あまりかはりのなかつたとは、やはり彫刻によ

つてわかります。眉の間に長く頭が圓く、額と鼻との間に凹みがありませぬ。鼻は細く、鼻筋は額から鼻直に通つて居ります。かくの如き鼻をカリシア鼻と申します。顔は卵形であります。今日のものに就いて申しますと、皮膚の色はイタリア人に比較して白く、髪は褐色を帯び、眼は青又は灰白色であります。ローマとカリシアは等しく古史に於て名高いので似た者の様に思はれて居りますが、かくの如き差違があります。

服装は、女子に關しては特別に云ふ程の事はありませぬ。男子は筒袖で裾の開いた上衣を着、足には細い股引をはいて居ります。赤くて頭にしぐり合ふて上に總の附いて居る帽を冠つて居ります。今日ではフランス風を次第に模するものがあるやうになつて來ました。仕立屋などでは今日はフランス風の衣服をつくるものが多うございます。靴もフランス風が多うございます。

(五) レチック。(Lethic or Letts.)

ヨーロッパの北方バルチック海の近傍に棲て居るものでありまして、一部はブラシヤに屬し一部はロシアに屬して居ります。政治上にも學問上にもあまり今日は肝要なものではありませんが、アリアンに關する問題をしらべるには、價値あるものであ

るものであります。

この言葉はサンスクリットによく似て居ります。特別に教育をうけたともないものにサンスクリット語を聞かせると、一語一語はわかりませぬが大體の意味をとることが出来ることへ申す位です。アリアンが諸方にわかる前の言葉がそのままに存じて居るものと見えます。

今日では、このもの總數二百萬ぐらゐしか居りませぬ。風俗習慣は特にいふ程の事も有りませぬ。背丈は高く、色白く、眼の虹彩が青色である。

(六) チウトロニツク。(Teutonic)

チウトロといふ名は、ヨーロッパの古史に見えて居るとであります。その起つた所から考へますと、レント、スラブの一部のわかれたものであらうとの事でありませぬ。古くはドイツの中央部及び西部、北方はスカンデネビヤ、この邊に重に棲んで居ました。ヨーロッパの歴史に見えるゴッス、バングル、アングル、サクソン、ゲエン、ノルスマン、フランクこれらのものは皆チウトロの一部であるのです。現在生存して居るものにおきましては、ドイツ、オーストリアに住んで居ますドイツ語を話す住民、北方のスエデデン、ノルウェー、デンマルク、アイスランド、こゝらには殆んどこのまゝにチ

ウトンの血統が傳はつて居ります。オランダ人、スキツルランドの西部及びイギリスの大部分の住民、これら皆チウトンの系統を傳へたるものであります。

チウトンの體質は大概リビヤ人と同じ様でありまして、背丈は高く、筋肉はよく發達し、髪は黄色味又は赤味を帯び、皮膚は白く、眼の虹彩は灰白色で、ひげが多く、リビヤ人に比すれば色は白いが他の體質は、リビヤ人とほとんど同じとであります。古い時代の史家の申した北方の蠻人といふのは、即ちこのチウトンのとてでありまして、古書にある蠻人の體格といふのは、一々現にヨーロッパの北方に住んで居るものゝ體格と合ひます。性質は敏捷でない方で、ゆくりして居て實用を尙びます。弊を申せば、或は頑固の傾きもありますが、ものを考へるときよく考へまして、大丈夫とつて事をするといふ風があります。今日世界に於いて、政治上學藝上商業上諸種の點について勢力を持つて居るものは、イギリス人、ドイツ人及びアメリカ合衆國の人民、これらがどの點についても大勢力を持つて居るものであります。これらは何れもチウトンであります。

ドイツ人の性質として奇妙などは、他の國人に接して居れば、その方に似て來るものであります。北方デンマルクに接して居るドイツ人は、氣質風俗などもスカンヂナ

ビヤ風になつて來ます。又ロシアの方に接したものは、スラブ風になり、南方はイタリア風フランス風即ちラチン風に化せられて居ります。引くるめて申して見ますと、ドイツ人は人爲のとを好まず、天然自然の有様を好みます。自然に繁茂して居る森や林の中に、そのまゝの所に家をつくり、窓もあまりつくらず、明け放しせず、薄暗い所に居るとを好みます。フランス人やイタリア人は、人爲を尙び、家なども明るいのを好みますが、ドイツ人は好みか違ひます。ドイツ人のする仕事は、又綿密でありまして、氣長に面倒などを飽かずやります。

イギリスにもチウトンが居ります。イギリスにはケルトも居ますし、又元來古くから土着の人民も居りました。そこへ大陸の方からアングルサクソン杯がはいつて來たのであります。臺灣の蠻人は、今日では七八種類ありますが、皆マレーであります。違つた時代にマレーから來た様であります。イギリスへはいつて來たアングロサクソンも、さういふ風にして、同じ源からたゞにはいつて來た様であります。西暦紀元九世紀十世紀十一世紀の頃は、已にノルマン、デーンなどが次第にはいつて來ました。益、チウトンの種が多くなつたのであります。

ドイツ人もイギリス人も等しくチウトンでありますけれども、ならべて見ます

といくらか違ひがあります。その一つを云ふと頭の形でありまして、イギリス人の頭は、正面から見ますれば圓く、ドイツ人の頭は、何分か押し平めた様な頭であります。イギリス人は又上半身の發達が宜しく、一見して勞働又は航海術工業等に、よく適して居るものらしく見えます。又事實に於てもさうでありませぬ。同じ喧嘩でもイギリス人は腕力を以てなぐり合ふ、フランス人なら蹴合ふのであります。

イギリス人の性質は、一般チットンの性質がありますが、その中に何分かケルトの種がまじつて居りまする爲めに、中には氣輕なものもあります。又冷淡でない、多感なものもまじつて居りまする。しかし重なる性質は着實であつて、よく物事を考へてするのであります。容易に事にかへらぬかには、一旦仕かければ中途で棄てるといふとは致しませぬ。又自信が強きあまり、高慢に傾きまして、我が流儀ほどよいものはないと致し、随つて他のものを劣等と思ふとがありませぬ。又何事も大丈夫といふとを考へて見ながら致しませぬ。新らしいとを用ふるといふ事がフランス人の如く速でありませぬ。

こゝに附けて云ひ置きたいのは、アメリカ合衆國入のとてあります。アメリカ中のイギリス種の者をアングロアメリカン、又はヤンキイ(Yankee)と申します。ヤン

キイとはフランス人がイギリス人をアングレンと呼んだのを聞き誤つて、アメリカ土人の云ひ出したのであります。今日ではヤンキイといへば、生意氣な者といふ様な輕蔑の意味につかふ様になりましたが、もとは土人の呼んだ名なのです。

このイギリス種のアメリカ合衆國人は、移住してから凡そ十代乃至十二代ぐらゐしか代を重ねて居りませぬが、性質體格などが、いくらか違つて來て居ります。頭はイギリス本國人に比して小さく、頭細く、顎が四角張つて居ります。眼窩はイギリス人より深く、手足の指は、割合に長うございます。婦人の骨盤の幅は、イギリス人よりは狭うございます。皮膚の色はイギリス人は赤味を帯びて居りますが、アメリカ人はその赤味を帯びて居るとが尠うございます。髪の毛はイギリス人は赤うございますが、アメリカ人は黒うございます。

性質に於ても、アメリカ人はイギリス人よりも氣輕であります。これはアメリカに往かうとした人の性質が、已に本國に留まらうとするものよりは違つて氣輕であつたところが一原因であるといふやふなともあらうが、概して氣輕でありまして、時としては無分別な所があります。イギリス人は評判取に事をするといふこと少いが、アメリカ人には時々唯名をあげるといふことを好む者が有ります。

フランス人はいろ／＼の料理をつくりまするがすべて無駄のないやうに致しませる。肉は肉で食つて骨髓からは又別の食物を作ると云ふ様に致します。イギリス人は肉を食はば骨は棄てるといふ様な大ざばな風があります。フランス人はコフィを常用と致しますし、イギリス人は茶を常用と致します。フランス人は葡萄酒を常に飲みまするが、イギリス人はそれ程には飲みません。

(七) スラボニック。(Slavonic.)

スラヴといふ名も古くからあつたのでありますが、それはいろ／＼のものゝ總稱でありまして、シリアン(Syrian)とか、サルマシアン(Sarmathian)とか、マサゲト(Massaget)とかいふこれらのものも、皆ひろくいふスラヴの中にはいるべきものがあります。今日その系統を傳へて居るものは、第一にロシア人、ポールブラシアの中のウエンド種族、ボヘミアの中のゼックス、トルコの中のブルガリアン、セルビアン、モンテネグリアン、ハンガリーの中のダルマチアン、クロアチアン等、皆スラヴであります。

スラヴの通有性は、先づ皮膚の色の白いこと、髪の毛の色が麻の様な淡黄色、ひげは多く、背丈は高く、體格が丈夫であります。而してある點に於ては、むしろヨーロッパ

風といふより、アジア風のところがあります。それは頬骨が高く張つて、眼と眼の間が平であつて、鼻の先は、やゝ上の方に向いて居ります。これらの點は一般ヨーロッパ人とやゝ違つて居ります。眉毛は外上りて中間は薄くはあるが相合してつながつて居る、それらが先づ體格上の通有性であるのです。

現在のスラヴ人は純粹でありませぬ、地方地方でまじつて居ります。スラヴは、西東南の三部に分かれたるのですが、西はポール南はバルカン半島住民、東と云ふのがロシア本國人であります。

このスラヴはヨーロッパのアリヤン中最も遅く開化の中間入りをしたものでありまして、近い百年ほど前からして、大に開けて來たのであります。このスラヴは、多く集つて居る時の性と、一人一人の性とは違ひます。多く集れば無法な事も企てます。一人一人の性はまことに温和親切であります。舊來の風で云ふと家屋は材木を井桁の如く、積み重ねて作るのです。寒いときは羊の皮の衣服を着るのですが、毛の方を身體の方に向けまする。東スラヴ即ロシア本國人は又大ロシア人、小ロシア人、白ロシア人の三つに分かたれる。第一は大ロシア地方の者で體は小さく、第二は小ロシア地方の者で體は大きく、第三は西の方の者で膚が最も白いのであります。

インドに居るものと、エリニア(今日のベルシヤ)に居るものとを總稱してかく名づけたのであります。これに入るべきものは先づベルシヤ人、それからアフガニスタン邊の者、それから印度のヒンヅーなどであります。この部類の例としてヒンヅーのことを少しお話致しませう。

印度の現住民には、極く古くから居つたものも有りますがそれはアリヤン以外の者である、ある時代にはいつて来たものとあります。今こゝに云はむとするは西暦紀元前千何百年と云ふ頃に他からはいつて来たものゝこと、インヂヤンと稱しても宜い譯ではあります。今日ではアメリカのインヂヤンと區別せむが爲めにヒンヅウと呼びます。此人民が即ちアリヤンであるのです。

體格は先づ多くのエウロッパ系統の人に似て居りますが、一體に手足が瘦せて居りまして皮膚の色は或る者は白に近いが他の者は褐色を帯びて居ります。印度人の性質は、極く温和でありますが、臆病の傾きがあります。早解かりがすると云ふのは好い點であるが、同時に長持ちがしないと云ふ缺點もあります。古くからあつた普通の風をいへば、腰のまはりに布を纏ひ、又は短かい股引をはき、

他には全身に大風呂敷様の布をぐるぐる巻き附けるのであります。此他シャツ様のものを着る者もあり、女子中には袴を穿くものもあります。一體に衣服そのものを美しくするよりは、別に附屬物をする事が行はれて居ます。女子でいへば耳環、鼻環を用ひ、手足の指、手、頸、足、頸などにも環をはめます。これらは金銀で作り、又は寶石をはめ、杯して有ります。女の見ても男の見ても、すべて小さい中は全く裸であります。その巻きかた、色などは、社會の階級、人々の好みなどによつて違ひます。又額の所に膏藥の様な物で作つた印しをつけて居るものがあります。三字形、人字形、丸形、川字形などさまざまでありまして、各自奉ずる所の宗旨によつて違ひます。毎朝顔を洗つてつけかへるのであります。

社會の階級が明らかについて居りまして、一の段階のものは、他の段階に移る事が出来ず、縁組も出来ぬ位であります。階級は四つでありまして、第一が僧族、第二が士族、第三が平民、第四が奴隸であります。僧族に屬するもの、必らずしも宗教上のことのみには注意するのではない、教育などの事をも取扱ひます。士族は第二に位するのですが、治國者はこの階級から出ます。平民には農商工の別があります。何れも世



製の仕事をしなければならぬので、腕次第で他の階級となると云ふとは出来ないのであります。古傳によればこの四階級は人類のはじめから別であつたものと説いてあります。ブラマ神の口から出たのが僧族の祖先、腕から出たのが士族、脚から出たのが平民、足の先即ちからだの最もいやしい所から出たのが奴隸の祖先であると説いて居ります。此最級の者はアリヤン以外の舊土人で有りませぬ。

このヒンヅウは元來ヨーロッパの方から移住して来たものでありするがその中一部は再び西に戻つたのが近來知れて来ました。それはジプシー(Gypsy)と云ふものであります。彼等はヨーロッパ諸地方に住んで居りますが家無しに馬車住ひをして居ます。馬車は二頭引きで屋根から烟突が出て居りますが窓の所には鳥籠が掛け杯してある市中勝手に乗り廻はし時々原野にゆきしてはテントを張り又忽ちそこを去るといふ風に諸處方々を流浪してあるいて居ります。蝙蝠傘、椅子の繕ひ直しなどが表向の常業であります。その他鑄掛屋なども致します。又占が上手と信ぜられて居りまして老人杯身上判断をして貰ひます。以上が正業であります。その他甚だ巧みに鶏泥棒を致します。彼等自身は昔エジプトから来たものであると云つて居りますがしかし學問上の研究によりますれば體格上より申しまするも言

葉普噺迷信などから見まするも最もよく印度に縁を持つて居ります。段々調べた結果凡そ西暦十二世紀十三世紀の頃印度から分かれ出たものであらうといふとに成つて居ります。服装食物などは其地々々の風に從つて居りますから今特にいふ事は致しませぬ。女子には美人が多いといはれて居ります。

#### ハ、コーカシク。

此所の者はもヨーロッパ系統人民の本源に當る者であらうと考へられて居りましたのであります。それは今から百年ほど以前にドイツのブルメンバハが人種の頭骨を集めて研究しました時、形のよい頭骨を撰んでヨーロッパ人種の代表としやうと思ひまして會々撰び取つたのがコーカサス地方の女の頭骨でありました。此事からしてコーカシヤンといふ名も出たのであります。それから後に成つて代表となる好い形の頭骨は、つまり純粹な故であらうと云ふので、遂にコーカサス地方が恐らくヨーロッパ人種の本源地であらうといふ様になりました。

併し近來のしちべによりますれば、コーカサス地方には、ずつと太古の遺物はありませぬ。古いと云つても餘程進んだ奇麗な石器や青銅器などがあるばかりであります。ヨーロッパの中央から西の方に遙かに古いものがあります。今コーカサ

ス地方に居るものを見まするに、小地方に従つて體質も言葉も様々であります。ローマ隆盛時代の人もこの地方の旅行には七十人の通譯者を要すると云つた位であります。もと別々の所に居たものが、後世様々の事情によつて集つて来て、コーカサス地方の住民といふものをなしたものであらうと云ふ事に成つて來ました。男女共美人が多うございます。ペルシア、トルコなどには女を多く養ふ風があります。すが彼等はこの地方に來て連れてゆきまする。故にこの地方の種はペルシア、トルコなどの人に多くまざつて居ります。

### 三、アメリカ系統人民

アメリカの住民の中には、歴史でよくわかつて居る時代に、ヨーロッパから移住したのも多うございまして、夫れ等は、合衆國カナダ地方、南米等に居ります。斯様な外來の種族で無く別に古くからアメリカの地に土着して居た土民も有ります。コロンブスが始めて此地に來ました時に、世界を一周して印度へいつたと思ひ、隨つてその土民をインデヤンと致しました。後その誤は直ちに知れましたけれども名は容易に改まりませず、今日もこの名を襲用しまして、本統のインド人は、却つてヒンズウと呼ぶ事に成りました。又有名なクック氏は、南洋諸島をまはりまして、多くの人種

に接しましたが、これも氏はインデヤンと呼びました。これらまでも含めれば、インデヤンといふ名は非常に廣いものになります。今日インデヤンと申すのは、狭く限られまして、アメリカ舊來の土人のみを稱するのであります。唯インデヤンとはいはず、制限をつけて、アメリカンインデヤン、又はレッドインデヤン、即ち赤きインデヤンといふ人もあります。

アメリカ舊來の土人一般の通性を申せば、皮膚の色が赤味を帯びて居るとであります。古人がレッドインデヤンと云ひ始めたのは、肌を赤く塗つたのと、自然の肌の色とを混じた氣味もあります。が生れ付きの事を云つても、諸人種の中では最も赤いものであるのです。それから毛髪は、眞直なものもあり又波状をなすものもありまして、同じ部落中にも混じて居ります。鼻の幅は中等であります。即ち或る點に於てアジアの人民に似て居りまして、正面から見ましたときには、随分アジア系統の者に擬ふものがあります。しかし側面から見れば、アメリカ土人は、鋭い小刀で削つたと云ふ様な風で、これから鼻、これから額といふ様にかさり區別がついて居て、圓み有るアジア系統の者とは違ひます。アメリカ土人には、男子にもひげがありません。少くとも鬚が生えれば、抜き去る風があります。

風俗は地方の異なるに随つて相違があります。言葉は大體の組み立ては同一であります。ポリシンセチック又はインコボレエチブなどいふ名がついて居るもので、幾個もの言葉を並べて一つの言葉とすると云ふ様なものでたとへば何々をこへ持つて来いといふのが一つの言葉となつて居るのです。一つの言葉が他の國の文章の如き形をなしまして音便おんべんで以てくつついてしまふのであります。アメリカの地が極り好く幾つかの部分に分かたれる通り種族も分類が出来ます。先づ北アメリカ、中央アメリカ、南アメリカの三地方に應じて北部、中部、南部の別が立てられる。北アメリカには西に偏つてロッキイ山がありまして夫れを元とすると一は西の方太平洋によつた方、他は東の方太平洋によつた方と、かう二つに分ちます。北の方へ行くと山の境界かいがいなしにつながつて居りまして此所の者が又一部類をなして居ます。

中央アメリカ住民は、メキシコ地方の者と、地峽の地方の者との二つにわかたれます。

南アメリカはアンデス山によつて西と東の二つにわかたれ住民も東の方太平洋側の者、西の方太平洋側の者にわかたれます。

故にアメリカの土人を大別すれば三つになり、更に分かつては七つになるのであります。

#### 甲 北部。

##### イ 極北部。

##### (一) エスキモー。

極北部の例として探るべく、又数も多いのはエスキモーであります。エスキモー自身はインヌイト(Inuit)と稱へて居ります。人間といふ意味であります。古い物語に神様が土を以て人をつくられたときに、理想的のものは容易に出来なうだが、最後に出来たのが自分等であつた即ちエスキモーは最も正しき人類である、他のものは不出来であつたから棄てられてしまつた、それらが外國人なのだと傳へて居るのです。

エスキモーといふ名は、近傍の人の命じた名でありまして、彼等は好んで生肉を食ふと云ふ所から斯く呼ばれるのであります。カナダの土人の語では「生肉食なまにく」といふ事をエスキマトシク(Eskimatsic)と云ふ。之を書きあらはすに、デルマルク人がエスキモ(Eskimo)ノランヌ人がエスキモー(Eskimauk)と綴り出したのであります。

アメリカにおきましては、東西に廣がつて居る事このエスキモの如く廣いものは他に例がありません。東はハドソン灣のあたりからグリーンランド邊西はベーリング海峡に至る北アメリカの東西の幅を蔽ふて居りますが體質風俗言語とも皆好く似たものであります。

エスキモの體は小さいと一般の人は思ふて居る様であります。平均男子の身長まづ五尺二三寸地方によると五尺六寸ぐらゐであるのです。ヨーロッパのスカンディナビア地方の人やアメリカ合衆國の人が自分等の大きな體に比較して小さいと云ひ出したのを他地方の者までが一緒に小さい小さいと云ひ傳へたものと思はれます。又このエスキモの衣服は多く毛皮でありましてむくむくして居ますから、着て居る者の背丈が見えろと云ふ事もある。これも低く思はれる一原因であります。

エスキモは、男女の容貌がよく似て居ります。場合によると男女を判別する事が困難であります。世間多數の人は、エスキモは極の野蠻人であると思つて居る様であります。固より開化して居るとも云ひ兼ねますが決して野蠻人の好例などいふべきものではありません。

男子は散髪女子は或は頭上に髻を結び或は頭後に髪を束ねて居ります。男子の身體裝飾としては、唇の兩脇に穴を明けて、シツのつゞみ釦の大きい様なものはめる事が行はれる。此飾りは海獸の牙又は石などで拵へるのであります。女子は頸又は頬のあたりに幾本かの跡を施して飾りとします。

衣服の原料は馴鹿熊などの毛皮又は羽根のついたまゝの鳥の皮であります。仕立方は筒袖と股引で、先づ洋服の如き形であります。上衣には作り付けの頭巾がありまして、これは男子のは小さいが女子のは大きい。婦人はこの袋の中へ子供をいれて背負ふこともあります。手には手袋をはめ、足には靴をはきますが、これらは皆毛皮でつくりまゝです。男女容貌も似て居ますが服装も似て居る。唯後から見た所では、女子の衣服の方が長い裾の部が伸びて居りまして、切れ目なしに細長く楕圓形に成つて居ります。

彼等の住んで居る様な所では耕作牧畜は無論出来ませぬ。食品は皆自然の供給を仰ぎまして、馴鹿、熊、魚、海獸などの肉を食ひます。植物性の食物は乏しく僅に、鹿茸と稱するものがあるばかりであります。寒い所で樹木が生えず薪が得られませぬからして、火を盛んに焚くことは出来ませぬ。肉類は生で食ひますが飲料に

困る。雪や氷はあるがそれを融かさなければならぬ。火は木と木との摩擦で出します。この木は海岸に流れつくのを探つて使ふのでありますから此たよいものでもあります。其火を燈火の様に點ける。即ち石を回めて作つた皿の様なものに海獸の油を入れ、馴鹿苔を心として、火をつけるのです。で、この火の上に雪を置いて融かすのですが、土鍋も無し、金属の鍋もありませぬから、獸の皮で袋をつくりまして、その中へ雪をいれて、上の方から吊ぶらすので、遠くから懸してぬくもりで融かすといふ仕掛です。

極北地方は一體に寒くはありますがそれでも季節によつて少し温和な時と極寒い時とがある。温和な時の住居は地面を掘り窪めて堅穴とし、中央に柱を立て、獸皮の天幕で覆ふのです。柱は流木又は鯨の骨などで作るのです。天幕の裾には石の錘つりを置いて、煽ふらない様に致します。

寒ひやくなると降り積んで固まつた雪を煉瓦形に切りまして、それを積立上げて椀を伏せた様な家を作るのです。

(二) アリウト。

アリウシアン (Aleutian) 又はアリウト (Aleut) といふ種族はカムチャッカとアラスカとの間

にある、アリウト島に居るものであります。

これもエスキモーによく似たものでありまして、まづ體格がよく似て居ります。それから言葉もよく似て居ると申すことであります。ロシアの待遇がわるく、その他諸種の事情のために、今日では千五百位の人數となつてしまひました。

服装はエスキモーによく似て居まして、毛皮の衣服を着るのです。頭には木或は獸皮でつくつた庇かさの大きい帽子をかひります。この帽子へ、獸骨に彫刻をしたものなどを飾りとして付けます。又海獸の鬚を集めて飾りとする事もあります。

住居はエスキモーのよりも大きい堅穴であります。長さ十五六間乃至五十間幅三間乃至五間ぐらゐの細長いものであります。屋根は木材を以てつくり、それに土をかぶせるのであります。

エスキモーもさうですが、此所の者もやはり數家族同居して居ります。

エスキモーもアリウトも今尚ほ石器時代の人民であります。極北地方の者はこれ丈として次に北太平洋部に移りませう。

ロ、北太平洋部

(一) アサバスカ (Athapaska or Athapasca)

人類學 人類現狀論 三、アメリカ系統人民

北太平洋部に属するもの、中、最北に位するもので、主としてアサバスカ湖のまはりにあるものを斯く稱へます。この種族は、尙東の方ハドソン灣より、西はカスケエド山、南はチアチル河とフレネル河の口をつないだ線を境として、その間にひろがつて居ります。

彼等自身はチンネエ(Chinneh)と稱して居ります。土人の言葉で人民といふこととあります。今一つの自称はサアインサアチンネエ(Sah-sah-dinneh)と申します。日の出の人民といふ意でありまして、自から誇つた名なのであります。恰かもインヌイトのことを他のものがエスキモーと呼ぶ如く、この南に居るアルゴンキム(Argonkim)種族がチンネエを稱してチベウエネアン(Chepenyan)と申して居ります。これは、角張り皮の意でゴワ／＼した皮を身に纏ふのを指したのです。

身長の高さは中等で、筋肉はよく發達して居まして、皮膚の色は重に褐色であります。が、一樣の色といふものはありませぬ。頬骨高く、頭の幅狭く、顔は廣い。

食用に供する獸を捕る時、杯多人數集つて聯合して働けば分配するとはあります。が、自身で得たものは他の人に知られない様に各々覺えをして隠して置きます。彼等も今尙ほ石器時代人民でありまして、又骨を磨いて器物をつくりなど致します。

こゝのものは己れの祖先は犬であると信じて居りまして、犬を大切にし、エスキモーの如くに使役させぬ。又犬を食ふとは致させぬ。

## (二) ダコタ

これはミチガンの湖よりロッキイ山のあたり、即ちミソリイ河の流域全體にひろがつて居るものでありまして、大別から申せばチンネエと同属であります。このものは合衆國人が屢々接するものでありまして、よくアメリカ土人の引合に出るものであります。この中には數多の小部落がありまして、多く生物の名を名として居ります。熊とか何とかいふ名であります。

ダコタには、アメリカインディアンに通ずる性が特に著しくあらはれて居ります。色赤く、顔の諸部分が削り取つて出來たと云ふ様な風になつて居ります。髪の毛は一體に長いのですが、特に勝れて長いのを貴ぶ。酋長を選ぶのにも髪の毛の長さで定める事さへある。或る酋長の如きは髪の毛の長さが十呎七吋あつたと云ふ事です。體格上注意すべきとは頭の形が潰した様なものもあり、押へ附けた様なものもあつてあります。これは赤見の時から押へ又は潰す様な風にする爲めでありまして、それがどの地方では左右より押しつける、どの地方では上から押しつけるなど、

いふ風にきまつて居るのであります。これは頭の傍に平らな物のを押し當て、作るものであります。そのもの爲めに、或方向への發達が妨げられていくの妙な形に出来て来るのであります。この頭の形を變るといふとは、腦に害を及ぼしはせぬかと疑ふ人も有りますが、事實害は無い様子であります。その證は、この地方に於て奴隸は頭をつぶすとを許されて居ませぬ、奴隸は賤まれて頭をつぶす權利を省かれて居りますが、その奴隸と普通の人民との間に智識の相違は認められぬのであります。

この地方の人民は、儀式の時には髪をのばしますが平生は之を結んで居る事がある。身體裝飾としては、先づ毛髮に鳥の羽根を挿すとが行はれます。もつともこれは男子の事であり、男子は又膚をいろ／＼に塗ります。顔を半分青くし半分赤くするなど、いふ妙な事をする。手足、軀幹まで塗るともあります。

着物は獸皮でこしらへます。男子は禪のみで居る事があり、ズボン様のものを穿く事があり、其上更に革を身に纏ふ事がある。恰かも車夫がケットを着た様な風にするのであります。この革には屢ば、畫がかいてあります。が其中には着て居る人の履歴を畫いたものがあります。故に人にあひますれば、その人の衣服を見て履歴を知る

を得る事があります。此着物は鹿、山羊等の皮から作るものであります。

食料としては元バイソンと申す獸の肉を盛に用ゐました。アフリカに居るバツフルウに似て居るものであります。が、バイソンとバツフルウとは全く別のものであります。バイソンは皮もいろ／＼の細工物の役に立ちます。身が重くて、雪中をあるくのは殊にむづかしい。故に平生も弓で捕ります。多くは雪中に捕ります。土人はカンジキをはきまして、雪の上を走りあるき、バイソンの急所を刺して捕へます。今日では段々バイソンの數が少くなつて來たとのどであります。その他の獸、鳥なども無論この邊でとつて、食用に供します。

嗜好品としては、烟草が盛に行はれます。烟草の本國でありますから、隨つて飲む儀式などが發達して居ります。その一の儀式に、煙を四方に吹き出して後自から吸ふといふ様な事を致す所もあります。煙管は往々石でこしらへたのがありまして、様々の裝飾を致し、又立派な柄をつけたのがあります。酋長の持つて居る煙管は、鴈首の背の方に、鉞がついて居ります。これは戦争と平和をあらはして居るものであります。まして開戦平和一手に在るとを意味して居ります。文明人から鐵製品を得て使つて居ります。以前は石製の品を用ゐたのですが、今では住居は重に天幕ですが、その天

幕は木を圓錐形に立て、獸皮を張つたものです。

一五二

今日では貿易を致します爲めに鐵器を有して居りますが、元來は尙石器時代にある人民でありまして、今日でも石器が用ひられて居ります。又この地方には、人を殺せば、そのしるしとして死者の頭髮をとつて皮で保存して置く風があります、よつて頭の皮をとる道具がいりますが、これにも元は石を用ひたのです。近年は鐵器を使ふとの事です。はじめは人を殺した證に死者の頭皮をとつたのですが、後には頭皮が欲しさに生死に關せず、これをとるといふ風が起つて來ました。人を倒して其者の肩へ自分の兩足をかけ髪をつかみ皮を切つてむき取るのです。土人のつよきものは、この災に遭ふても死なずに居る者があります。子供の時から草で鬘をこしらへて、それをとる稽古をするのがあります。

#### ハ、北太平洋部

北アメリカ太平洋寄りのもので、ロッキイ山の西側に居る者を總稱して斯く申します。ダコタと比較して見ますと、西方のもの、即ちこの部のは、鼻が平たく唇が厚く、頤が尖り、顔の幅は廣うございます。又ダコタ地はひげが少うございますが、この太平洋寄りのものは少し生えます、又ダコタよりもこの地方の人の方が、溫和で柔順で

陰氣で勇氣が少うございます。

例として、この地方の中のハイダ(Haida)といふものを挙げませう。これはウツクウツク附近にクインチャロットといふ島がありますが、そこ及びこれに接した地方に居ります。

身體裝飾として、下唇に穴を明けまして、一錢銅貨か二錢銅貨ぐらゐの大きさのものをはめて唇飾りと致します。身體はいろいろの繪具で塗ります、儀式祭禮などのときには鳥獸などの繪をかきます。犬の毛などで織つたブランケットの如きものを身に纏ひます。

此所の者もやはり石器時代の人民でありまして、石又は獸骨、海獸の牙などで器具をつくります。元來漁業を重にしたのですが、今日では農業を覺えまして、馬鈴薯杯をつくるやうになりました。

このウツクウツク邊の土人は、多く開化した人民に接しまして、その爲めに勞働者として使はれて居ます。従つて古風を存して居ると少く、他に化せられて居るとが多うございます。

#### 乙、中央部。



この中が又メキシコ土人地峽地方土人の二つに分かれます、共に昔は盛でありましたが今日は大層衰へました。古建築などから見ますれば、この地方の昔は殆どエジプトに次ぐくらいの高派なものでありましたが、今日ではヨーロッパ人に壓制せられて種もまじり固有の風を失ひ極むつまらぬものとなつてしまひました。メキシコあたりに住するものは、アズテックといふものでありまして、様々の美術品より社殿、ピラミットの如きものなどが今に存して居ります。銅、金、銀などの裝飾品もあります。但し利器は石器を用ひたのですが、殊に黒曜石を盛に用ひました。これらの石器には、短刀、鎌、獸皮をはぐ道具などがありまして、又美しい石を細く割りまして、寄石細工をも拵へたのであります。今日のメキシコの住民は、アズテック、インカ、黒人などがまじつて雜種人も出来て居ります。右に述べました様な立派な技藝も今日では失つてしまひました。

地峽地方の人民も、祖先に比較して見ると、衰へて居ります。今日はスペイン人がはいつて来て居ります。古建築古彫刻の立派なものなどが残つて居ります。金、銀、銅の裝飾品もありますが、實用の利器は石器であります。アマリカ中央部諸地方にある彫刻の間には、たしかに文字と見るべきものがありますが、其意は不明になつて

まだ讀める様になりません。

### 丙 南部。

#### イ 南太西洋部。

アンデス山と太西洋の間にあるものを斯く稱します。この近邊にはもとカリブ(Carib)といふ土人が廣がつて居りましたが、今日では南方へ逐はれて、數も少く、勢力もないものとなつてしまひました。カリブの風俗として著名なのは、人肉を食ふとてありまして、人肉を食ふと云ふ事をカリバル(Caribal)と云ひ出した位であります。今日カンニバル(Cannibal)といふのは、これから轉化したのであります。南太西洋部の代表として一二の系族の事を説きませう。

#### (一) バタゴニヤ人。

南アメリカの南端に居るもので、マゼランの一行がはじめてこの地にゆきました時、海岸で大きな足跡を見付けた爲めに此種族をバタゴネス即ち大足と名けたのであります。元來體が大きく、従つて足が大きい上に一種の底抜けの靴の如きものを着けますから大きな足跡がつくのであります。彼等自身はツォネカと申して居ります。

この人民は、からだの大きいとを以て有名であります。男子の生長したものの平均身長は五尺九寸もあります。體格上の性質をいへば、毛髪は多いが顔の毛は少く、眉毛の如きは殆んどありません。鼻は鷹の嘴の如く反つて居ります。髪は男女共伸ばして、亂れぬ様に鉢巻をして居ります。身にはグアナコといふ獸の毛皮をまとふて居ります。他には身體裝飾はありません。此獸の肉は食用にもなります。天幕の原料も此獸の皮であります。この獸は二十も三十も群をなして原野に居りますが、土人は長い紐の先へ石の玉を結びつけましてもとを一つに結んで二三本纏めたものを手に持ちぐるぐるまはして獸に打ち付けると、紐が纏ひつゝのて獸がひっくりかへる、斯様にして捕へるのであります。

土人の開化の度は極く低く、今でも石器時代の人民であります。

(二) フウシアン。

テラデルフウゴの土人は元テラデル、フーシアンと呼ばれたの、あります。今日は省略してフウシアンと呼ばれます。テラデルフウゴとは火の國といふとて、ありますが、こゝは寒い所であり、この名はあつゝい形容ではありません。はじめヌペイン人が來た時に、海岸で火を焚いて居るのを見て名けたのであります。

こゝの人民は、パタゴニア人の如く脊丈が高くはありませぬ。パタゴニア人よりも一層未開であります。世界中最も開けぬ者の一つであります。男子は眞裸體でありまして、腰のまはりも蔽ふて居りませぬ。唯雨雪の時杯に、海獸の皮を肩に掛けることがある位なものであります。女子は腰のまはりに物をつけることがあります。又身體裝飾のために、いろ／＼の土をぬりますが、その中白は戰のしるし、黒は喪中のしるし、赤は平和のしるしとして居ります。故に白い土を塗つて、居れば、敵意を含んで居ることを知るのであります。

家屋は、鳥の巢の如く樹木を寄せ集めた、けのものであります。頭髮は伸びたまゝにして居ります。

ロ、南太平洋部。

今日のチリ、ペルー邊に住つて居るものであります。こゝのものも以前は中々強くてヨーロッパ人に手向つた位であります。今日では衰へて仕舞ひました。

此地方にアラウカニンといふ土人が居ります。彼等自身はアラビセと申して居ります。土地の人民といふこととあります。パタゴニア人は、この人民をチンナと命名して居ります。これは、軍人といふこととあります。こゝの人民の氣質の荒い所から付

けたのであります。

毛髪は男女とも伸して居ります。衣服は極く簡單なものでありまして、とは自製の四角な布の中央に穴を明けて頭からかぶつて首を出したものであります。近頃はブランケットをやはりさういふ風にして着て居ります。

こゝにも種々の色の土で身を飾る事が行はれて居ります。常食としてはこの土地に産する玉蜀黍を用ひます。家は籠を伏せた様な形であります。

以上によつてアメリカ系統の者のことは一通り畢りましたから、次にはアフリカの方に移りませう。

#### 四、アフリカ系統人民

アフリカ大陸は地理上から申せば都合のよいまとまつた形をして居りますが、人種から申せば一つではありませぬ。先づ東方のマガカスカルにはマレーの種族が住んで居ります。し、北方地中海の南岸にはヨーロッパ系統に屬する者が居ります。これらを引き去つた残りの者が固有の土人であります。もつとも今日では南方にもヨーロッパから來た者が居りますが此所に述べやうと云ふのは固より舊來の種族に付いての事でありませぬ。

古くからアフリカに居た土人には、全體に通ずる性質があります。即ち皮膚の色の黒味を持つて居ること、髪の毛のちぢれて居ること、鼻の幅の廣いこと、これが通性でありまして、その他は地方地方によつて違ひがあります。地方地方の別を申せば、この南方アフリカ系統人民は、まづ三つに大別せられます。一をネグロと申し、二をネグロイド即ち準ネグロと申し、これは東海岸にひろく廣がつて居ります。がネグロほどひどく黒くはありませぬ、髪もネグロほどはちぢれず、鼻もネグロほどは押しつぶした様でありませぬ、即ち純粹のネグロの性質をゆるめた様なものであります。三をネグロ即ち小ネグロと申し、アフリカの中央から南方にかけて居るもので、からだが著しく小さくて、全體の性質はネグロに似て居ります。まづネグロの事から申しませう。

#### 甲、ネグロ(Negro)

ネグロはアフリカ系統人民の通性を具へて居る外猶様々の特徴があります。まづ顔の下半分が前に突出して居る、これは口が大きい即ち齒が大きくて顎が大きくて爲めでありませぬ。それから皮膚の色が眞黒く、實に墨の如くに黒い。唇は厚く、紅をつけた様に眞赤であり、まして齒はまことに白く美しい。又皮膚に一種の惡臭があ

ります。

この人民はよく野蠻人の例にひかれるものでありますが實際は、アフリカ土人中さう開化の低い方のもではありません。廣く諸人種を見ればモット開けない者が幾らもあります。

ネグロの部類で著名なもの一つはダホメ人です。

其隣りのリベリアには黒人が澤山居りますが此國は彼等自から建てたのではありません。アメリカに於て奴隸開放論がやかましくなりましたので、奴隸をアメリカに返しまして、開化した人民が之を指導してこの國をなしたものであります。

ダホメを一例として黒人の風俗を述べませう

毛髪は男女ともちりちりして居りますからして伸ばしても致しません。伸ばせば伸ばせば致しません。豆粒の様に頭にかたまつて居るのであります。皮膚の色が黒い故に入れ墨は行はれません。それが似たことがあります。名を付ければ疵飾りとも云ふべきものであります。皮膚を刃物で傷つけ、蛇蝎腫の様なものが出来て高くなる様にして、そこへ土杯を擦り込んで傷のなほらぬ様に致します。それが堅まると浮き彫りの様になります。顔にも腕にも胸にもこれをつくります。この裝飾は各、勝手に致しますが、

亦自から地方によつて一定した、いふが、あります。どういふ裝飾はどの地方のもの、とわかるのであります。

衣服はありますが面倒な縫ひ方をしたものでは無く唯廣い、それを身に巻くのみであります。もとは自製の布を用ゐたのですが今日では開明人から質のよい布を得て用ひます。ヨーロッパから来るガラス玉の様なものも裝飾として用ひられます。

家は土を厚く塗つて籠の様に築き上げて、その上に屋根を載せたものです。土の崩れぬ爲めに、中へ貝殻をいれ、又シヤポテンをば根のからまり合ふ様に植ゑたのもあります。

農業牧畜も何分か知つて居ります。儀式などのことは中々むつかしく、社會の階級も判然立つて居て高い地位の人と地位の低いものとは取、べきがなくては話しても出来ぬのであります。

ダホメの社會組織を云ふと首領が二人あるのです。一人は都會の王と申し、今一人は地方の王であるのです。都會の王は宣戰講和の權を持つて居ります。地方の王は農業などを司ります。兵士は男子も無いではありません。先づ女が主であります。未婚者又は一旦人の妻になつたもので夫婦争ひをし勝て別かれたもの、又

夫あるものでも王のゆるしを得たもの、これらが兵士となるのであります。しかし重に未婚者であります、女兵中には、帝王の妾の様になつて居るものもあります。人民はこの女兵を尊んで、母と呼びます。

一人と一人との争ひの集まりが戦争なのであります。隊を組んでどう運動するかと云ふ事はありません。今日では不完全ながらも、彼等自身で鐵砲をこしらへます。又古くから金属の刃物をこしらへることを知つて居たのです。この刃物の中に西洋剃刀かきと同じ様な形をして居て、長さ四尺ほどの物があります。

戦争中敵を殺しました時は、殺人殺したかを互に誇るのであります。その多少を明かに示す方法があります。即ち頭の皮を髪とともにむしりとりつて来て、身體裝飾や室内裝飾にするのであります。女兵間では此類の飾りの多いのを名譽として居ります。近頃は鐵砲を用ひますので人を殺せば鐵砲の臺に死んだものゝ血を塗りつけさうしてその血が膠ねりの様になつた時分に子安貝を一つくっつけます、その貝の數によつて殺人殺したかを知ることが出来るのです。

一體ダホメ人は人を殺すことを好みますが、しかし時がきまつて居るので無暗に殺すのではありませぬ。祭や儀式のときなどに、兼ねてその時の入用のために蓋

へて養ふてある人をぼん／＼殺します。何十人何百人の多きに達する事があります。又天子の崩御の時にも、多數の人を殺します。戦争の時に敵を殺してもしますが、又捕虜にもします、それを此目的の爲めに養つて置きます。又罪人も獄に入れて置きます、この時に當つてこれらのものを殺すのであります。殺すまでに成るべく、よいものを食はせて太ふらせて置くのであります。而してこれを殺すには、高い石垣の上などにつれてゆきまして、石垣の上から投げ落します。頭たまに一種のかぶりものを着せまして、籠の様なものに入れて、石垣の上から落すのであります。さうしますると下には人が待つて居まして、首を落し且つ手足を切り、肉をとり骨のみとします。其後此骨を家の飾りと致し、又道具の飾りと致します。

ネグロは一體アフリカが原住地でありますが、アメリカに移住したヨーロッパ人が労働者が無くて困つたので、アフリカからネグロをつれてゆきました故に、ネグロはアメリカにも澤山居ります。

奴隸解放は表面は行はれて居りますが、まだ／＼白人は黒人を同等とは見ないのであります。雜種三四代も経たちますればはじめて白人と同權を持つ様になります。それがそれまでは白人は同等と見ませぬ。白人の血統の混じかたの妙いものは色

が幾分か黒うございますが混じかたが多くなりましても、ネグロの血を享けて居るものは、爪の生え際の所を見れば直ぐわかります。それが見えぬ様になれば白人と同等に見做すといふ譯になつて居ります。知識の度は如何と云ふに相當の教育を受けた者は中々、らしい者になつて居るのであります。

## 乙、ネグロイド (Negroid)

ネグロイド即ち準ネグロは、東方に居るものであります。ネグロの性を淡くした様なものであります。色の黒さも甚しく無し毛髪の縮れも少いので有ります。髪は小兒の中は伸ばしたまゝでありますが、男子は生長しますれば、頭のまはりを剃り、又中を剃つて輪の様なものを残しまして、そこにながの様なものをやにて堅めつけるのであります。この輪のどをイシッコと申します、これをつけますれば一人前であるのです。毛か伸びて来ますと、この輪がぐらくしするか、人の前へ出るときに、輪の揺ぐのは失禮だからと申して、解いてあらためてつけるのであります。

未婚の女子は、毛髪をいくつも堅めて尖らせて置きます、即ち圓錐形の様な尖つたものをいくつもいくつも頭上につけて、飾りとしてはこれに山あらしの毛をつけるのであります。

妻となりますれば、毛髪を一まとめに固めて一つの圓錐形としてしまひます。

衣服としては獣皮の大なるもの、又は小さい獣皮をつなぎ合はせたものを肩にかける位などは致します。

このネグロイドの重なるものを申せば、アマゾンガ、アマツウルウ、アマスワアジアマボンガ、アマコサなどてあります。アマとはアフリカのこの邊の言葉で複數のしるしてあります。例へばアマツウルウはツウルウ部落といふとであるのです。一個人をさすときはツウルウと申します。他も之に準ずべきものであります。人類研究者はこれらの諸部落を總括してパンツウと申します。これは土語の人類といふ事から出たのであるのです。又カプアの名を以て呼ばれるともあります。これは回々教徒が命じた名でありまして、信者といふとであります。

男女ともに腰のまはりには必ず蔽ふて居ります。男子は細い帯をしまして、それから腰の前後を蔽ふものをつけて居ります。それは獸の尾を束ねて作るのが正式であります。多くの獸の尾が得られぬときには、獸の皮を細く切つて下げるのであります。女子は前の方へ五寸四方ぐらゐの革を前垂の様に下げます。下の方の狭い四角形でありまして、これには南京玉を、しり縫ひ附けて美しくしたのがあり

ます。

家は木を寄せ集めて蝙蝠傘の骨の様に致しましてそれに蓆様のものや植物の葉杯を被ぶせて拵へるのであります。中には何十人もはいれるものがありますが、構造形状は何れも同様であります。入口には牛の頭骨を飾としてあるのがあります。この邊では牛を飼ひますが、大饗宴の時でないければ殺しませぬ。平常は乳ばかりを取つて居ります。牛肉は極めて御馳走なのであります。故に牛を殺した家では、夫れを自慢に頭骨を飾りとして置くのであります。

準ネグロは頭の輪も丸いが家も丸く村落も丸うございまして、丸い家が輪の形に並んで居ります。その外に、人の背丈より高い垣をまはしまして、村の入口は、一方にしか作つてありませぬ。中央の廣い地面は、丸い垣根で取り圍まれて居ります。その内外二つの輪の間に丸い家が並んで居るのであります。中の垣根は人の背丈よりは低く、立つてあるけば垣根の中が見える様にしてあります。

村の酋長は、入口の正面の最も奥に出来て居る家に住み、最も賤しいものは入口の所に住んで居ります。中央の原は、村中の牛を飼ふてあります。

食物に付いては自然の供給も仰いで居ります。農業も知つて居ります。玉蜀黍

黍をつくりまして粉につぶしてパンの様にして食べます。牛乳は幾日か置いて、すばくして、一種の酒の様にして飲みます。この地方には、蝗の類が折々発生しまして、數時間のうちに作物を盡して仕舞ふとがあります。これで土人は損をしますが、しかしその代りに虫が澤山死にますからそれを拾つて來まして食物にします。

### 丙、ネグロ(Negrito)

ネグロ即ち小ネグロは、背丈の低いものであります。アフリカ内地に小さい人間が居るといふとは、昔から知られて居りまして、古くヘロドタスの書いた物の中にもあります。然るにある時代には、内地探險の時に、この小さい人種を見出し得なだ爲めに、一時さういふ人種は無いといふとになりましたが、近頃又有るとが知れて來ました。ヘロドタスの記事は、北緯十八度の所までには、至つて居らないのであります。今日は其邊に小さい者は居ないが、北緯二度から南の方には居るのであります。昔はもと北の方に廣がつて居たのであります。

是等の中には成長した男子でも僅かに三四尺と云ふ様なものが有るのです。色や毛や顔付きはネグロに似て居ます。腰のまはりに少しばかりのものを附けるとはありますが、着物と云ふ程のものは一向ありません。金屬細工は他の事に比して巧

みて身には多くの金剛製裝飾を着けて居ます。住居は簡單な小屋掛けて食物は多く自然の供給に仰いで居ります。

小ネグロの中でも南方に居る者は稱々大い方ですが併し他の種族に比べれば小さい。ホッテントット、ブシマンなどいふ名高い種族は此部に屬するのです。

ブシマンと云ふのは、オランダ人が付けた名から轉じて來たのです。其厚語はオスジエスマンス即ち森の人と云ふ意なのです。家はネグロイドと同じく丸うございます。繪を實用に用ひる事は有りませぬが、山間の岩や路傍の石に樂書さします。がなかく巧なものであります。木の根や草の根を堀る爲めに、一種の道具を持つて居ります。それは尖つた棒でありまして、それへ石の中央に穴を明けて鐮の様な形にしたのをはめ力を添へる爲めの重りとするのです。この石の輪の出來損なひや割れたものなどが、ブシマンの遺蹟に殘留して居ります。従つて此石器の存在に由つてブシマンの過去の分布の有様を推測する事が出來ます。

ホッテントット種族は、大抵ブシマンと同じ地方に住んで居りますが、ブシマンは黒くホッテントットはやゝ黄色であります。顔は正面から見ますと、菱形を作して居ます。腹が突き出て背が凹んで、尻が後に突き出て居ります。彼等自身にはホッテントットと

はいはず、クワクワとか、コイコイとか申して居ります。人類といふ意味であるのです。ホッテントットといふ名は、近傍の種族がこのもの、口癖をまねてつけたといふとてあります。彼等は妙な發音を有して居ります。ラ行とカ行に、息を中へ吸ひ込みながら出す音があるのです。ブシマンよりはやゝ進んで居るのであります。様々の系統の人民のある中で、最も特徴を具へて居つて、著しく識別し得るものはこのアフリカ系統人民であります。

### 五、海岸島嶼住民。

以上によつて四系統人民のとは、濟みました。残つて居るのは南洋諸島、フィリストラリア、フイビン、マレー、印度の一部などのものでありまして、これらは前掲の四類に漏れたものであります。追々研究の結果、所屬が明らかになりませうが、今日では不明であります。故に總稱して海岸島嶼住民と申し置きます。

この中をわけて見ますれば、一つはネグリチック、一つはマレエック、一つはフィリストラリックの三つに成ります。

#### 甲、ネグリチック。

ネグリチックを又こまかに申しますると、一つはネグレットと申して、ベンガル灣のア



ンダマン島に住んで居ります。今一つはバプワンと申して、ニウギニイの住民であります。又メラネシアンと申すのは其東に居る者であります。これらはやゝアフリカ土人に似た所がありますのでネグリチックと申すのであります。

イ、ネグリト。

アンダマン島に住んで居るものやフリピン諸島中に居るアエタ杯がこの部に入ります。これらの人民は、アフリカのネグロに、よほどよく似て居ります。ネグロとはスペイン語で黒と申す言葉でありますが、アエタと申すのもマレー語で黒と申すのであります。

ネグリトは、からだの小さうございまして、男子の生長したのも五尺に達するものは尠うございます。色は黒く、髪はちぢれてひげは殆どありません。鼻は平たく、頭の下半分が前方に突出して居ります。

開化の度は極く低く、衣服は定まつたものはありません。時として獸の皮などを纏ひ、又は草でこしらへた簡単な腰履ひを着けて居ります。家屋は簡単な小屋掛け、食物は自然を頼り、利器は石を割つてつくりまします。

ロ、バプワン。

ニウギニイに重に住んで居りますもので、その東及び西の小さい島々に廣がつて居ります。皮膚の色は黒いから濃い褐色に至るまで、いろ／＼あります。髪はちぢれて居ながら長うございます。故に頭全體に大きな玉の襟に成つて居ります。それがふ／＼して居ります。マレー語でかういふ様なものをプアプアと申します。これが轉訛してバプワンといふ種族名となつたのであります。鼻は高くして凸に反つて居ります。口は大きく唇は厚い。

開化の度は、ネグリトよりは高うございます。衣服は定まつたものはありません。腰のまわりに蓑の様な物をつけて居ります。身體裝飾として男子は、鼻の穴の境の所へ孔を開け、ペン軸の様な長い棒を挿します。

食物は自然の供給を仰いで居るのであります。菓物魚類などが多うございます。住居は、いろ／＼あります。普通は地上に建て、床が高く、床下を通行するものが出来るもので、上り下りには梯子を用ゐます。今一つは、木上住居であります。これは物見の用をなしますが、又他部落と戦ふたりする時には、女子供の隠れ場所とも致します。此木上の家屋には、石を貯へて置く事がありました。下から敵が上つて来やうと致せば、それを防ぐ爲めに、此石を上から投げるのであります。それから今一

つは海中に杭を打ちまして其上に家をつくるのです即ち水上住居であります。この水上住居は群をなして作られて居ます。家から家へは渡り歩ける所もあります。又船に由つての往復もあります。

利器としては、まだ石器を用ひて居るのであります。

#### ハ、メラネシアン。

南洋のフィジー、ニューカレドニア、ニューヘブリデス、ニューブリテン、ニューアイルランド、これらの土地に住んで居る者をメラネシアンと申します。

農業を知つて居りまして家を永住のつもりに立派につくつて居ります。裝飾なども施してあります。石器を用ひては居りますが、中々立派にこしらへます。又土器をつくるとを知つて居るものもあります。

この土地には、昔から人肉を食ふ風があつたのですが、今日でも全く絶えたとはい兼ねます。身には篋の様なものを纏つたり、又は木の皮を水で晒して引き延ばして作つた厚紙の様なものを着たりして居ます。

#### 乙、マレーイック。

マレーイックを又こまかにわけますと、一をマレーアン、一名マレーと申しまして、

ジャヴァ、ボルネオ、マダガスカルあたりに居ります。今一つをポリネシアン、一名東マレーと申して北はハワイより、南はニュージイランドに至るまでの間に居ります。マレーイックの分布は此の如くまことに廣うございまして西はアフリカのマダガスカルより東はアメリカに近いイースタアアイランドまで廣がつて居るのであります。かやうに隔たつては居りませんが、體格も言語もよく似て居ります。

此等の者は背丈の高さが中等、皮膚の色は黄色味或は褐色を帯び、髪の毛は黒くて真直であり、ひげは極く勘うございます。多くの點に於てはアジアの大部分のものに似た所があります。

#### イ、マレーアン。

最も西に居るのはマダガスカルの住民で有ります。マダガスカル島には、アフリカ大陸から移つて來たものもあります。中央に居ります重なる一種族はホバと申してこれは東方のマレー地方の者に似て居ます。東方の重なる一例はジャヴァ人であります。

ジャヴァ人はスマトラやボルネオの者よりも開化の度が高うございます。髪は男女とも後頭部に於て鳥渡結んで置きます。女子は飾りとして花を付ける事が有りま

す。男女とも幅三四尺ぐらゐの長い布の両端を縫ひ合はせて、大きな底抜け袋の様なものをこしらへ二重の儘で腰に纏ふて居ります。上半身にはシャツの類を着ける者も有ります。女子は手拭の様なものを肩から掛けて居るとが有ります。踊を踊る時などは、これを持つて振るのです。男子は刀をさしますがこれをクリスと申します。男女共耳朶みみかたに穴を明けて、太い棒を通して飾りとします。長さは一寸か一寸五分のものでありまして、西洋糸巻の様に両端が太く、真中まんなかが狭いものであります。その太い所には金剛や石で立派な飾をつけたのがあります。

ジャワの人は木や竹で作つてありまして一體の構造が日本の家に似て居ります。ロ、ポリネシアン。

ポリネシアン即ち東マレーのものは、身體が大きうございまして、六尺の上うへに及ぶものも屢認められます。皮膚の色は淡褐色で髪かみの毛は黒くて、或は鉤形になり或はちぢれて居ります。

このポリネシア人民の分布はまことに廣うございしますが諸所に存する口碑で古來の移住の事も分かり従つて互の關係も察せられるのであります。

それらを總括して見ますと、西曆紀元の始めの頃センベスとニューギニーの間の邊

が是等種族のもとしてありまして、カロリン、ソロモンなどの群島を経て、南洋のサモア中のサバイトンが等の島に移り、これを第二の中心として、それから諸所にひろがつた様のもとの考へられます。一例として、ニュージイランドの土人のとを申しませう。ニュージイランドは、フィーストラリアの東方にある大きな島でありまして、土人は自から稱してマオリと申して居ります。マオリとは土人の言葉で光の子ひかりのこといふ意でありまして、誇つた名であります。

鼻は弓形ゆかりかみに凸こぼに反り皮膚は茶褐色であります。肌はやはらかでありまして、且つ滑なめらかであります。髪は故らにちぢらせる様にして居ります。ひげは自然には生はえますけれども抜き去ります。男子が顔に入れ墨をする事は昔は盛でありましたのでその邪魔にならぬ様にひげを抜いたのであります。今日では入れ墨の風が衰へたと共にひげを生やして居るものもある様になりました。今は斬髪が普通であります。以前は鬘まげを結むすひました。

女子は口の周りに、少し入れ墨をする計りです。髪は延ばして垂れるのです。男の入れ墨に付いて云ひますれば額おでこには扇の骨の様に、二三本筋を入れ、頬及び口の左右に渦卷うずまきをつけ、又口の横には鼻から顎あごへかけて筋を引く、これだけは何人も皆大體

に於て一致して居りますが、しかしその線の尖端や線と線との間の所は人々によつて違ひます。故にこの入れ墨は、人々の顔を識別する役に立ちます。

家屋は木造で可なり立派にこしらへます。

この土人の衣服は、植物の織緯を編んで作つた蓆の様なものです。からだにつける裝飾としては男子が頭に鳥の羽根をつけるとがあります。殊に遠方の珍らしい鳥の羽根をつけるとを誇る風があります。耳にも穴を明けて飾を下げます。又頸のまはりに紐を結んで、その中央から石で造つた人形を下げます。これをチキと申します。奇妙な胡座こざをかいて居る人形でありまして、頭を傾けて居るものであります。日用の利器にはまだ石器が行はれて居ます。

臺灣に居る蕃人は、體格上の性質から云つても言語の組み立てから云つても明らかにマレーの中に入るべきもので、しかもマレーアンの中にはいるべきものであります。等しく蕃人と云ふ中にも七つ八つの別が有りまして總て一樣に云ふ譯には行きませんが、先づ大體を述べて見れば頭髪は男女共延ばして結ぶが常。北方の者は面に入れ墨をする。耳飾りには色々有りますが、太い筆の軸の様な棒を通す事がある。腰の邊しか覆はない者も有るし、陣羽織じんうぎ様のものを着る者も有り、其他種々の

形の衣服が行はれて居る。農業の心得も有り又土地に應じそれ／＼適當な家を造る事を知つて居りますから未開と云つても甚しい野蠻では有りません。先を急ぎますから遺憾ながら精しい事は省きます。

以上を以て海岸島嶼住民に關する話しは終りと致します。これで先づ世界現住民の事は一通り述べた譯であります。固より十分ではありませんが人類は地方地方に由つて如何に其體格風俗を異にするかと云ふ事の大概は申した考へて有ります。尙ほ引き續いて研究すべきは斯かる人種の相異と云ふものはどうして存在するので有るかと云ふ事及び人類と云ふ者が此世に生存して居る其來歴如何と云ふ事でありませぬ。是等に關聯した部分的の問題は算へ挙げ切れませんが總括して見れば人類の山來に關する事に他ならぬのでありますから、これを人類由來論と稱します。

本講義の始めに於ては總論と云ふべき者を述べ次に本質論から現状論へと進み今やこれを終へて由來論に移らうとし其原稿も略ぼ整つて居るのであります。講義録は紙數の都合により今回のものを以て最尾とするとの事故、遺憾では有りますが、止むを得ず切るとすれば先づ此邊が丁度好い句切りなのであります。併し趣味

62  
402

のある人類由來論が省かれてあるとの事は讀者に於て承知有らん事を希望致しま  
す。

人類學終

平島十村三九二  
9/13/9

